ISSN 1882-9775

奈良市埋蔵文化財調査年報

平成25（2013）年度

奈良市教育委員会

2016

奈良市埋蔵文化財調査年報

平成 25（2013）年度

奈良市教育委員会

2016

DA 第 133 次調査　出土唐三彩陶枕

DA 第 133 次調査　唐三彩陶枕　四弁花紋とその他の紋様

ガラス製品

金糸

水晶製品

DA 第 133 次調査　ガラス製品・金属製品・石製品

DA 第 133 次調査　壁画片

例　言

1．本書は、平成 25 年度に奈良市教育委員会が実施した埋蔵文化財に関する各事業の概要を収録したものである。
ただし、平成 25 年度に実施した調査のうち平城京跡第 667・668 次調査については、 次年度以降に報告の予定であるため本書には収録していない。
また、平成 20 年度に実施した平城京跡第 608-2 次調査・平成 22 年度に実施した平城京跡第 630 次調査・平成 24 年度に実施した平城京跡第 663 次調査については本書に収録した。

2．平成 25 年度の埋蔵文化財に関する各事業は下記の体制で実施した。

奈良市教育委員会事務局　教育総務部
文化財課
課　　長　　中井　公
課長補佐　　岩坂七雄
文化財総務係
係　　長　　松石明久
主　　任　　久保邦江
主　　務　　大窪淳司
埋蔵文化財調査センター
所　　長　　森下惠介
所長補佐　　篠原豊一　三好美穂
調査グループ
主　　任　　原田憲二郎　松浦五輪美　池田裕英
主　　務　　原田香織
技術職員　　牧田梨津子
嘱託職員　　宮本賢治　湯本　整
保存活用グループ
主　　任　　鐘方正樹　中島和彦
主　　務　　池田富貴子
企画総務グループ
事務職員　　松村健次
主　　務　　山前智敬
再任用職員　酒井真弓
岩手県　陸前高田市　派遣　主任　安井宣也（平成 25 年 4 月 1 日～平成 26 年 3 月 31 日）
宮城県　多賀城市　　派遣　主任　宮崎正裕（平成 25 年 4 月 1 日～平成 26 年 3 月 31 日）

3．発掘調査、出土遺物整理、保存活用等の各事業に関しては、奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所、独立行政法人奈良文化財研究所、奈良市文化財保護審議委員会などの関係諸機関よりご指導とご協力を賜った。ここに記して謝意を表する。

4．各発掘調査の次数は、奈良市教育委員会が実施した調査に付した遺跡ごとの通算次数となっている。遺跡の略記号は下記のとおりである。
ＨＪ　平城京跡　　ＤＡ　大安寺旧境内　ＧＧ　元興寺跡　　ＳＤ　西大寺跡
ＭＫ　南紀寺遺跡　　ＮＹ　平城山窯跡群

5．古墳時代以前の遺跡については、仮に大字名を付して遺跡名としたものがある。

6．本書で使用した遺構番号は、一部を除いて調査ごとに付した仮番号である。遺構等の番号の前には、その種類に応じて以下の番号を付した。

ＳＡ（柱列・塀）　ＳＢ（掘立柱建物）　ＳＤ（溝・濠・溝状遺構・暗渠）　ＳＥ（井戸）
ＳＦ（道路）　ＳＫ（土坑）　ＳＸ（その他）

また、遺構の大きさの数値は、すべて遺構検出面での計測値である。

7．本文中で示した過去の調査の実施機関は、調査数の前に下記の略記号を使用し表記した。

国　―　独立行政法人奈良文化財研究所（旧奈良国立文化財研究所含む）
県　―　奈良県教育委員会　および　奈良県立橿原考古学研究所
市　―　奈良市教育委員会

8．本書で使用した遺物名称・形式・型式は、一部を除き下記の刊行物に準拠した。

奈良時代　軒　瓦：『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』奈良市教育委員会　1996
土　器：『平城宮発掘調査報告書Ⅶ』奈良国立文化財研究所　1976
『平城宮発掘調査報告書Ⅺ』奈良国立文化財研究所　1982
古墳時代　須恵器：田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981
弥生時代　土　器：『奈良県の弥生土器集成』奈良県立橿原考古学研究所　2003

9．発掘区位置図については、奈良市発行の「大和都市計画図」（1/2,500）を、また調査地位置図については、国土地理院発行の 1/25,000 の地形図を利用した。

10．本文中において示した位置の表示値は、平面直角座標系第Ⅵ系（世界測地系）の数値である。なお、座標値の表・図中の標記については単位（m）を省略した。

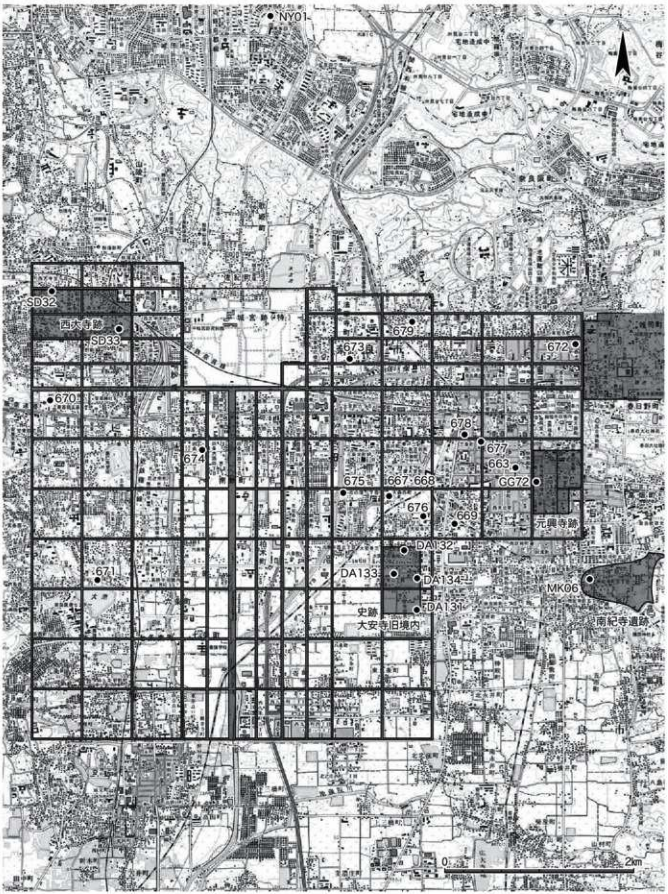
11．この報告に関する調査記録・出土遺物は、奈良市埋蔵文化財調査センターで保管している。

12．執筆は、当該調査と遺物整理を担当した埋蔵文化財調査センター職員が分担し、文責は各調査報告の文末に記した。

13．本書の執筆および編集は平成 27 年度に行い、埋蔵文化財調査センター所長森下惠介、所長補佐三好美穂の助言を得て、中島和彦が編集を担当した。

目　次

巻首図版……Ⅰ、Ⅱ
例言・目次……ⅰ～ⅴ
第１章　平成 25 年度埋蔵文化財調査概要報告 …… 1
　1．ＪＲ奈良駅南特定土地区画整理事業に係る発掘調査…… 2
　　平城京跡（左京五条四坊二坪）の調査　第 608-2・630 次…… 3
　2．近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業に係る発掘調査…… 9
　　西大寺跡（西大寺寺地）の調査　第 33 次 …… 10
　3．平城京跡（左京四条六坊十一坪）・奈良町遺跡の調査　第 663 次 …… 13
　4．平城京跡（左京五条五坊六坪）の調査　第 669 次 …… 26
　5．平城京跡（右京三条四坊九坪）の調査　第 670 次 …… 28
　6．平城京跡（右京六条三坊十二坪）の調査　第 671 次 …… 29
　7．平城京跡（左京二条七坊十六坪）・奈良町遺跡の調査　第 672 次 …… 32
　8．平城京跡（左京二条三坊七坪）の調査　第 673 次 …… 41
　9．平城京跡（右京四条一坊九坪）の調査　第 674 次 …… 45
　10．平城京跡（左京五条三坊一坪）の調査　第 675 次 …… 46
　11．平城京跡（左京五条四坊十四坪）の調査　第 676 次 …… 49
　12．平城京跡（左京四条五坊十六坪）・奈良町遺跡の調査　第 677 次 …… 51
　13．平城京跡（左京三条五坊十二坪）・奈良町遺跡の調査　第 678 次 …… 53
　14．平城京跡（左京一条四坊十一坪）の調査　第 679 次 …… 55
　15．史跡大安寺旧境内の調査…… 57
　　（1）講堂地区の調査　第 133 次 …… 58
　　（2）花園院推定地の調査　第 131 次 …… 68
　　（3）賤院推定地の調査　第 132 次 …… 69
　　（4）苑院推定地の調査　第 134 次 …… 71
　16．元興寺跡（西南行大房）・脇戸古墳・奈良町遺跡の調査　第 72 次 …… 73
　17．西大寺跡（西大寺寺地）の調査　第 32 次 …… 75
　18．南紀寺遺跡の調査　第 6 次…… 76
　19．平城山第 12 号地点第 3 号須恵器窯跡の調査　第 1 次 …… 78
　20．平成 25 年度実施　小規模調査・試掘調査一覧 …… 83
　21．平成 25 年度実施　踏査一覧 …… 83
　22．平成 25 年度実施　工事立会一覧 …… 83
第２章　平成 25 年度保存活用事業報告 …… 91



平成 25（2013）年度　発掘調査位置図（過年度調査で本書報告分を含む　1/40,000）

平成 25（2013）年度　奈良市教育委員会実施　埋蔵文化財発掘調査一覧

№	調査次数	遺跡名	調査地	調査期間	調査面積（㎡）	担当者	事業者	事業内容	事業区分	届出受理番号
1	HJ667	平城京跡（左京五条四坊一坪）	大森西町 176 他	H25.5.14～H25.8.29	1040	池田・宮本・湯本	奈良市長	ＪＲ奈良駅南特定土地区画整理　社会資本整備総合交付金事業	公共	H12.3145
2	HJ668	平城京跡（左京五条四坊一坪）	大森西町 180 他	H25.5.13～H25.9.26	1217.7	原田・牧田・湯本	奈良市長	ＪＲ奈良駅南特定土地区画整理　社会資本整備総合交付金事業	公共	H12.3145
3	HJ669	平城京跡（左京五条五坊六坪）	西木辻町 67 番地	H25.6.10～H25.6.25	110.3	原田憲	奈良市長	中学校給食室建設事業	公共	H25.3052
4	HJ670	平城京跡（右京三条四坊九坪）	菅原町 614 他	H25.7.29～H25.7.31	20	松浦	株式会社明利建設	宅地造成	原因者	H25.3114
5	HJ671	平城京跡（右京六条三坊十二坪）	六条一丁目 421~27 地先	H25.9.9～H25.10.2	255.5	原田憲	奈良市長	西ノ京六条線道路新設工事	公共	H25.3076
6	HJ672	平城京跡（左京二条七坊十六坪）・奈良町遺跡	今小路町 29 番 1	H25.9.27～H25.11.13	260	池田・宮本	個人	老人福祉施設新築	原因者	H25.3486
7	HJ673	平城京跡（左京二条三坊七坪）	法華寺町 328-1 他	H25.12.2～H25.12.10	150	松浦	セイワホーム	宅地造成・農地造成	原因者	H25.3186
8	HJ674	平城京跡（右京四条一坊九坪）	四条大路四丁目 33 番 1	H25.12.24～H25.12.25	19.7	原田憲	ヤマトラ	宅地造成・資材置場造成	原因者	H25.3352
9	HJ675	平城京跡（左京五条三坊一坪）	恋の窪一丁目 595 番 1・5	H26.1.7～H26.1.17	84	松浦	積和不動産関西株式会社	宅地造成	原因者	H25.3336
10	HJ676	平城京跡（左京五条四坊十四坪）	大安寺六丁目 779 番	H26.1.14～H26.1.23	108	池田・宮本	積和不動産関西株式会社	宅地造成	原因者	H25.3354
11	HJ677	平城京跡（左京四条五坊十六坪）・奈良町遺跡	下三条町 27-1	H26.2.3～H26.2.19	153	池田	京都中央信用金庫	店舗新築	原因者	H25.3325
12	HJ678	平城京跡（左京二条五坊十二坪）・奈良町遺跡	油阪地方町 1-1 他、油阪町 1-131 他	H26.2.24～H26.3.3	83	松浦	新星和不動産株式会社	共同住宅新築	原因者	H25.3272
13	HJ679	平城京跡（左京一条四坊十一坪）	法蓮町 618-1 他	H26.3.14～H26.3.18	30	池田	株式会社アイ・エスコーポレーション	宅地造成	原因者	H25.3429
14	DA131	史跡大安寺旧境内	東九条町 1374 番 1 他	H25.6.10～H25.6.26	30	松浦	個人	個人住宅新築	緊急	H26.1140
15	DA132	史跡大安寺旧境内	大安寺四丁目 1086 番	H25.8.27～H25.9.3	35	松浦	個人	個人住宅除去および新築	緊急	H26.1022
16	DA133	史跡大安寺旧境内	大安寺二丁目 1309-2	H25.12.16～H26.1.24	147	原田香	奈良市長	大安寺小学校旧校舎解体およびバンビホーム新築	公共	H25.1078
17	DA134	史跡大安寺旧境内	大安寺一丁目 1241 番 1 の一部	H26.3.3～H26.3.18	99	原田憲	個人	長屋新築	原因者	H25.1084
18	GG72	元興寺跡・脇戸古墳・奈良町遺跡	脇戸町 3 番地	H25.7.8～H25.7.9	4.2	原田憲	奈良市長	奈良市杉岡華邨書道美術館収蔵庫増築工事	公共	H25.3067
19	SD32	西大寺跡	西大寺野神町一丁目 6 番 1 号	H25.7.22～H25.8.1	105.6	原田憲	奈良市長	中学校給食室建設事業	公共	H25.3308
20	SD33	西大寺跡	西大寺南町 33	H26.1.14～H26.2.21	223	原田憲・湯本	奈良市長	西大寺駅南地区土地区画整理事業	公共	S63.3056
21	MK06	南紀寺遺跡	南紀寺二丁目 275 番 1	H25.9.24～H25.10.3	140	松浦	やまと不動産	宅地造成	原因者	H25.3195
22	NY01	平城山窯跡群	朱雀四丁目 3-2	H25.4.18～H25.4.23	20	松浦・池田	セキスイハイム近畿株式会社	宅地造成	原因者	H25.5001
23	HJ663	平城京跡（左京四条六坊十一坪）・奈良町遺跡	東城戸町 23 番 1 他	H24.8.23～H24.11.22	450	安井・原田香	パナホーム株式会社	共同住宅新築	原因者	H24.3067

1．ＪＲ奈良駅南特定土地区画整理事業に係る発掘調査

この調査は奈良市が進めるＪＲ奈良駅南特定土地区画整理事業（総面積 14.6 万㎡）に係り、実施したものである。奈良市教育委員会では、平成 13 年度から当事業地内での発掘調査を行っており、平成 25 年度までに、約 40,000㎡の発掘調査を実施している。

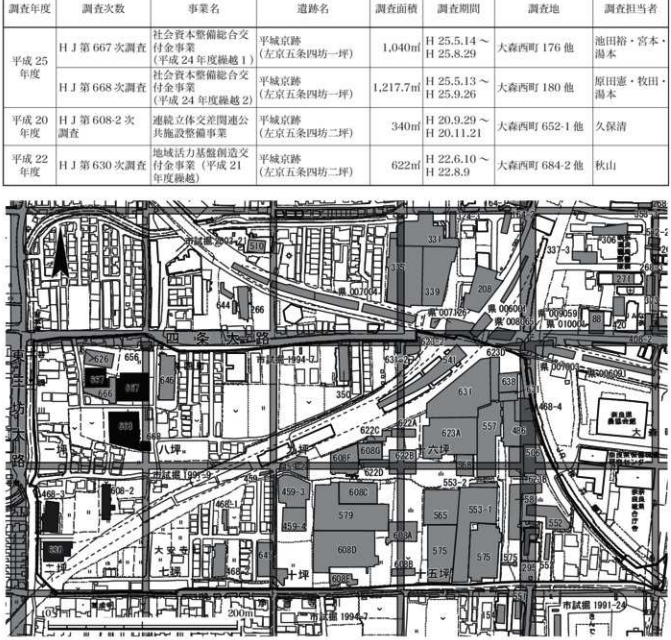
平成 25 年度は、平城京の条坊復原では左京五条四坊一坪で２件の発掘調査を実施した。各調査の概要は下記の通りである。

今回は平成 20 年度と 22 年度に実施し未報告であったＨＪ第 608-2 次と第 630 次調査を合わせ、二坪内の成果を報告する。なお、今年度行ったＨＪ第 667・668 次調査については、次年度以降に報告する予定である。

報告に際しては、古墳時代以前の遺構には２桁を、奈良時代以降の遺構には３桁以上の遺構番号を付している。これらは、当事業に係る調査で設定している遺構番号であり、条坊遺構・坪ごとに設定した通し番号である。

平成 25 年度　ＪＲ奈良駅南特定土地区画整理事業　発掘調査一覧表（過去年度分は今回報告分のみ）

調査年度	調査次数	事業名	遺跡名	調査面積	調査期間	調査地	調査担当者
平成 25 年度	ＨＪ第 667 次調査	社会資本整備総合交付金事業（平成 24 年度繰越１）	平城京跡（左京五条四坊一坪）	1,040㎡	H 25.5.14 ～ H 25.8.29	大森西町 176 他	池田裕・宮本・湯本
	ＨＪ第 668 次調査	社会資本整備総合交付金事業（平成 24 年度繰越 2）	平城京跡（左京五条四坊一坪）	1,217.7㎡	H 25.5.13 ～ H 25.9.26	大森西町 180 他	原田憲・牧田・湯本
平成 20 年度	ＨＪ第 608-2 次調査	連続立体交差関連公共施設整備事業	平城京跡（左京五条四坊二坪）	340㎡	H 20.9.29 ～ H 20.11.21	大森西町 652-1 他	久保清
平成 22 年度	ＨＪ第 630 次調査	地域活力基盤創造交付金事業（平成 21 年度繰越）	平城京跡（左京五条四坊二坪）	622㎡	H 22.6.10 ～ H 22.8.9	大森西町 684-2 他	秋山



ＪＲ奈良駅南特定土地区画整理事業　発掘調査位置図（1/4,000）黒塗り部分が平成 25 年度調査、濃い網掛け部分は今回報告分

平城京跡（左京五条四坊二坪）の調査　第 608–2・630 次

Ⅰ　はじめに

平城京左京五条四坊二坪では、平成 22 年度までに 3 回の発掘調査が行われている。平成 13 年度に二坪の北西部で行われたＨＪ第 468–３次調査は、すでに報告済みで、今回は二坪の北東部のＨＪ第 608–２次調査と、南西部のＨＪ第 630 次調査を報告する。両調査区は約 40 m離れており、連続する遺構もなく関連性が低いため、各調査区ごとに遺構・遺物を報告するが、遺構番号は二坪内での通し番号としている。

平成 13 年度のＨＪ第 468–３次調査では、奈良～平安時代の平面・柱穴規模とも小規模な掘立柱建物が３棟と東西溝１条が見つかっているのみで、遺構密度は希薄である。また奈良時代の遺構面の下には、縄文時代中期～弥生時代の遺物を含む堆積層が見つかっているが、その広がりを把握するまでには到っていない。

発掘調査では、二坪内の遺構の様相の解明とともに、奈良時代以前の遺構の広がりの確認をめざした。

Ⅱ　ＨＪ第 608–２次調査

基本層序　耕作土（0.2 m）の下に奈良時代以降の遺物包含層である茶灰色砂質土・灰茶色粘質土等（0.2 ～ 0.3 m）があり、現地表下約 0.4 ～ 0.5 m で黄褐色粘土の地山に到る。地山の標高は発掘区北側が約 60.9 m、南側が約 61.0 m と、北に向かい下降する。また、発掘区北東部分の断ち割り調査では、黄褐色粘土の下で東西方向の河川を確認している。河川の埋土は灰色砂礫が主体で、出土遺物は無く時期は不明である。遺構検出は黄褐色粘土上面で行った。

検出遺構　古墳時代の河川１条、奈良・平安時代の掘立柱建物２棟、掘立柱列１条、溝１条、中世以降の河川１条がある。各遺構の詳細は一覧表に記す。

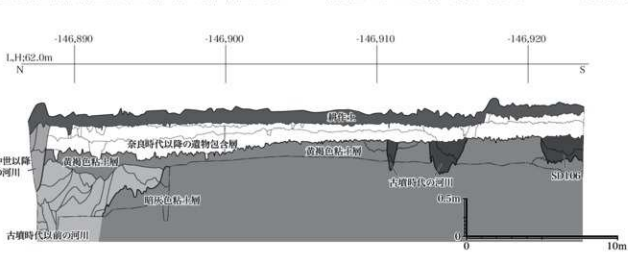
古墳時代の河川は、発掘区南半部を北東から南西方向に流れる。埋土は上層が茶灰色砂混じりの灰色粘土で、下層が灰色砂である。布留２式と３式の土師器が少量出土した。

掘立柱建物ＳＢ 204・205 は、いずれも桁行が５間以上で、柱穴堀方が一辺 0.6 ～ 0.8 m の中規模程度の建物である。掘立柱列ＳＡ 206 を含め、いずれも主軸が北でやや東に振れる。ＳＢ 204 は、桁行の中心線が二坪の南北 1/４ラインとほぼ重なっており、少なくとも 1/16 坪規模以上の宅地に伴う建物とわかる。

東西溝ＳＤ 106 は、北岸から幅約 2.5m 分を検出し、南岸は発掘区外にある。埋土は上層が茶灰色粘土で、下層が茶灰色粘土と灰色砂の混合土である。奈良時代後半の土器が出土した。位置関係から、西側のＨＪ第 468-3 次調査区の東西溝ＳＤ 105 につながるものと考えられる。ＳＤ 105 からは、10 世紀後半から 11 世紀初め頃の土器が少量出土しており、溝の最終的な埋没年代もこの頃と考えられる。

中世以降の河川は、発掘区北端で南岸から幅約 2.5m 分を検出した。河川は、灰色系の粘土・粘砂で埋まる。耕作土直下から掘り込まれるが、出土遺物がなく詳細な時期は不明である。調査地東側の市試掘 1991-9 次調査でも深さ 1.0 m以上の河川が見つかっており、これらを同一の河川とみると二坪北側の五条条間北小路上には中世以降の河川が重複していることが推定される。

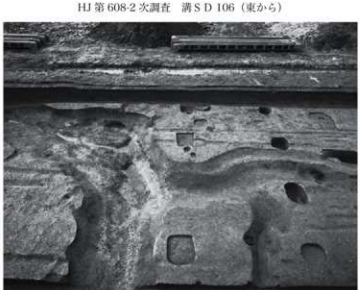
出土遺物　遺物整理箱１箱分の土器類と２箱分の瓦類がある。ＳＤ 106 からの出土が約半数を占める。各遺構出土のものは遺構一覧表に記す。　（中島和彦）



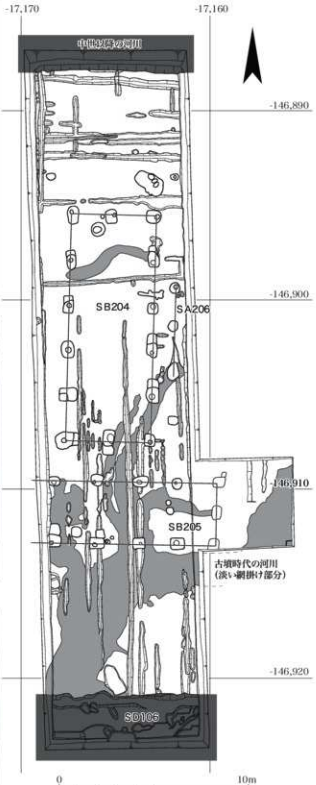
HJ 第 608-2 次調査　発掘区東壁土層図（縦 1/50・横 1/250）

HJ 第 608-2 次調査　発掘区全景（南から）

HJ 第 608-2 次調査　溝ＳＤ 106（東から）



HJ 第 608-2 次調査　古墳時代河川（東から）



HJ 第 608-2 次調査　遺構平面図（1/200）

Ⅲ　ＨＪ第630次調査

基本層序　上から造成土、灰色土（耕作土）、灰褐色土、褐灰色土の順で堆積し、発掘区北東部では地表から約0.5ｍで黄灰色砂礫土（地山）に至る。遺構検出面の標高は61.0～61.2ｍで、発掘区東側から西に下降する。

検出遺構　古墳時代後期の古墳、奈良時代の掘立柱建物・掘立柱塀・土坑・井戸・溝、鎌倉時代以降の素掘小溝多数がある。各遺構の詳細は一覧表に記し、以下各時代ごとに述べる。なお今回新たに確認した古墳は、調査地の字名をとって石ガマチ古墳と呼ぶこととする。

古墳時代の遺構　古墳１基と溝１条がある。

古墳は東西13ｍ、南北12ｍの方墳で、平面形は正方形ではなくやや歪んだ平行四辺形である。墳丘は後世の削平で失われ、周濠のみが残り、墳丘盛土も確認していない。周濠は幅1.0～1.8ｍで、北東隅部が一部途切れるが、全周するものと考えられる。深さは約0.4ｍで、埋土は大きく２層に分かれ、上層が黄灰色土で下層が黒色粘土である。上層からは奈良時代の土器が出土しており、この頃に古墳の削平が行われたことがわかる。周濠内からは円筒埴輪が出土しているが、原位置を保つものはなかった。また葺石はなかったようで、周濠内からは転落したものを含め石は出土していない。円筒埴輪の型式は川西編年のⅤ期またはⅣ期末頃で、古墳の年代は古墳時代後期の初頭頃と考えられる。

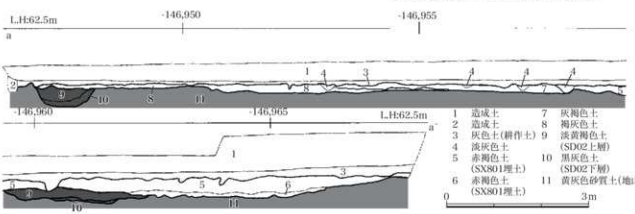
発掘区南西隅の溝ＳＤ04は、重複関係から最も古く、古墳の隅部分の可能性も考えられるが、大半が発掘区外にあり詳細は不明である。埋土は上層が赤褐色土、下層が茶褐色土である。

奈良時代の遺構　掘立柱建物７棟、掘立柱塀２条・土坑２基・井戸１基他がある。

全容のわかる掘立柱建物は少ないが、平面・柱穴の規模から中小規模の建物群と考えられる。遺構は重複関係から３時期以上あるが、建物相互の組合せ・前後関係等の詳細は不明である。建物の主軸方向の傾きが、ほぼ真北のもの・北でやや西に傾くもの・北でやや東に傾くものの３種がある。主軸が真北方向のものが、他に比べ柱間・柱穴規模が大きいようである。出土土器から、古墳を削平して宅地化したのが8世紀後半頃で、9世紀頃までの遺物が存在し、宅地の時期もこの頃と考えられる。

HJ第630次調査　発掘区全景（東から）

HJ第630次調査　発掘区全景（南西から）



HJ第630次調査　発掘区土層図（1/80）

HJ 第 608-2・630 次調査　遺構一覧表（掘立柱建物・列）

遺構番号	棟方向	規模	桁行全長	梁行全長	柱間寸法（m）		廂の出	柱穴の深さ	備考
		桁行 × 梁行	(m)	(m)	桁行	梁行			
SB204	南北	2 × 5	12.0	4.8	2.4	2.25		0.5 ～ 0.7	
SB205	東西	2 × 4 以上	8.7 以上	3.3	東から 2.1-2.1-2.4-2.1	1.65		0.3 ～ 0.4	
SA206	南北	2		4.8	2.4			0.2	
SB207	南北	4 以上 ×2	6.75 以上	3.6	2.55 等間	1.8 等間	東 2.4 西 2.1	0.25 ～ 0.54	発掘区外北へ続く
SB208	東西	5 以上 ×2	7.2 以上	3.9	1.8 等間	1.95 等間	東 2.1 北 1.95	0.14 ～ 0.24	発掘区外西へ続く
SB209	南北	2 以上 ×2	3.6 以上	1.95	1.8 等間	1.95		0.36 ～ 0.56	発掘区外北へ続く
SB210	東西	2×2	5.4	5.5	2.7 等間	2.25 等間		0.18 ～ 0.45	
SA211	南北	11 以上	19.05 以上		北から 1.95-1.95-1.95-1.5-2.1-1.8-2.1-1.8-1.8-2.1			0.2 ～ 0.3	発掘区外北と南へ続く 数棟の建物になる可能性あり
SB212	東西	1 以上 ×2		4.5		2.25 等間			発掘区外西へ続く
SA213	東西	3	7.2		2.4 等間				
SA214	南北	4 以上	5.85 以上		1.95 等間			0.1 ～ 0.4	発掘区外西と南へ続く建物？
SB215	南北	1 以上 ×2		4.8		2.4 等間		0.27 ～ 0.36	南北棟建物の北妻柱列か？

H J 第 608-2・630 次調査　遺構一覧表（井戸）

遺構番号	掘方			枠		時期	主要出土遺物	備考
	平面形	平面規模（m）	深さ（m）	構造	内法（m）			
S E 09	隅丸方形	東西 2.3× 南北 2.26	1.6	方形横板組 隅柱留	東西 0.85× 南北 0.98	8 世紀後半	土師器皿 A・皿 A 蓋・高杯・甕、須恵器杯・杯蓋・瓶子・壺・甕 、製塩土器、丸瓦・平瓦、転用硯、漆器壺、銭貨（和同開珎）	

H J 第 608-2・630 次調査　遺構一覧表（溝・土坑他）

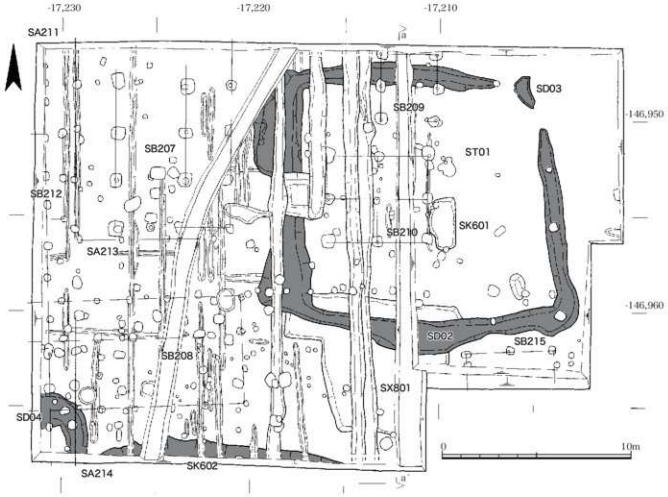
遺構番号	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）	時期	主な出土遺物	備考
古墳時代河川	北東から南西方向	幅 4 ～ 8 m	0.5 ～ 0.7	古墳時代前期	土師器高杯・甕、サヌカイト剥片	
SD15	東西溝	長さ 8.5 以上 × 幅 2.5 以上	0.3 ～ 0.4	8 世紀後半	土師器杯・皿・椀・蓋・甕、須恵器杯・壺・水瓶・甕、製塩土器、かまど、丸瓦、平瓦、埴、砥石、とりべ	
中世以降の河川	東西方向	長さ 8.5 以上 × 幅 1.3 以上	0.9 以上			
S T 01	方墳	東西 13.5× 南北 13.0		古墳時代後期		古墳墳丘部は削平
S D 02		幅 1.0 ～ 1.8	0.28 ～ 0.45	古墳時代後期	朝顔形埴輪、円筒埴輪	ST01 周溝、北東隅部で一部途切れる
S D 03		幅 0.75 × 長さ 1.6	0.12	古墳時代後期	円筒埴輪	ST01 北西隅部の周溝残欠
S D 04	L 字	幅 1.1 ～ 1.8	0.85		土師器、須恵器	周溝？
S K 601	不整形	東西 1.42 ～ 0.58× 南北 2.6	0.11	8 世紀	上層：土師器皿 C 、須恵器杯 B 下層：土師器高杯（古墳？）、円筒埴輪	
S K 602	東西	南北 1.0 以上 × 東西 12.8 以上	0.85	8 世紀	土師器、須恵器	宅地内区画溝か？
S X 801	不整方形	東西 9.3× 南北 7.2	0.12	8 世紀後半	土師器杯 A・皿 A・皿 C・甕、須恵器壺 A・杯 A・杯 B・壺 A、棒原石	整地層

S K 602 は東西に長い溝状の土坑で、発掘区外南へと続く。位置関係から二坪の南北 1 / 4 分割ラインに位置しており、宅地の分割溝になるものと考えられる。

S X 801 は古墳周濠上に堆積する整地土で、8 世紀後半の土器が多数出土した。古墳を削平し宅地化した時期を示す。

出土遺物　遺物整理箱 8 箱分の土器類と 3 箱分の瓦類、1 箱分の木製品・金属製品・石製品がある。土器類には古墳時代の土師器・円筒埴輪、奈良～平安時代の土師器・須恵器・灰釉陶器・製塩土器・土馬・円盤形土製品が、瓦類には軒丸瓦（型式不明）1 点の他丸瓦・平瓦がある。その他、漆器、銭貨（和同開珎）、鉄釘、刀子、砥石などがある。以下古墳周濠出土の埴輪と井戸 S E 501 出土のものについて記す。

古墳出土遺物　円筒埴輪と朝顔形埴輪の他、奈良時代の土器類がある。円筒埴輪は多くが破片で、全体形・凸



HJ 第 630 次調査　遺構平面図（1/200）

帯の条数が判明するものはない。埴輪は縦方向の板状工具によるナデ調整のものが多く、ヨコハケ調整のものをほとんど含まない。凸帯は台形ものとやや低い台形ものがあり、全体的に歪みは少なく水平に貼り付けている。またすべて無黒斑のものである。円筒埴輪は川西編年のⅤ期の特徴であるが、凸帯の作りや底部調整を行うものがないことから、Ⅳ期末頃の時期の可能性も考えられる。

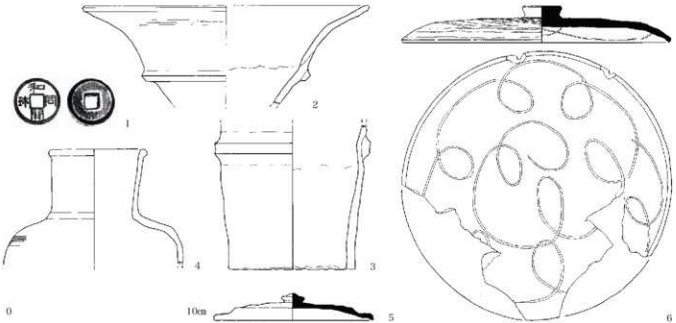
３は底部の破片で、底部径は 13.4㎝あり、最下段の凸帯のみ残る。凸帯は低い台形で、断続ナデ技法は認められない。外面調整は板状工具による縦方向のナデ調整で、ハケメはない。２は朝顔形埴輪の口縁部で、口径は 30.4㎝である。外面はナデ調整で、内面は３と同様の板状工具のナデ調整である。焼成は堅緻である。

井戸ＳＥ 501 出土遺物　土師器皿Ａ・皿Ａ蓋・高杯・甕、須恵器杯・杯蓋・瓶子・壺・甕、製塩土器、漆器、銭貨（和同開珎）１点がある。

土師器蓋（６）は、口径 28.6㎝、器高 3.9㎝と大型である。外面をヘラケズリ調整後緻密なヘラミガキ調整し、内面にはラセン状の暗文を施す。須恵器杯蓋（５）

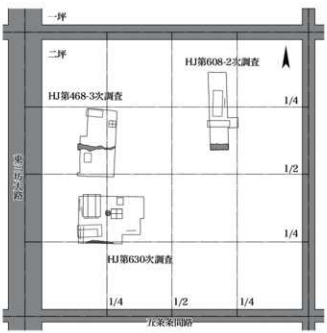
HJ 第 630 次調査　井戸ＳＥ０９全景（東から）

は、口径 16.9㎝、器高 2.9㎝である。内外面をロクロナデ調整後、頂部をヘラケズリ調整しつまみを貼り付ける。灰白色の軟質の焼成で、口縁端部には煤しがかかる。漆器壺（４）は黒漆塗で、口縁部から胴部上半が残る。口径 9.4㎝、胴部径 20.0㎝、残存高 12.2㎝である。内外面とも布着せで下地を作り、その上に黒漆を塗布する。



HJ 第 630 次調査　出土遺物（1/4、1のみ 1/2）

HJ 第 630 次調査　漆器壺



二坪遺構配置図

樹種はケヤキである。和同開珎（1）は、径24.335㎜、厚さ1.462㎜、重さ3.136gである。「和」は禾の一画目と二画目がやや長く、口の配置が上半に位置し、「開」は隷開である。背面には型ずれが見られる。（秋山成人）

Ⅳ　調査所見

今回の調査で、新たに平城京造営時に削平された古墳を確認した。古墳は一辺約13ｍの方墳で、周濠と埴輪をもつが葺石はなかったようである。埋葬施設は削平により失われており不明である。時期は古墳時代後期の初頭頃と考えられる。調査地の周辺を含め平城京では、近年発掘調査に伴って同様な小規模な古墳が発見されている。古墳の規模や群構成など不明な例が多いが、奈良市内の古墳時代を考える上で重要な資料となる。

また奈良時代の二坪内では、坪内を分割して宅地利用していることが判明した。ＨＪ第630次調査では、坪の南北1/4ライン付近で溝状の土坑が確認され、南西部では少なくとも南北二分割して利用されていることがわかる。またＨＪ第608-2次調査の建物ＳＢ204は、坪の南北1/4ライン上に位置しており、北東部には1/16町規模以上の宅地が推定される。ＨＪ第608-2次発掘区南端のＳＤ15と第468-3次発掘区ＳＤ105は位置関係から一連の溝になるものと考えられる。おおよそ二坪の南北1/8ラインに位置しており、これも坪内の分割に関わる遺構と想定される。（秋山成人・中島和彦）

1）　川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌第64巻第2号』日本考古学会1997

2．近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業に係る発掘調査

奈良市教育委員会では、昭和63年度から近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業地内（総面積32万㎡）の発掘調査を継続して実施している。

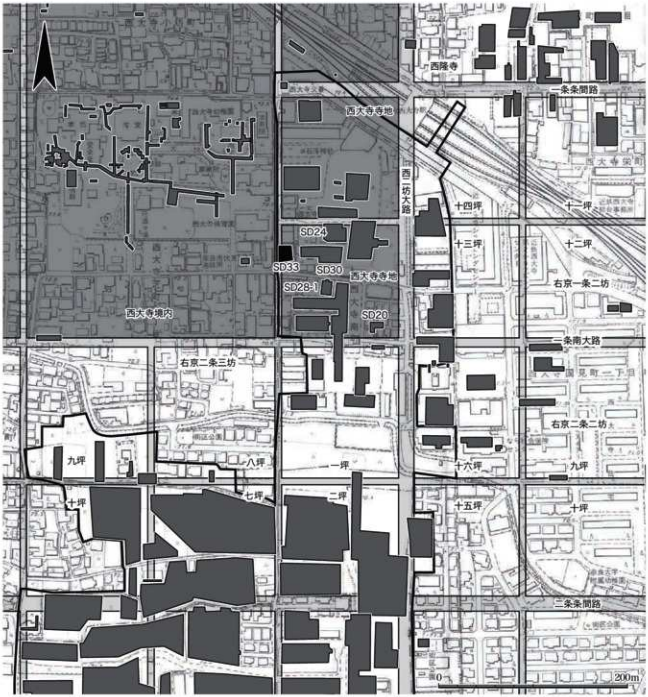
平成24年度までの調査面積は112,913㎡である。

平成25年度は、事業地の北辺に223㎡の調査区を設定し、ＳＤ第33次調査として発掘調査を実施した。

この発掘調査の概要と調査位置は下記の通りである。

平成25年度　近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業　発掘調査一覧表

遺跡名	調査次数	事業名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
西大寺跡	ＳＤ第33次	西大寺駅南地区土地区画整理事業	西大寺南町33	Ｈ26.1.14～ Ｈ26.2.21	223㎡	原田憲二郎 海本整



近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業地内　発掘調査位置図（1/4,000）

西大寺跡（西大寺寺地）の調査　第33次

Ⅰ　はじめに

当該地は、平城京の条坊復原で右京一条三坊四坪の北西辺に位置する。奈良時代後半には西大寺の境内地となり、西大寺の伽藍復原によると、主要伽藍地区東方の寺地部分にあたる。時期は下るが、西大寺が所蔵する「西大寺伽藍絵図」（元禄11（1698）年作成）には、調査地付近に「常念絵持院」なる建物が記されている。

これまでの右京一条三坊四坪での調査成果では、坪内は東西を1/2に、さらに南北を1/4に分割して利用している時期があること、遺構の重複関係から4時期の遺構が確認できること、時期の判る奈良時代の井戸は奈良時代末頃ばかりで、奈良時代前半に遡るものはないこと等が判明している。これらの成果を受け、本調査は当坪内のさらなる様相解明を主目的とした。

Ⅱ　基本層序

発掘区内の基本的な層序は、造成土、暗灰色砂質シルト、暗灰色粘質シルト、オリーブ褐色粘質シルトと続き、南半では暗青灰色粘土、北半では暗灰褐色シルト質細砂もしくは暗褐色粘質シルトとなる。これらは江戸時代以降に埋没する河川2・3の埋土で、これらを除去した現地表下約0.8～0.9mで、古墳時代以前の河川1埋土の青灰色粘質シルトもしくは灰白色粗砂上面に達する。遺構の大半はこの面で検出した。検出面の標高は、南辺では概ね69.9m、北辺では概ね70.2mである。

古墳時代以前の河川1は発掘区全域におよぶ。青灰色粘土もしくは暗灰色粘土と、灰白色砂もしくは灰白色粗砂が互層となって堆積しており、検出面からの深さ約2.2mまで続くことを確認したが、湧水が激しく壁面崩壊の恐れがあったため、以下の掘り下げを断念した。遺物は出土せず、時期は不明である。

発掘区北辺で検出した河川2は、幅約3.0m分、長さ約12m分を検出した。埋土は上から暗褐色粘質シルト、青灰色粘土ブロックを含む暗褐色粘質シルト、暗褐色粘質シルト～中砂で、検出面からの深さ約1.5mである。埋土から18世紀後半以降の陶磁器、桟瓦が出土した。

発掘区南西辺で検出した河川3は、幅約7.0m分、長さ約13m分を検出した。埋土は上から暗青灰色粘土、灰色粘砂、暗緑灰色粘土、灰色粘土を含む灰白色砂で、検出面からの深さ約1.1mである。埋土から18世紀後半以降の陶磁器、桟瓦が出土した。

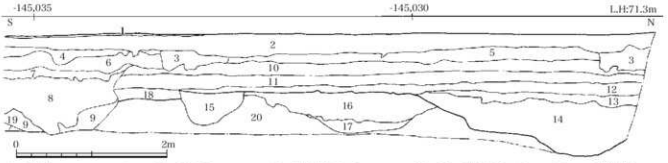
Ⅲ　検出遺構

検出した遺構には土坑、井戸、暗渠、木杭列があるが、時期の判るものはすべて江戸時代以降のものである。

ＳＸ01は河川2と平行する溝状土坑である。幅0.4～1.5mで、深さも0.2～0.6mと一定しない。埋土は上から青灰色粘質シルト、オリーブ褐色粘質シルトで、埋土から18世紀後半以降の陶磁器と共に、8世紀の垂木先瓦が1点出土した。

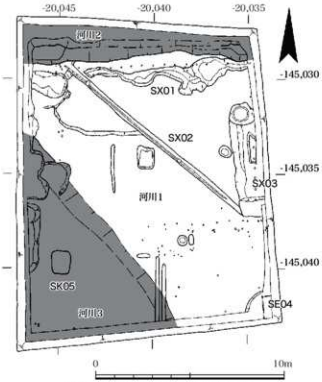
ＳＸ02は導水管を設けた暗渠である。北西端は河川2に、南東端は土坑ＳＸ03に接する。掘方の幅は約0.3mで、深さは北西辺が約0.3m、南東辺が約0.4mで、北西から南東に導水していたとみられる。導水管は節を抜いた径約0.1mの竹を用い、継手には一辺長約0.2mの木材の中心を刳り貫いたものを用いる。

ＳＸ03は南北約5.0m分、東西約1.5m分を検出した土坑である。深さは約0.2～0.6mと一定しない。埋



1　黒色土
2　褐色砂質土
3　黒色砂質土
4　灰褐色砂質シルト
5　暗灰色砂質シルト
6　黒褐色砂質土
7　コンクリートと栗石
8　灰褐色粘質シルト（橙色粘土ブロック多量に含む）
9　暗褐色粘質シルト
10　暗灰色粘質シルト
11　オリーブ褐色粘質シルト
12　暗褐色粘質シルト
13　暗褐色粘質シルト（下部に青灰色粘土）
14　暗褐色粘質シルト～中砂
15　灰白色砂
16　青灰色粘質シルト
17　オリーブ褐色粘質シルト
18　暗灰褐色細砂
19　暗灰色粘質シルト
20　灰白色粗砂
20　河川1埋土
12～14　河川2埋土
18・19　河川3埋土

SD第33次調査　発掘区西壁土層図（1/50）



SD第33次調査　遺構平面図（1/200）

土は灰色粘質シルトである。埋土から18世紀後半の陶磁器・桟瓦・下駄と共に8世紀の用途不明瓦製品が出土した。河川2から取水し、暗渠ＳＸ02を流れた水を溜める水溜の可能性が考えられる。

ＳＥ04は発掘区南東隅で検出した井戸である。東西・南北とも1.5ｍ分検出した。枠は抜き取られ最下段の横板組の部材のみ残存していた。深さは約0.5ｍである。枠抜き取り穴の埋土は青灰色粘土ブロックを含む暗灰色粘質砂土で、掘方埋土は暗灰色粘質砂土、枠内埋土は上から暗青灰色粘土、オリーブ灰色粘質シルトである。枠内から18世紀後半以降の陶磁器、平瓦、桶が出土した。

ＳＫ05は東西1.0ｍ、南北1.3ｍの土坑である。埋土は暗灰色砂質土で深さ約0.3ｍである。埋土から桟瓦が出土した。井戸ＳＥ04・土坑ＳＫ05は重複関係から、河川3埋没後の遺構である。

Ⅳ　出土遺物

遺物整理箱で約20箱分の遺物が出土した。出土遺物には、奈良時代の土師器・須恵器・丸瓦・平瓦・垂木先瓦・用途不明瓦製品、江戸時代後半以降の国産陶磁器・丸瓦・平瓦・桟瓦・軒丸瓦・軒平瓦・軒桟瓦・鬼瓦・下駄・桶がある。遺物の大半は、江戸時代後半以降の瓦類である。

以下、垂木先瓦と用途不明瓦製品について述べる。

出土した垂木先瓦は、西大寺東西両塔周辺で確認されているものと同様の施釉品[1]である。出土したのは方形の飛檐垂木用と同じ紋様構成で、中央部の破片である。

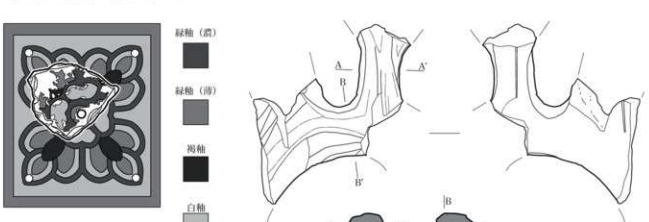
ＳＤ第33次調査　北半部全景（南から）

SD第33次調査　南半部全景（北から）

SD第33次調査　暗渠ＳＸ02（北西から）

中心に径約0.6㎝の釘穴を焼成前に穿つ。厚さ約1.4㎝で、裏面は丁寧なナデで平坦にする。

用途不明瓦製品は、一方の面に波状の凹凸をケズリ・ナデで表現し、もう一方の面は荒いケズリでほぼ平坦にする。波状の施紋のある面が上面、平坦な面を下面として使用されたとみられる。下面には製作時の割付ラインとみられる凹線が残ることから、製作時には、まず下面



SD第33次調査　三彩垂木先瓦・用途不明瓦製品（1／3）

となる面を上にして大きく成形したのち、上下ひっくり返して、上面の施紋を行なったとみられる。形状から火熔もしくは波状の飾りの可能性が考えられる。胎土は精良、焼成はやや軟質で、表面が黒灰色、内部が白灰色である。18世紀後半の土坑ＳＸ03から出土したが、胎土・焼成・色調が、本調査地から南西に約40ｍ離れた、同じ西大寺寺地の調査である市ＳＤ第20次調査で出土した花形の隅木蓋瓦と酷似する[2]。『西大寺資財流記帳』の記述から、西大寺薬師・弥勒両金堂の屋根装飾の意匠は特異なものであったことが知られており[3]、本瓦製品も花形隅木蓋瓦と同様に、屋根部分の装飾の一部品の可能性を考える。

Ⅴ　調査所見

調査区に奈良時代の遺構は無かった。東に隣接する市ＳＤ第30次調査では、標高71.2～71.3ｍで奈良時代の遺構を検出しているが、本調査地ではすでに現地表面での標高が約71.0ｍである。これは市ＳＤ第30次調査の地表面より約0.6ｍ低いことから、江戸時代の河川により大きく削平を受け、奈良時代の遺構は失われたとみられる。

江戸時代の河川２は、東側の市ＳＤ第24・30次両調査[4]では確認されておらず、両調査区と本調査区間からはじまり、西流していたものとみられる。

江戸時代の河川３は、市ＳＤ第30次調査の南側敷地が、本敷地同様一段下がっていることが現状で確認できることから、ここを東流していたとみられる。

河川１については、西側の市ＳＤ第４次（旧第２次）調査と東南の市ＳＤ第28－１次調査[5]で確認されている縄文時代後期の河川と一連と考えると、ほぼ東西方向に流れていたとみられる。（原田憲二郎）

SD第33次調査　用途不明瓦製品（上面）

1）　奈良国立文化財研究所『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』西大寺 1990
2）　奈良市埋蔵文化財調査センター「西大寺旧境内の調査　第20次」『奈良市埋蔵文化財調査年報　平成17（2005）年度』2008
3）　大岡實『南都七大寺の研究』中央公論美術出版 1966
4）　奈良市埋蔵文化財調査センター「西大寺旧境内の調査　第24次」『奈良市埋蔵文化財調査年報　平成20（2008）年度』2011
　　奈良市埋蔵文化財調査センター「西大寺旧境内の調査　第30次」『奈良市埋蔵文化財調査年報　平成24（2012）年度』2015
5）　奈良市教育委員会「西大寺旧境内（第２次）の調査」『奈良市埋蔵文化財発掘調査概要報告書　昭和63年度』1989
　　奈良市埋蔵文化財調査センター「西大寺旧境内の調査　第28-1次」『奈良市埋蔵文化財調査年報　平成22（2010）年度』2012

3．平城京跡（左京四条六坊十一坪）・奈良町遺跡の調査　第 663 次

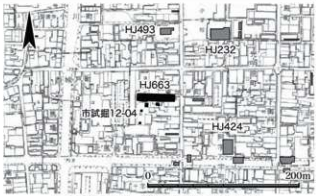
事 業 名　共同住宅新築	調査期間　平成 24 年 8 月 23 日～ 11 月 22 日
届出者名　パナホーム株式会社	調査面積　450㎡
調 査 地　東城戸町 23 番 1、31 番他	調査担当者　安井宣也・原田香織

1　はじめに

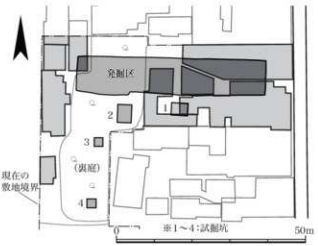
調査地は、奈良時代に元興寺が造営された台地の西縁に位置し、平城京の条坊復原では左京四条六坊十一坪の北東部にあたる。また、室町時代の東城戸郷（興福寺門前郷）や江戸時代の東城戸町の西辺南寄りにあたる。

調査地の約 100 m北の同じ町内で実施した市ＨＪ第 493 次調査[1]では、奈良時代・平安時代後葉・室町時代中葉・江戸時代の遺構を、約 100 ～ 150 m北東の椿井町内で実施した市ＨＪ第 232・482 次調査[2]では、奈良時代末から江戸時代にかけての遺構をそれぞれ確認した。市ＨＪ第 232・493 次調査では室町時代中葉、同第 482 次調査では同後葉の埋甕遺構を検出し、工房や商家の存在がうかがえる。また、約 100 m南東の阿字万字町内で実施した市ＨＪ第 424 次調査[3]では、奈良時代末から江戸時代の遺構を確認した。

共同住宅は、東西に長い町屋の跡地とその西側から南方の道路に達する南北に長い空閑地（元は町屋の裏庭や畑）からなるＬ字形の敷地に計画された。調査に先立ち、遺構の遺存状態を確認するために試掘調査（市 2012 －４次）を実施したところ、町屋の跡地付近の試掘坑（図中１・２）で中・近世の遺構が良好に残ることがわかった。この結果から、今回の調査は、町屋の跡地付近に東西に長い発掘区を設定し、奈良時代以降の土地利用の様相の把握を目的として実施した。



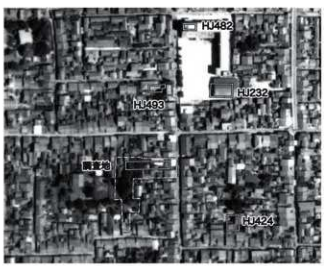
HJ 第 663 次調査　発掘区位置図（1/5,000）



試掘調査区と発掘調査区の位置と旧状（1/1,000）

奈文研作成 1/1,000 地形図をトレースし加筆

HJ 第 663 次調査　発掘地遠景（南西から）



1961 年の調査地付近（上が北、国土地理院 KK61-C4-187）

Ⅱ　基本層序

造成土（厚さ0.1～0.6 m）の下に、①黒褐色やオリーブ褐色の砂質シルト層（厚さ0.4～1.3 m）、②明黄褐色砂質シルトブロック層（厚さ0.1～0.3 m）があり、その下で明黄褐色砂質シルトの地山上面となる。

①は旧町屋の発掘区東寄りで2～3層、同中央部で7～8層、空閑地の同西寄りで1～2層みられる。17世紀以降の土器類・瓦類の破片と炭粒・焼土塊を含む。各層の上面は水平に近く、複数の土坑が掘削されている。江戸時代以降の町屋に伴う整地土層である。

②は地山のシルトブロックからなり、遺物を含まない。発掘区全面にあり、上面で8～16世紀の遺構がみられる。奈良時代後半に形成された整地土層で、上面は奈良時代後半～室町時代後葉の遺構面である。直下の地山は本来の地表面が削られ、土壌化による変質部分がない。

なお、発掘区の中央西寄りと西端では、①・②の間に黒褐色やオリーブ褐色の砂質シルト層（厚さ0.4 m）が堆積する。14世紀以前の土器片を含み、上面で15～16世紀の遺構がみられる。室町時代中葉に形成された整地土層で、上面は室町時代中・後葉の遺構面である。

②と地山の上面はともに東から西に緩やかに下る。標高は前者が77.2～78.7 m、後者が77.0～78.6 m。

Ⅲ　検出遺構

遺構検出は、明黄褐色砂質シルトブロック層と地山の各上面で行った。明黄褐色砂質シルトブロック層上面で

HJ第663次調査　発掘区　西壁土層断面（南東から）

は、奈良時代後半～室町時代後葉の遺構と上層から掘削された江戸時代前・中葉の遺構をあわせて検出した。なお、地山上面で検出した遺構はなかった。以下、主な遺構を時期別に概説し、詳細は一覧表にまとめた。

奈良時代後半～平安時代初頭　掘立柱塀1条（SA01）・掘立柱建物3棟（SB02～04）・溝2条（SD05・06）があり、重複関係から2時期の変遷が認められる。

SA01は、形状と位置からSB03・04のいずれかの目隠し塀とみられる。中央の柱穴から8世紀後半～9世紀初頭の須恵器杯Aが出土。SB02～04は北柱列の位置が揃う。SB04は重複関係からSB03より新しく、建替えとみる。いずれも柱穴の理土は、地山のシルトブロックである。

東西方向の溝SD05は、溝心の位置がX=－146,497.7、Y=－15,838.0で、約1 km西北の市HJ

1　造成土・解体工事時の掘乱土
2　旧宅地の裏庭の表土
3　浄化槽の理立土
4　黒褐色シルト質砂
5　黒褐色砂質シルト
6　暗灰黄色粘土混じシルト
7・8　近・現代の井戸掘方
9　暗灰黄色砂質シルトと浅黄色シルト質砂の互層（硬くしまる）
10　上位：黄橙色砂質粘土ブロック
　中位：オリーブ褐色シルト質砂
　下位：オリーブ褐色シルト混礫（硬くしまる）
11　灰オリーブ色砂礫混シルト
12　オリーブ褐色砂質シルト
13　黒褐色砂質シルト
14　オリーブ褐色砂質シルト
15　オリーブ褐色砂質シルト
16　暗灰黄色砂質シルト
17　黄褐色シルト混砂礫
18　灰色砂質シルト～粘土
19　暗灰黄色砂質シルト
20・21　暗オリーブ色砂質シルト
22　黄灰色砂質粘土混じシルト
23　暗オリーブ褐色砂質シルト
24　黄灰色砂質粘土混じシルト
25　暗灰黄色砂質シルト
26　灰白色シルト質砂
27　黒褐色砂質粘土混じシルト
28　黄灰色砂質シルト
29　灰白色砂質シルトブロック
30　暗オリーブ灰色砂質シルト
31　暗灰黄色砂質シルト
32　黒褐色砂質シルト
33　オリーブ褐色砂質シルト
34　黒褐色砂質シルト
35　灰色砂質シルト
36　暗灰黄色砂質シルト
37　褐灰色砂質粘土混じシルト
38　黄灰色砂質シルト
39　黒褐色砂質粘土混じシルト
40　暗オリーブ灰色砂質シルト
41　黒褐色砂質シルト
42　オリーブ褐色砂質シルト
43　暗オリーブ褐色砂質粘土混じシルト
44　黄褐色砂質粘土混じシルト
45　87層ブロックを含む暗オリーブ褐色砂質粘土混じシルト
46　黒褐色砂質シルト
47　暗灰黄色砂質シルト
48　オリーブ褐色砂質シルト
49　暗灰黄色砂質シルト
50　灰オリーブ色砂質シルト
51　暗オリーブ褐色砂質シルト
52　明黄褐色シルト質粘土ブロック
53　オリーブ褐色砂質粘土混じシルト
54　暗オリーブ褐色砂質シルト
55　暗灰黄色砂質シルト
56　黒褐色砂質粘土混じシルト
57　暗オリーブ灰色砂質シルト
58　オリーブ褐色砂質粘土混じシルト
59　黒褐色砂質シルト
60　黒色砂質シルト
61　オリーブ褐色砂質シルト
62　灰オリーブ色シルト質砂
63　暗オリーブ褐色砂質シルト
64　黒褐色砂質シルト
65　暗オリーブ褐色砂質シルト
66　暗オリーブ褐色砂質シルト
67　黄褐色シルト質砂
68　87層ブロックを含む暗オリーブ褐色砂質粘土混じシルト

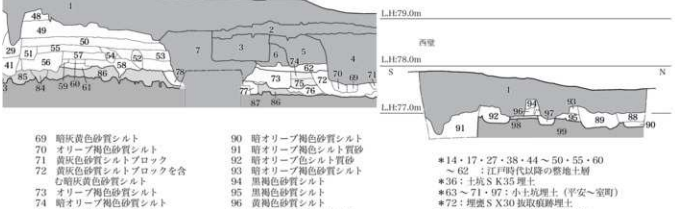
HJ第663次調査　発掘区南壁・西壁土層図Ⅰ（縦1/80、横1/150）

HJ 第 663 次調査　発掘区東部　南壁土層断面（北西から）

HJ 第 663 次調査　発掘区中央部東側　南壁土層断面（北西から）

HJ 第 663 次調査　発掘区中央部西側　南壁土層断面（北西から）

HJ 第 663 次調査　発掘区中央部西側　南壁土層断面（北から）



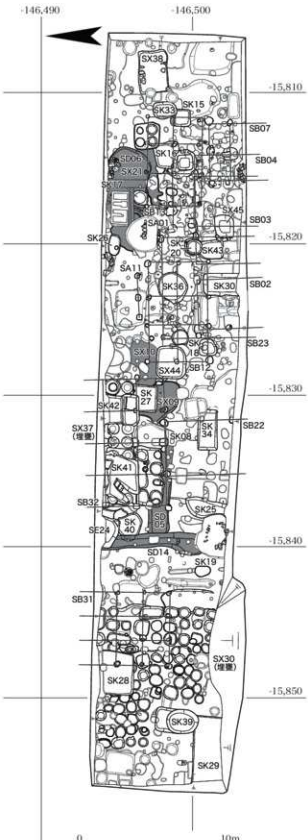
69　暗灰黄色砂質シルト
70　オリーブ褐色砂質シルト
71　黄灰色砂質シルトブロック
72　黄灰色砂質シルトブロックを含む暗灰黄色砂質シルト
73　オリーブ褐色砂質シルト
74　暗オリーブ褐色砂質シルト
75　黒褐色砂質粘土混シルト
76　87 層ブロックを含む暗オリーブ褐色砂質シルト
77　オリーブ褐色砂質粘土混シルト
78　暗オリーブ色砂質シルト
79 ～ 85　87 層ブロック、ブロック間に暗オリーブ褐色砂質シルト
86　87 層ブロック
87　明黄褐色砂質シルト
88　オリーブ褐色砂質シルト
89　黒褐色砂質シルト
90　暗オリーブ褐色砂質シルト
91　暗オリーブ褐色シルト質砂
92　暗オリーブ色シルト質砂
93　暗オリーブ褐色砂質シルト
94　黒褐色砂質シルト
95　黒褐色砂質シルト
96　黄褐色砂質シルト
97　黄灰色砂質粘土混シルト
98　99 層ブロック
99　明黄褐色砂質シルト

4 ～ 6 ：裏庭のゴミ捨て穴埋土
9・10：旧建物の掘込地業
＊11 ～ 13・15・16・18 ～ 26・29 ～ 35・37・39・41 ～ 43・51 ～ 54・56・59・88 ～ 90：江戸時代以降の土坑埋土
＊14・17・27・38・44 ～ 50・55・60 ～ 62　：江戸時代以降の整地土層
＊36：土坑 S K35 埋土
＊63 ～ 71・97：小土坑埋土（平安～室町）
＊72：埋甕 S X30 抜取痕跡埋土
＊73：室町時代中・後葉の土坑埋土
＊74・75・93 ～ 96：室町時代中葉の整地土層
＊76：土坑埋土
＊77：溝 S D14 埋土
＊78：土坑 S K25 埋土
＊91：土坑 S K29 埋土
＊92：土坑埋土
79 ～ 85：小土坑埋土（柱穴の可能性）
86・98：奈良時代末の整地土層
87・99：地山
（＊：炭粒・焼土塊含む）

HJ 第 663 次調査　発掘区南壁・西壁土層図 2（縦 1/80、横 1/150）

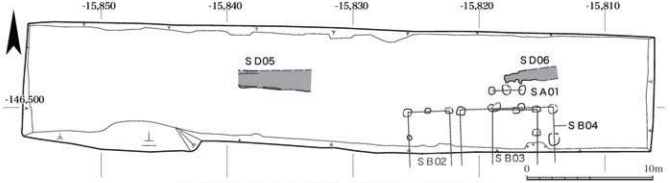
HJ 第663次調査　発掘区全景（南西から）

HJ 第663次調査　発掘区全景（南東から）

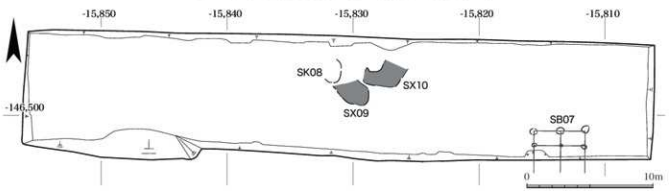


HJ 第 663 次調査　遺構平面図（1/250）

HJ 第 663 次調査　発掘区垂直写真（左が北）



HJ 第663次調査　奈良時代後半～平安時代初頭の遺構（1/300）



HJ 第663次調査　平安時代中葉の遺構（1/300）

HJ 第663次調査　遺構一覧表1　奈良時代後半～平安時代中葉

遺構番号	棟方向	規模（間） 桁行×梁行	桁行全長 (m)	梁行全長 (m)	柱間寸法（m） 桁行	 梁行	柱穴の深さ (m)	備考
SA01	東西	2	3.3		1.65等間		0.2	中央の柱穴から8世紀後半以降の須恵器杯Aが出土
SB02	南北	1以上×2	2.1以上	3.3	2.1	1.65等間	0.2	
SB03	南北	1以上×2	1.8以上	3.3	1.8	1.65等間	0.3	SB02と北柱列が揃う
SB04	東西	3×1以上	7.2	2.4以上	2.4等間	2.4	0.3	SB03より新しく、北柱列が重複
SB07	南北	1以上×2	1.2以上	3.9	1.2	1.95等間	0.4	総柱建物。北柱列中央柱穴から10～11世紀の土師器皿・黒色土器A類椀が出土

遺構番号	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）	時期	主要出土遺物	備考
SD05	東西方向	幅1.3× 長さ6.0m以上	0.2	8世紀後半～ 9世紀	土師器甕・皿・高杯、須恵器甕・横瓶・杯・蓋	十一坪内の区画溝
SD06	東西方向	幅1.0× 長さ4.0m以上	0.1	8世紀後半～ 9世紀	土師器甕・杯・皿、須恵器甕・水瓶・皿・蓋、瓦器椀（13世紀）、平瓦	SD05の東延長部の可能性。13世紀に攪乱された可能性
SK08	不整形	東西1.0以上× 南北1.0以上	0.4	10世紀後半～ 11世紀初頭	土師器皿、平瓦	
SX09	不整形	東西3.0以上× 南北2.5以上	0.2～0.3	10世紀後半～ 11世紀初頭	須恵器平瓶（8世紀）、土師器皿、黒色土器A・B類椀、平瓦	SD05の廃絶後に形成
SX10	不整形	東西3.0以上× 南北1.5以上	0.1	10世紀後半～ 11世紀初頭	須恵器甕・壺・杯・皿（8～9世紀）、土師器皿、黒色土器A類椀、白色土器皿、丸瓦、平瓦、	SD05の廃絶後に形成

第199次調査で検出した四条条間北小路の道路心を基準とし、中軸線の方眼方位に対する振れを朱雀大路と直交するE 0°15′Nと仮定すると、十一坪の北辺を画する四条条間路の推定心から約32m南に求められ、十一坪内の北寄り1/4を画する溝と考える。

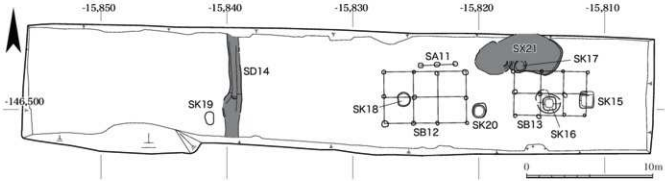
SD06は埋土に8～9世紀と13世紀の遺物が混在するが、位置関係からSD05の東延長部が後世に攪乱を受けたものとみられる。

平安時代中葉　掘立柱建物1棟（SB07）・土坑1基（SK08）・性格不明の浅い窪み2（SX09・10）がある。

SB07は総柱建物で、重複関係から前述のSB04より新しい。柱穴の埋土は黒褐色砂質シルト。北柱列中央の柱穴から10世紀後半～11世紀初頭の土師器皿と黒色土器A類椀が出土した。

SK08は東部分が残存する。底面付近から10世紀後半～11世紀初頭の土器が出土した。

SX09・10は不整形の浅い窪みで、埋土から10世紀後半～11世紀初頭の土器が出土した。前述の溝SD05と位置が重複することから、溝の廃絶後に形成されたと考える。



HJ第663次調査　鎌倉時代～室町時代前葉の遺構（1/300）

HJ第663次調査　遺構一覧表2　鎌倉時代～室町時代前葉

遺構番号	棟方向	規模（間）	桁行全長	梁行全長	柱間寸法（m）		柱穴の深さ	備考
		桁行×梁行	(m)	(m)	桁行	梁行	(m)	
SA11	東西	2	2.7		1.35等間		0.4	柱穴から12～13世紀の土器片が出土
SB12	東西	3×2	6.6	3.9	東から2.4-1.8-2.4	1.95等間	0.4	総柱建物、柱穴から14世紀前半の土器片が出土
SB13	東西	3×2	5.85	3.6	1.95等間	1.8等間	0.3	総柱建物、SB12と北柱列が揃う、柱穴から14世紀前半の土器片が出土

遺構番号	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）	時期	主要出土遺物	備考
SD14	南北方向	幅0.9～1.5×長さ6.5以上	0.1～0.2	13世紀後半～末	土師器皿・羽釜、瓦器椀、青磁椀（龍泉窯系）、平瓦	
SK15	隅丸方形	東西1.1×南北1.3	0.4	12世紀末	土師器皿・羽釜、瓦器椀、白磁壺（華南産）、丸瓦、平瓦、	
SK16	上部：円形 下部：方形	上部：径2.0 下部：東西・南北とも1.1	0.7	12世紀末	土師器皿・高台付皿、瓦器椀、白磁皿（華南産）、丸瓦、平瓦	
SK17	円形	東西1.0×南北0.9以上	0.4	13世紀前半	土師器皿、瓦器椀、丸瓦、平瓦、砥石	
SK18	円形	径1.1	0.3	13世紀前半	土師器皿、瓦器椀、須恵器捏鉢（東播系）、瓦質土器浅鉢、白磁椀、丸瓦、平瓦	
SK19	楕円形	東西0.7×南北1.0	0.1	13世紀前半	土師器皿、瓦器椀	
SK20	円形	径1.1	0.9	13世紀後半	土師器皿・羽釜、瓦器椀、軒平瓦（型式不明）、丸瓦、平瓦、砥石	水溜めの可能性、土師器皿が多量に出土
SX21	不整形	東西6.8×南北3.0以上	0.3	13世紀前半	灰釉陶器椀・皿、緑釉陶器火舎、土師器皿、瓦器椀、須恵器捏鉢（東播系）、瓦質土器浅鉢、白磁椀（II・IV類）・皿（華南産）、丸瓦、平瓦、骨	灰釉陶器・緑釉陶器は9世紀のもの

鎌倉時代～室町時代前葉　掘立柱塀1条（ＳＡ11）・掘立柱建物2棟（ＳＢ12・13）・溝1条（ＳＤ14）・土坑6基（ＳＫ15～20）・性格不明の浅い窪み1（ＳＸ21）があり、重複関係・遺物の時期から少なくとも2時期の変遷が認められる

HJ第663次調査　ＳＫ20土器出土状態（東から）

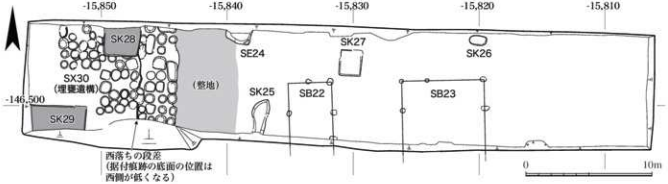
ＳＢ12・13は総柱建物で、北柱列が揃う。重複関係から、ＳＢ13は後述するＳＸ21より新しい。いずれも柱穴の埋土は黒褐色砂質シルトで、ＳＡ11は12～13世紀、ＳＢ12・13は14世紀前半の土器小片を含む。

ＳＢ13と位置が重複するＳＫ15・16は、出土遺物の時期からＳＢ13より古い。ＳＫ17は、重複関係から後述するＳＸ21より古い。ＳＢ12と位置が重複するＳＫ18は、出土遺物の時期からＳＢ12より古い。ＳＫ20の埋土は褐色砂質シルトで、内部が湿潤であったと推察する。上下2層に区分でき、下層上面で13世紀後半の土師器皿等が集積して出土した。掘方下部の砂礫層の地山に湧水がなく、水溜めの可能性がある。

ＳＸ21は不整形の浅い窪みで、埋土から8～9世紀と13世紀前半の土器が出土した。

室町時代中葉　掘立柱建物2棟（ＳＢ22・23）・井戸1基（ＳＥ24）・土坑5基（ＳＫ25～29）・埋甕遺構1（ＳＸ30）がある。

ＳＢ22・23は、北柱列が揃う。ＳＢ22の柱穴の埋



HJ第663次調査　室町時代中葉の遺構（1/300）

HJ第663次調査　遺構一覧表3　室町時代中葉

遺構番号	棟方向	規模（間）		桁行全長	梁行全長	柱間寸法（m）		柱穴の深さ	備考
		桁行×梁行		(m)	(m)	桁行	梁行	(m)	
SB22	南北	2以上×2		4.5以上	3.6	2.25等間	1.8等間	0.3	柱穴から14世紀中頃の土器片が出土
SB23	不明	3×1以上		6.75	2.4以上	2.25等間か	2.4	0.4	SB22と北柱列が揃う

遺構番号	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）	時期	主要出土遺物	備考
SE24	不整円形	東西2.2×南北1.1以上	2.0以上	15世紀	土師器皿、常滑産陶器甕、備前産陶器甕、丸瓦、平瓦、刻印瓦、土管、鉛滓	井戸
SK25	不整形	東西1.3×南北2.7以上	0.2	15世紀	土師器皿、黒色土器A・B類椀、白色土器皿（以上、10～11世紀）、青磁碗（越州窯系）、土師器皿（14～15世紀）、銭貨（不明）、紙石、炉壁	小型炉の炉壁か出土
SK26	楕円形	東西1.4×南北0.8	0.2	15世紀前半	土師器皿、丸瓦、平瓦	
SK27	方形	東西2.1×南北2.6	0.9	15世紀～16世紀前半	土師器皿・羽釜（大和Ⅰ型）、瓦質土器鉢・ミニチュア羽釜、信楽系陶器擂鉢、軒丸瓦（型式不明）、丸瓦、平瓦、土管、板材・丸材・角材、漆椀、檜皮、紅皿、紙石、鉛滓、貝殻	水溜めの可能性
SK28	方形	東西2.8×南北2.3以上	0.7	15世紀末頃	常滑産陶器甕、土管	
SK29	方形	東西4.6以上×南北2.0以上	1.7	15世紀末頃	土師器皿・羽釜（大和Ⅰ型）、瓦質土器鉢・擂鉢、常滑産陶器甕（14世紀後半・15世紀前半）、備前産陶器甕（15世紀）、青磁碗・皿（龍泉窯系）、鉄釘・壺	炭粉・焼土層あり、甕は埋甕遺構SX30に伴う可能性。
SX30	範囲：L字状	東西9.5m×南北7.6以上	0.4～0.5	15世紀前半～末頃	土師器皿・羽釜（大和H・Ⅰ型）、瓦質土器擂鉢、陶器甕、丸瓦、平瓦、熨斗瓦、土管	埋甕遺構、据付痕跡

土には14世紀中頃の土器小片を含む。重複関係から、ＳＢ22は後述する室町時代後葉のＳＢ32・ＳＫ34よりも古く、ＳＢ23は同ＳＫ36より古い。ともに柱穴の埋土は暗黄灰色砂質シルト。遺構の配置を勘案し、この時期の可能性を考えた。

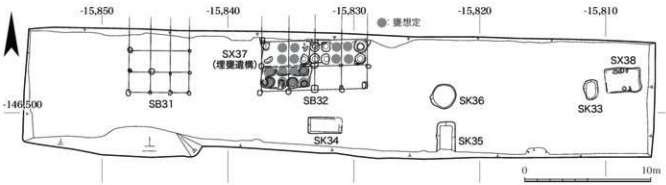
ＳＥ24は素掘りの井戸。埋土は黒褐色の砂質シルトで、15世紀頃の土器小片を含む。

ＳＫ25は、埋土に炭・焼土塊を含み小型炉の炉壁が出土した。周辺に鍛冶工房が存在した可能性がある。出土土器には10～11世紀と15世紀のものがある。ＳＫ27は、下位の埋土が暗黄灰色や黒褐色の砂質シルトで、内部が湿潤であったと推察する。掘方下部の地山の砂礫層に湧水がなく、水溜めの可能性がある。枠の部材とみられる角材片や板片が出土した。ＳＫ28は、重複関係からＳＸ30より新しく、後述する室町時代後葉のＳＢ31より古い。ＳＫ29は、中位に多量の炭化物・国産陶器甕片の集積層がある。甕は、14世紀後半～15世紀前半の常滑産と15世紀の備前産である。他に14世紀～15世紀末の土師器や瓦質土器が出土した。火災の廃棄処理用と考えられる。

ＳＸ30は、東西12列・南北9列以上の埋甕遺構で、合計82基の甕の据付痕跡を確認した。据付痕跡は比高差0.5ｍほどの西落ちの段差を挟んで東西に分布する。段差の東側は東西4列で、前述の溝ＳＤ14に沿う段差の西側を埋めた整地土層の上面から掘削されている。同西側は、南側4列分が東西4列で北側5列分が東西8列と想定されるが、やや整然さに欠ける。西側の底面の位置は東側より低い。個々の据付痕跡は径0.6ｍ前後で、甕の体・底部の形にあわせて地山を掘削する。擂鉢状のものと円筒状ものがあり、前者は常滑産、後者は備前産と推察できる。据付痕跡内に甕は残っていなかったが、据付痕跡の形状と位置関係から、前述のＳＫ29から出土した多量の甕が据えられていた可能性が高い。遺構の重複関係やＳＫ29の出土遺物の時期等から、存続時期は15世紀前半～末頃で、火災で廃絶したと考えられる。

室町時代後葉　掘立柱建物2棟（ＳＢ31・32）・土坑4基（ＳＫ33～36）・埋甕遺構1（ＳＸ37）・石組遺構1基（ＳＸ38）がある。

ＳＢ31・32は南柱列が揃う。ＳＢ31は総柱建物の可能性があり、前述の埋甕遺構ＳＸ30の跡地に建つ。



HJ 第 663 次調査　室町時代後葉の遺構（1/300）

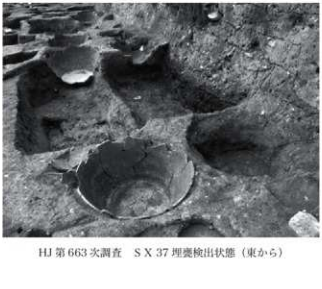
HJ 第 663 次調査　遺構一覧表 4　室町時代後葉

遺構番号	棟方向	規模（間）	桁行全長	梁行全長	柱間寸法（m）		柱穴の深さ	備考
		桁行 × 梁行	(m)	(m)	桁行	梁行	(m)	
SB31	不明	東西 3× 南北 2 以上	東西 4.95	南北 3.3 以上	東西 1.65 等間	南北 1.65 等間	0.6	総柱建物の可能性、礎石あり
SB32	不明	東西 4× 南北 2 以上	東西 8.4	南北 4.2 以上	東西 2.1 等間	南北 2.1 等間	0.6	総柱建物、礎石あり、SB31 と南柱列が揃う、埋甕 SX37 の覆屋

遺構番号	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）	時期	主要出土遺物	備考
SK33	隅丸方形	東西 1.2× 南北 1.6	0.4	16 世紀中頃	土師器皿・羽釜（大和 I 型）、瓦質土器鉢・擂鉢、白磁皿（小野 C 群）、丸瓦、平瓦、石鏃	
SK34	方形	東西 2.7× 南北 1.3	0.5	16 世紀後半	土師器皿・羽釜（大和 I 型）、瓦質土器鉢、信楽産陶器擂鉢、軒平瓦（型式不明）、丸瓦、平瓦、礪石	
SK35	隅丸方形	東西 1.5× 南北 2.3	0.7	16 世紀後半	土師器皿、瓦質土器鉢・擂鉢、陶器甕、青花皿（小野 C 群）、丸瓦、平瓦、鉄滓	
SK36	円形	径 2.0	0.8	16 世紀後半	土師器皿・羽釜（大和 I 型）、瓦質土器擂鉢・ミニチュア羽釜、備前産陶器茶入れ、白磁皿（小野 C 群）、丸瓦、平瓦、面戸瓦、土管、角材、漆器（椀か皿）、下駄、檜皮、礪石、種子（モモ・クリ）、魚骨	水溜めの可能性
SX37	範囲：L 字状	東西 8.1× 南北 4.0 以上	0.5	16 世紀前半～17 世紀初頭	（埋甕）備前産陶器甕 （埋土）肥前産陶器椀・皿、瀬戸美濃産陶器徳利、土管、鉄釘、鏡、礪石	埋甕遺構、建物 SB31 内に設置、埋土に炭粒・焼土塊含む
SX38	隅丸方形	東西 2.8× 南北 2.0	0.2	16 世紀後半	土師器皿、土管	石組遺構

ＳＢ 32 は総柱建物で、位置関係からＳＸ 37 の覆屋と考える。ともに柱穴の埋土は黒褐色や暗黄灰色の砂質シルト。柱穴の大半は掘方底面に礎石を据えており、柱痕跡が残るものもある。

ＳＫ 36 は、埋土が暗灰色や黒褐色の砂質シルトで、漆器・下駄や種子が出土したことから、内部が湿潤であることが推察できる。掘方下部の地山の砂礫層に湧水がないことから、水溜めの可能性がある。



HJ 第 663 次調査　ＳＸ 37 埋甕検出状態（東から）

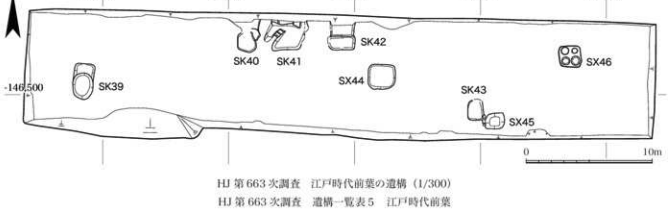
ＳＸ 37 は、東西 9 列、南北 4 列以上の埋甕遺構で、南東隅部の東西 5 列・南北 2 列分は設置されておらず、合計 26 基の埋甕と掘付痕跡を確認した。江戸時代前期のＳＫ 41・42 に一部破壊されており、発掘区北壁沿いで 8 点の甕の下半部、その南西に接して 8 点の据付痕跡を検出した。据付に伴う掘方は平面方形で、2 列を単位とする。甕は全て備前産で、15 世紀と 16 世紀前半のものがある。甕の埋土には 17 世紀初頭の陶磁器片と炭粒・焼土塊を含む。以上のことから、存続期間は 16 世紀前半～ 17 世紀初頭で、火災で廃絶したと考える。前述した埋甕遺構ＳＸ 30 の後続の施設の可能性がある。

ＳＸ 38 は、掘方の南側面と北側面に沿う石組の一部が残る。埋土から 16 世紀後半の土師器皿が出土。

江戸時代前～中葉　土坑 5 基（ＳＫ 39 ～ 43）・石組遺構 2 基（ＳＸ 44･45）・埋甕遺構 1（ＳＸ 46）がある。

ＳＫ 40 ～ 42 は、奈良～室町時代の遺構面直上の整地土層から掘削されている。多量の土器類の破片が出土したことから、塵芥処理用の土坑と考える。

ＳＸ 44 は石組が壊され、掘方底部にその痕跡が残る。



HJ第663次調査　江戸時代前葉の遺構（1/300）

HJ第663次調査　遺構一覧表5　江戸時代前葉

遺構番号	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）	時期	主要出土遺物	備考
SK39	隅丸方形	東西1.7×南北2.8	0.3～0.5	16世紀末～17世紀初	土師器皿・鍋、瓦質土器鉢、信楽産陶器擂鉢、備前産陶器大鉢、肥前産陶器椀・皿、丸瓦、平瓦、土管、石製硯	
SK40	不整形	東西1.5×南北2.5以上	1.0	17世紀前半	肥前産陶器椀、信楽産陶器擂鉢、新平瓦（型式不明）、丸瓦、平瓦、須恵瓦、土管、鉄釘、銭貨（皇宋通宝？）、滑石	奈良～室町時代遺構面頂上の整地土層から掘削
SK41	不整形	東西2.8×南北2.2以上	0.6	17世紀前半	土師器皿・羽釜（大和Ⅰ型）、瓦質土器鉢・擂鉢・風炉、備前産陶器椀・利、信楽産陶器擂鉢、肥前産陶器椀・皿、瀬戸・美濃系陶器椀・皿、丸瓦、平瓦、桟瓦、土管、煙管、鉄釘	奈良～室町時代遺構面頂上の整地土層から掘削
SK42	隅丸方形	東西2.0×南北2.2以上	0.8	17世紀後半～18世紀	土師器皿・鍋釜、肥前産陶器椀、肥前系磁器椀・皿、瀬戸・美濃産陶器椀、信楽産陶器擂鉢、軒丸瓦（右三巴紋）、軒平瓦（型式不明）、丸瓦、平瓦、桟瓦、須恵瓦、土管、魚骨・鱗	奈良～室町時代遺構面頂上の整地土層から掘削
SK43	隅丸方形	東西1.3×南北1.6	0.5	17世紀前半	信楽産陶器擂鉢、肥前産陶器椀・皿、丸瓦、平瓦、角材、紙滓、種子（ウリ等）、魚骨、貝殻	
SX44	隅丸方形	東西2.2×南北2.0	0.2	17世紀前半	肥前系磁器皿、土管	石組遺構
SX45	隅丸方形	東西1.1×南北1.2	0.3	17世紀	肥前産陶器椀、土管、紙滓	石組遺構
SX46	隅丸方形	東西・南北とも1.8	0.2～0.3	17世紀前半	（埋甕）瓦質土器深鉢（埋土）土師器羽釜（大和Ⅰ型）、肥前産磁器椀、丸瓦、平瓦	埋甕遺構、抜取痕跡

後者は掘方の西肩沿いに石組が残る。

ＳＸ46は甕４点分の据付痕跡が残る。北西の据付痕跡から掘えられたとみられる瓦質土器深鉢の破片が出土した。

その他　発掘区の中央部から東寄りにかけて、数多くの小土坑がみられる。形状が平安時代中葉～室町時代の建物・塀の柱穴とよく似ており、この時期の複数の建物・塀の柱穴を含む可能性が高い。　（安井宣也）

Ⅳ　出土遺物

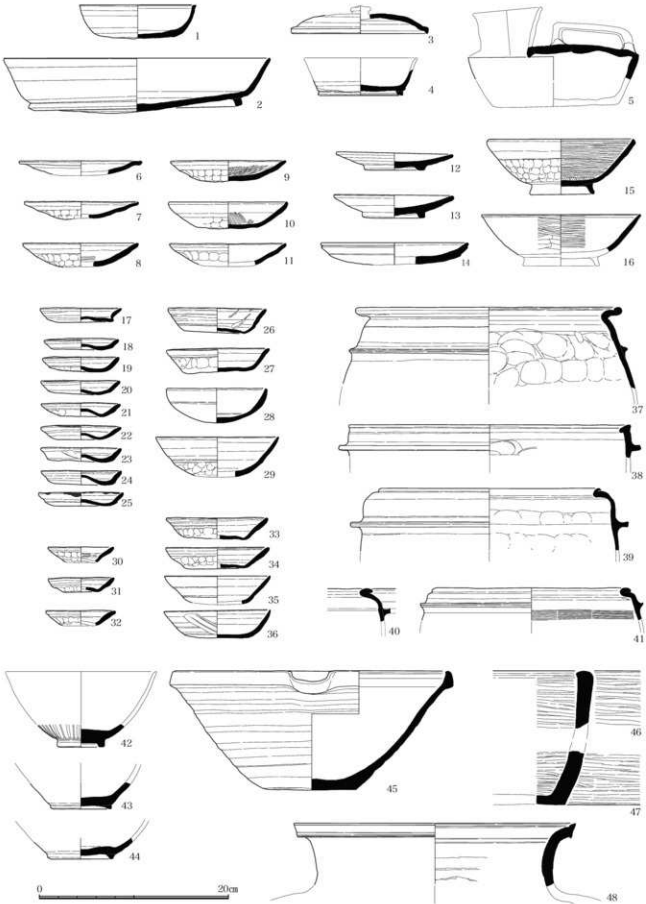
遺物整理箱で合計117箱分が出土した。土器類が92箱、瓦類16箱、土管２箱、金属製品・木製品４箱、炉壁が３箱分ある。以下、主要なものについて記す。

土器類　土器類92箱分のうち、埋甕遺構から出土した備前産甕と常滑産甕の破片が26箱分に及ぶ。その他は８世紀～18世紀代の各時期ものがあり、量的に主体を占めているのは16世紀以降のものである。以下、各時期ごとに報告する。

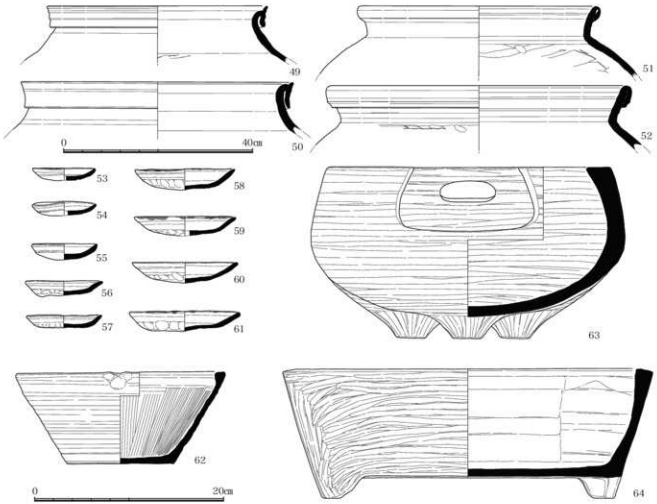
８世紀代の土器（１～５）　８世紀代の土器類は、大半が後世の遺構に混入した状態で出土しており、図示したものはいずれも須恵器である。杯Ａ（１）と杯Ｂ（４）の口縁部内外面はロクロナデ、底部外面はヘラキリのままである。１は掘立柱塀ＳＡ01の中央の柱穴、４は土坑ＳＫ08から出土。皿Ｂ（２）は、口径28.2㎝の大型品。底部外面はロクロケズリ、その他はロクロナデ。溝ＳＤ06出土。杯蓋（３）は、頂部外面に墨書があるが判読できない。浅い窪みＳＸ10出土。平瓶（５）は、内面全体に白色物質が付着し、詳細な調整は不明。同ＳＸ09出土。いずれも８世紀後半以降と考える。

土坑ＳＫ25出土土器（６～16）　土師器杯・皿・甕、須恵器杯Ｂ・甕、黒色土器Ａ類椀、白色土器皿がある。土師器杯（８～11）と皿（６・７・14）は、形態的に区別することが難しく、器高の深浅の差で判断できる程度である。器壁が厚く、体部外面に指オサエの痕跡が明瞭に残るものが大半を占める。８～10の内面にはハケ目痕跡が残る。14の土師器皿は、丸みのある底部と短い口縁部からなる。白色土器皿（12・13）は、ロクロによるケズリ出し高台と斜め上方に開いた口縁部からなる。黒色土器Ａ類椀は、体部外面に磨きがあるもの（16）と無いもの（15）がある。これらは、型式的特徴からみて、10世紀代のもの（６～13、16）、10世紀後半～11世紀初頭のもの（15）、12世紀代のもの（14）と考える。この他に、14世紀後半～15世紀代の土師器皿や小型炉の破片が出土している。

溝ＳＤ14・室町時代整地土層出土土器（17～48）



HJ 第 663 次調査　出土土器（1 ～ 5・8 世紀代土器、6 ～ 16・S K 25、17 ～ 29・45・S D 14、30 ～ 44・46 ～ 48 室町時代整地層　1/4）



HJ 第663次調査　出土土器（49～51・ＳＫ29、52・SX37　1/8、53～64・ＳＫ41　1/4）

土師器皿・羽釜、須恵器椀・捏鉢、国産陶器甕、瓦質土器鉢、輸入磁器青磁があり、13世紀末～15世紀代の土器類が混入した状態で出土した。17～29・45は溝ＳＤ14、その他は整地土層出土。

土師器皿（17～36）は、法量及び形態的な特徴から、17は13世紀後半、18～29は14世紀代、30～36は15世紀代と考えられる。28・29・35・36は、胎土・焼成ともに白く仕上げられている。土師器羽釜は、大和Ｂ型（37）、大和Ｈ型（39～41）に分類されているものである。37は14世紀代、38～41は14世紀後半～15世紀代頃のものと考える。須恵器椀（43・44）は、いわゆる「山茶椀」である。東海産。須恵器捏鉢（45）は東播磨産、国産陶器甕（48）は常滑産である。瓦質土器鉢（46・47）は、内外面全体にミガキを丁寧に施している。46と47は接合しないが、同一個体の可能性がある。46は二次的に火を受けたようで、炭素が焼けとんでいる。青磁椀（42）は、龍泉窯系の製品で、ケズリ出し高台で鎬蓮弁文がみられる。須恵器椀・青磁椀は13世紀代、須恵器捏鉢・国産陶器甕及び瓦質土器鉢は13世紀末～14世紀代と考える。

土坑ＳＫ29・埋甕遺構ＳＸ37出土土器（49～52）

土坑ＳＫ29から出土し、埋甕遺構ＳＸ30に伴う可能性が高い国産陶器甕には、常滑産（49・50）と備前産（51）がある。49は14世紀後半のもので、口径46.0㎝、口縁部の縁帯の幅は4.5㎝。50は15世紀前半のもので、口径57.0㎝、口縁部の縁帯の幅は5.5㎝。49に比べて縁帯の幅が広く、頸部外面に近付く。ともに器高及び体部径が60～70㎝程度の製品。51は15世紀のもので、口径49.2㎝、頸部高6.8㎝、口縁部の玉縁の幅は3.7㎝。玉縁は丸みを帯び、肩部内面に板状工具によるナデ調整痕が残る。器高及び体部径が80㎝程度の製品。

埋甕遺構ＳＸ37で出土した８点の国産陶器甕は全て備前産で、７点が16世紀前半（52）、１点が15世紀のものである。52は口径61.6㎝、頸部高7.8㎝、口縁部の玉縁の幅は4.8㎝。51に比べ玉縁が扁平になる。器高100㎝・体部径80㎝程度の製品。

土坑ＳＸ41出土土器（53～64）　土師器皿（53～

61)、瓦質土器風炉（63)・鉢（64)、国産陶器擂鉢（62)、国産陶磁器片がある。土師器皿は、口径 6.7 ～ 8.2㎝、器高 1.3 ～ 1.7㎝の小皿（53 ～ 57）と口径 10.5 ～ 11.8㎝、器高 2.0 ～ 2.2㎝の大皿（58 ～ 61）に分けることができる。瓦質土器風炉（63）は、丸みがかった底部と内湾しながら立ち上がる体部から成り、円柱状の脚部が三箇所に付く。口径 30.0㎝、体部最大径 33.3㎝、器高 17.7㎝を測る。体部には切りこみ口と楕円形状の透孔がある。全面に丁寧なミガキが施されている。瓦質土器鉢（64）は、方形の火鉢で、一辺 39.1㎝に復原できる。器高は 13.4㎝。外面のみミガキが施されている。62 は信楽産の擂鉢で、口径 22.4㎝、器高 9.5㎝、底部径 11.2㎝。これらは 17 世紀前半頃のものと考えられる。

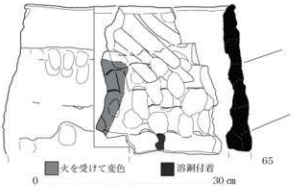
小型炉（65）　土坑ＳＫ 25 から上端部径 33.5㎝、残存高 23.5㎝を測る小型の炉壁片が出土した。スサや小石・土器小片を多く含んだ粘土紐（径約３㎝）を６段以上積み上げて作られている。粘土紐の接合部には粗い指オサエ痕跡が残る。炉壁上端部内面は、斜め方向に指でナデつけ、粘土紐痕跡を消している。上端部外面にも指オサエの痕跡が残る。外面は二次的に火を受けて器表面が剥離し、爛れた状態であるのに対し、内面上半部は煤されたような状態で煤が付着している。一部に火を受けて赤く変色している箇所があり、この部分に鞴の羽口を連結したと考える。炉壁片の下端の一部に溶銅が付着している。炉内に木炭と地金を交互に重ねて燃焼し、溶解した金属は、小型炉の底に設置したルツボに溜まる構造になると考えられる。共伴する土器からみて 15 世紀代頃のものであろう。

瓦類　土坑・溝から出土した軒瓦、丸・平瓦、熨斗瓦、面戸瓦等がある。大半が平安時代以降のもので、丸・平瓦が多い。軒丸瓦・軒平瓦は 10 点ずつで、型式不明の軒平瓦１点を除き、平安時代以降のものである。中世の巴紋軒丸瓦が排土中と遺構検出時に１点ずつ、17 ～ 18 世紀代の巴紋軒丸瓦が江戸時代の土坑ＳＫ 42 から１点、中世の文字紋軒丸瓦が江戸時代の土坑から１点、それぞれ出土している。　（三好美穂・安井宣也）

Ⅴ　調査所見

今回の調査の結果、調査地内は奈良時代後半に開発され、その後江戸時代に至るまでほぼ継続して居住地に利用されていたことがわかった。その様相と変遷に関する主な調査成果は、概ね以下のとおりである。

１　奈良時代後半には、台地の斜面に宅地に適した平坦地を確保するために切土と整地を行う大掛かりな造成を行っており、形成された地盤は室町時代まで手を加えながら利用されている。また、現在みられる町屋の敷地は、江戸時代以降の整地土層で形成されている。



HJ 第 663 次調査　ＳＫ 25 出土小型炉（1/6）

２　奈良時代後半～平安時代初頭には、十一坪の東半部を南北に四分割して利用していた可能性がある。

３　平安時代中葉には、奈良時代後半～平安時代初頭に十一坪内を分割する溝ＳＤ 05 は廃絶していることから、前段階とは利用の様相が異なると考えられる。

４　鎌倉時代～室町時代前葉には、西落ちの段差とそれに沿う溝ＳＤ 14 で東西に区分して利用していた。

５　室町時代中～後葉には、西落ちの段差とそれに沿う溝ＳＤ 14 を埋めて整地し、それまで東西に区分された敷地を一連で利用していた。埋甕遺構ＳＸ 30・37 は醸造物等の貯蔵施設の可能性があり、土坑ＳＫ 25 から出土した小型炉からは鋳造工房の存在がうかがえる。以上のことから、手工業生産の工房やそれらの製品を取り扱う商家であった可能性がある。

また、今回の調査地とその北方の東城戸・椿井町内で実施した市ＨＪ第 232・482・493 次調査地、同南東の阿字万字町内で実施した市ＨＪ第 424 次調査地とは、奈良時代から江戸時代にかけての居住に伴う遺構が概ね継続的にみられる点が似ている。それに加え、北方の市ＨＪ第 232・493 次調査地とは室町時代中葉、市ＨＪ第 482 次調査地とは同後葉の埋甕遺構を伴う点も似る。

以上のことから、調査地のある東城戸町と隣接する椿井町・阿字万字町付近では平城京の外京や興福寺郷及び奈良町の成立過程・変遷において共通の社会的背景の存在が推察できる。今後、一連で検討する必要がある。

（安井宣也）

1）奈良市教育委員会「平城京左京四条六坊十坪・奈良町遺跡の調査　第 493 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成 15 年度』2006
2）奈良市教育委員会「平城京左京四条六坊十五坪の調査　第 232 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成３年度』1992
奈良市教育委員会「平城京左京四条六坊十五坪・奈良町遺跡の調査　第 482 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成 14 年度』2006
3）奈良市教育委員会「平城京左京四条六坊十四坪・奈良町遺跡の調査　第 424 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成 11 年度』2001

4．平城京跡（左京五条五坊六坪）の調査　第669次

事 業 名　中学校給食室建設事業	調 査 期 間　平成25年6月10日～6月25日
届出者名　奈良市長	調 査 面 積　110.3㎡
調 査 地　西木辻町67番地	調査担当者　原田憲二郎

Ⅰ　はじめに

調査地は条坊復原によれば、平城京左京五条五坊六坪の南東部に相当する。

左京五条五坊六坪の調査は、坪の中央部で1989年に奈良県教育委員会[1]が調査を行い、奈良時代前半から中頃の掘立柱建物・掘立柱塀・井戸等を検出している。坪の東辺付近では4箇所の調査（市ＨＪ第17・313・615次調査、県2011年調査[2]）が行なわれ、六坪東辺中央では掘立柱建物・土坑や、六坪とその東側の十一坪とを画する東五坊坊間路が確認されている。

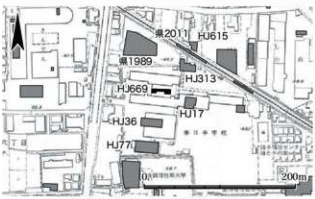
このような成果を受け、六坪内の土地利用の様相把握を主目的として、発掘調査を実施した。また、本調査地から南へ約30ｍと約70ｍ離れた左京五条五坊五坪内の2箇所の調査（市ＨＪ第36・77次調査[3]）では、7世紀後半の掘立柱建物・塀が確認されており、平城京造営以前の遺構の確認も目的として調査を進めた。

なお、調査中に発掘区中央部は、埋設されていた浄化水槽の設置・撤去時に大きく撹乱を受け、遺構が削平されていたことが判明した。

Ⅱ　基本層序

発掘区内の基本的な層序は、約0.4ｍの造成土を除去すると、明黄色粘質土の地山となる。この地山上面で遺構検出を行った。遺構面の標高は概ね67.6ｍである。

発掘区西端では造成土が約0.2ｍで、この下は旧水田耕作土の黒褐色土、暗茶褐色土（床土）、灰褐色砂質土（遺物包含層）と続き、北端では現地表面下約0.4ｍで黄褐色粘土の地山に至る。南側では灰褐色砂質土直下に、厚さ約0.1ｍの濁黄白色粘土、厚さ約0.1～0.15ｍの茶褐色土（ＳＸ03）が堆積し、黄褐色粘土の地山となる。



HJ第669次調査　発掘区位置図（1/5,000）

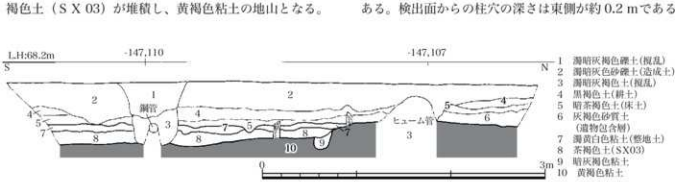
濁黄白色粘土上面では奈良時代の柱穴を検出したことから、濁黄白色粘土は奈良時代の整地土と考える。このため発掘区西端では、まず濁黄白色粘土上面で遺構検出を行ったのち、濁黄白色粘土を除去し、地山である黄褐色粘土上面で再び遺構検出を行なった。整地土上面の標高は概ね67.5ｍである。黄褐色粘土の地山上面の標高は67.5～67.3ｍで、北から南へ緩やかに下る。

Ⅲ　検出遺構

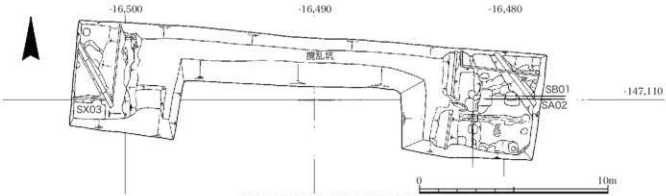
検出した遺構には、奈良時代の掘立柱建物・柱列・落ち込み、時期不明の溝がある。

ＳＢ01は発掘区東辺で検出した、東西1間（1.8ｍ）以上、南北1間（1.8ｍ）以上の掘立柱建物で、発掘区外南側と東側へ続く。柱穴の大きさは一辺約0.5ｍである。検出面からの柱穴の深さは東側が0.2ｍであるのに対し、西側の2つの柱穴の深さは0.5ｍであることから、東側の浅い柱穴を妻柱とみて、南北棟建物と考える。

ＳＡ02は、発掘区東辺で検出した、東西1間（1.5ｍ）以上の掘立柱列である。柱穴の大きさは一辺約0.9ｍである。検出面からの柱穴の深さは東側が約0.2ｍである



HJ第669次調査　発掘区西壁土層図（1/40）



HJ第669次調査　遺構平面図（1/200）

のに対し、西側の柱穴の深さは0.6 mであることから、東側の浅い柱穴を妻柱とみて、南北棟建物の南あるいは北側柱列の可能性を考える。

ＳＸ03は発掘区西端で検出した落ち込みである。埋土は茶褐色土で、８世紀の土師器・須恵器が出土した。検出面からの深さは0.1～0.15 mで、底面は北から南へ緩やかに下る。前述した褐黄白色粘土の整地土はこのＳＸ03の範囲に広がっていることから、整地作業はこのＳＸ03を原因とするものとみられる。

Ⅳ　出土遺物

出土遺物は少なく、遺物整理箱で１箱分に満たない。出土遺物には８世紀の土師器・須恵器・平瓦がある。出土遺物の大半は落ち込みＳＸ03から出土した。

Ⅴ　調査所見

調査区の大半が削平をうけていたものの、削平を免れた発掘区東辺の約15㎡では、柱穴を11基確認しており元は周辺の遺構密度が高かったものとみられる。なお、発掘区内からは７世紀以前の遺物・遺構はみつからず、南側の五坪内で確認されている７世紀の遺跡は本調査区まで広がらない可能性が考えられる。　（原田憲二郎）

1）　奈良県教育委員会「平城京左京五条五坊六坪発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報　1989年度』1990

2）　奈良市教育委員会「平城京左京五条五坊坊間路の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書　昭和56年度』1982
奈良市教育委員会「平城京左京五条五坊六坪・東五坊坊間路の調査　第313次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成６年度』1982
奈良市埋蔵文化財調査センター「平城京跡（左京五条五坊十一坪・東五坊坊間路）の調査　第615次」『奈良市埋蔵文化財調査年報　平成20（2008）年度』2011
奈良県教育委員会「平城京左京五条五坊六・十一坪」『奈良県遺跡調査概報　2011年度』2012

3）　奈良市教育委員会「平城京左京五条五坊五坪の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書　昭和57年度』1983
奈良市教育委員会「平城京左京（外京）五条五坊五坪の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書　昭和59年度』1985

HJ第669次調査　発掘区全景（西から）

HJ第669次調査　発掘区全景（北西から）

HJ第669次調査　発掘区東辺部（南から）

5．平城京跡（右京三条四坊九坪）の調査　第670次

事 業 名　宅地造成	調 査 期 間　平成25年7月29日～7月31日
届出者名　株式会社　明利建設	調 査 面 積　20㎡
調 査 地　菅原町614他	調査担当者　松浦五輪美

Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京条坊復原では右京三条四坊九坪の南端にあたり、条坊関連の遺構が確認される可能性がある場所であるが、一方、西側道路の調査（市ＨＪ第517次調査[1]）成果や地形の状態から、河川にあたる可能性も予測された。

Ⅱ　基本層序

現状はアスファルト敷きの駐車場跡地である。アスファルト以下、造成土が0.8 m、耕土の黒色土が0.15 m、黒灰色砂質土が0.15 m堆積し、現地表下約1.1mで灰色粗砂と青灰色粘土の混じった層に達する。この粘土混じりの砂層は厚さ約0.15 mで、以下は灰色粗砂が続き湧水が激しくなる。

Ⅲ　調査所見

調査の結果、遺物・遺構は確認できなかった。砂層を一部掘り下げてみたが、遺物を含まず、河床を確認することはできなかった。この砂層は河川堆積物であり、現状も湧水が激しい。調査地付近は、西側の池（今池）から東に延びる旧谷地形を形成した河川の範囲内にあたっていると判断され、市ＨＪ第517次調査で確認した河川と同一のものである可能性が高い。その際の理化学分析では、弥生時代前期以前の堆積層という結果が出ている。

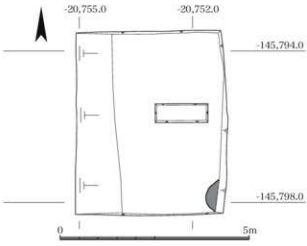
現況地形図でみると、当敷地の北端境界の曲線的な畦畔が、河岸を踏襲しているものと考えられる。

（松浦五輪美）

1）　奈良市教育委員会「平城京跡（二条大路・右京三条四坊九坪の調査第517・524次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成16年度』2007

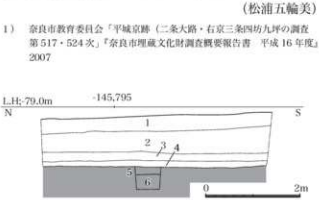
HJ第670次調査　発掘区位置図（1/5,000）

HJ第670次調査　発掘区全景（南から）



HJ第670次調査　遺構平面図（1/100）

（網掛け部分はコンクリート）



1　造成土（改良土）
2　造成土（黄色粘土＋コンクリートガラ）
3　耕土
4　黒灰色砂質土（床土）
5　灰色粗砂＋青灰色粘土
6　灰色粗砂

HJ第670次調査　発掘区東壁土層図（1/80）

6．平城京跡（右京六条三坊十二坪）の調査　第671次

事業名　西ノ京六条線道路新設工事	調査期間　平成25年9月9日～10月2日
届出者名　奈良市長	調査面積　255.5㎡
調査地　六条一丁目421-27地先	調査担当者　原田憲二郎

Ⅰ　はじめに

調査地は平城京の条坊復原によれば、右京六条三坊十二坪の北辺中央に相当し、西ノ京丘陵から東へ派生する尾根上に位置する。敷地は平坦に造成され、宅地として利用されていた。調査地の北側には六条条間南小路が想定され、十二坪内の様相把握を主目的として発掘調査を実施した。また、調査地の北東150ｍ程離れた市ＨＪ第489・492次両調査[1]では5世紀前半の六条野々宮古墳がみつかっていることから、古墳時代以前の遺構の発見も目的とした。

なお、本調査地の字名は「竜王山」で、南方の大池との間には「竜王ノ南」という字名も残る。現在、薬師寺東院堂の南に、春日造の龍王社が西面して建ち、八大竜王を祀っているが、もとは大津竜王宮または大津宮と呼ばれ、本調査地が位置する竜王山にあったものが、明治時代になって移されたものである。その創立は明らかではないが、元亀２（1571）年に新造され、また天正９（1581）年の造立を経て、さらに寛永５（1628）年にも造営があったことが伝えられている。薬師寺に伝わる江戸時代初期の成立とみられる『薬師寺絵図』にも伽藍西方、「龍王池」と記載される大池の北方に「龍王」と記された建物が確認できる[2]。このようなことから、龍王社に関連する遺構の確認も目的とした。

敷地中央には未買収地である南北道路があるため、発掘区はこれを跨ぐ形で東西２箇所に設定して行った。

Ⅱ　基本層序

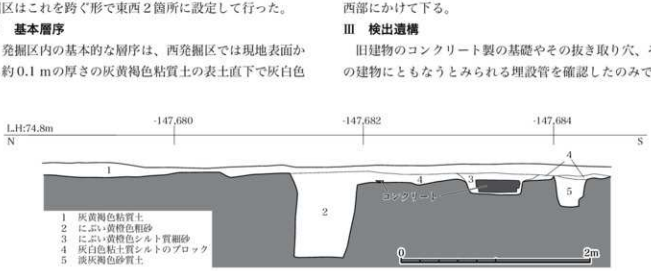
発掘区内の基本的な層序は、西発掘区では現地表面から約0.1ｍの厚さの灰黄褐色粘質土の表土直下で灰白色シルト質粘土の地山となる。この地山上面で遺構検出を行なった。検出面の標高は概ね74.5ｍである。

HJ第671次調査　発掘区位置図（1/5,000）

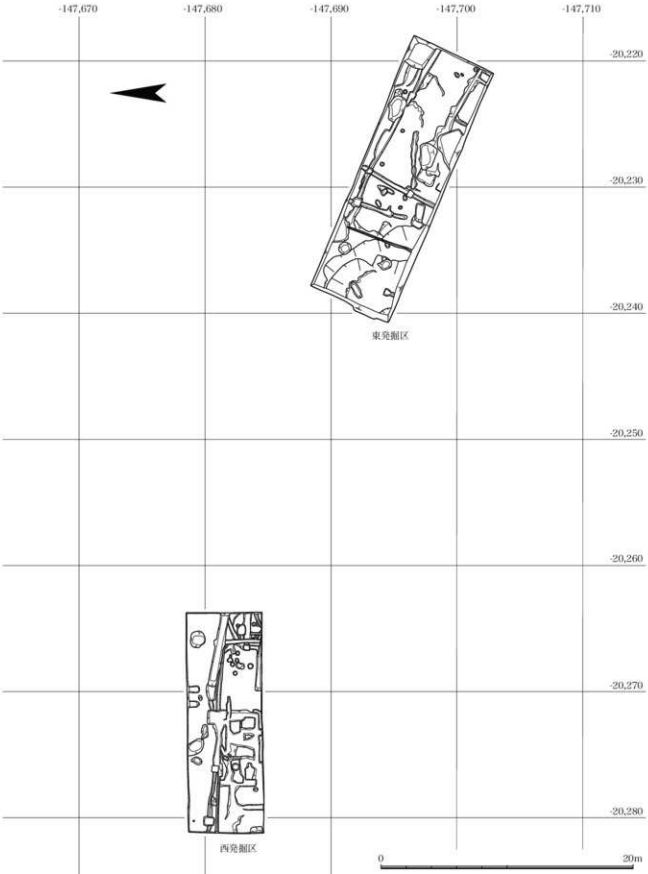
東発掘区では、東部で現地表面から約0.3ｍの厚さの黄白色粘土ブロックを多く含む表土直下で、灰白色細砂もしくは橙白色粘土の地山となる。地山面は発掘区中央部から西部にかけて下がっており、西南部では、表土(0.3ｍ)、黒灰色礫土（0.1ｍ）、灰色土を含む黄灰色粘土（0.2ｍ）、褐色土と黄白色粘土の混合土（0.1～0.8ｍ）、褐色土と赤白色粘土の混合土（0.3～0.4ｍ）、淡灰褐色砂質土（0.2ｍ）、褐色砂質土（0.3～0.4ｍ）と続き、赤褐色細砂の地山となる。北西辺では現地表下0.9ｍで、南西隅では現地表下2.1ｍで地山となる。遺構検出は地山上面で行なった。検出面の標高は東辺が概ね74.1ｍで、北西辺が73.8ｍ、南西隅が72.5ｍで、東から南西部にかけて下る。

Ⅲ　検出遺構

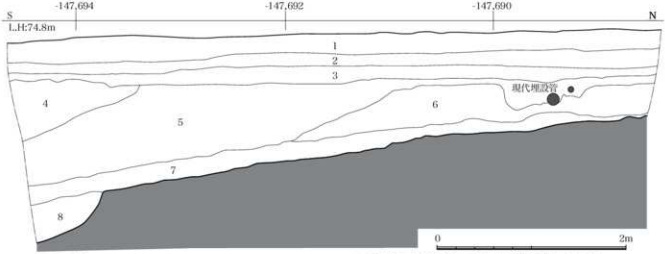
旧建物のコンクリート製の基礎やその抜き取り穴、その建物にともなうとみられる埋設管を確認したのみで、



HJ第671次調査　西発掘区東壁土層図（1/40）



HJ 第 671 次調査　遺構平面図（1/300）



1　表土
2　黒灰色砂礫土
3　黄白色粘土（旧建物解体後の整地土）
4　褐色土と黄白色粘土の混合土（炭を含む、旧建物基礎抜き取り）
5　褐色土と黄白色粘土の混合土（旧建物建設時の造成土）
6　褐色土と赤白色粘土の混合土（旧建物建設時の造成土）
7　淡灰褐色砂質土（朝耕土）
8　褐色砂質土

HJ第671次調査　東発掘区西壁土層図（1/40）

遺構は無かった。

Ⅳ　出土遺物

奈良時代の須恵器蓋1点、江戸時代以降の軒丸瓦1点・桟瓦1点・瓦製土管1点と遺物は少ない。いずれも西発掘区の表土から出土した。

Ⅴ　調査所見

調査の結果、西発掘区と東発掘区東辺は宅地造成の際、遺構は削平をうけたとみられる。東発掘区西辺は、盛土造成が行なわれており、両発掘区の間にある南北道路部分から東発掘区西辺にかけては、南北方向の谷地形であったと考える。このような状況から、調査地周辺に想定される龍王社については、旧地形では周囲より高所であったとみられる西発掘区周辺が有力候補地と考えるが、現在薬師寺に建つ社殿と同様の建築物であったなら、地下遺構として残存する可能性は少ないとみられる。ただし祀りに関わる土器の廃棄土坑等が確認できる可能性は残り、今回の工事範囲外である西発掘区南側に関しては今後も注意が必要と考える。　（原田憲二郎）

1）　奈良市教育委員会「六条野々宮古墳・平城京跡（右京六条三坊六坪）の調査　第492次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成15年度』2006

2）　龍王社の記載は、奈良六大寺大観刊行会編『奈良六大寺大観』補訂版第六巻　薬師寺　全　岩波書店2000に拠る

HJ第671次調査　西発掘区全景（東から）

HJ第671次調査　東発掘区全景（東から）

7．平城京跡（左京二条七坊十六坪）の調査　第672次

事 業 名　老人福祉施設新築	調 査 期 間　平成25年9月27日～11月13日
届出者名　個人	調 査 面 積　上層260㎡　下層113㎡
調 査 地　今小路町29番1	調査担当者　池田裕英・宮本賢治

Ⅰ　はじめに

調査地は奈良市今小路町で、平城京の条坊復原では左京二条七坊十六坪にあたり、東七坊大路の西に隣接する場所である。「今小路」の名は平安時代後半から「今小路郷」として史料にみえる。奈良と京都とを結ぶ街道沿いであったこともあり、平城京廃絶後も栄えていた場所であったようである。

調査地の周辺ではこれまでに数度の発掘調査が行われ、調査地の南約200ｍの調査（市ＨＪ第531次･605次）では奈良時代から江戸時代までの各時代の建物や井戸、土坑といった遺構が検出されている。

この場所は、安永２（1773）年の今小路町を描いた絵図によると、土門求馬の宅地であった。この土門家とは茶会記の『松屋会記』で知られる漆屋・松屋のことである。土門家は、最盛期は現一条通から東笹鉾までの一体を占めていたとされ[1]、その絵図には土門求馬宅の南方に土門源之丞の名もみえる。

発掘調査に先立ち、遺構面の深さや残存状況を知るための試掘調査（2013-3次）を行ったところ、現地表下1.2ｍの暗褐色土上面で19世紀中頃の土坑、1.3m下で11世紀の瓦器が出土する暗灰色粘土層を検出し、過去の調査と同様に遺構面が重層的に存在することがわかった。発掘調査では、これらの層上面で遺構検出を行うこととした。

Ⅱ　基本層序

発掘区の層序は多くの層が重複し複雑であるが、基本的には造成土（土層図１～20）、江戸時代以降の層（21～28）、鎌倉～江戸時代の層（29～45）、平安～鎌倉時代の層（46～55）に大別することができる。

遺構検出は上層と下層とで計２回行った。上層は30・38層上面（標高82.4ｍ）で行い、室町時代から江戸時代の遺構を検出した。下層は地山上面及び46～49層上面（標高82.0ｍ）で行い、平安時代から鎌倉時代の遺構を検出した。33層上面では鎌倉時代後半の土坑を検出した。上層遺構検出面と下層遺構検出面との間に鎌倉時代後半の遺構面があるようであるが、この層ではこれ以外の遺構はなかった。

上述の市ＨＪ第531次調査地での地山は、黄灰色粘土もしくは茶灰色砂礫の固く締まった地山であった。しかし、本調査地での地山はシルト層であり、後述する土坑や井戸からの湧水が激しく、旧地形は谷であったのではないかと推測する。地山上面は東から西に向かって緩やかに下っている。地山上面の標高は81.9～82.0ｍである。

HJ第672次調査　発掘区位置図（1/5,000）

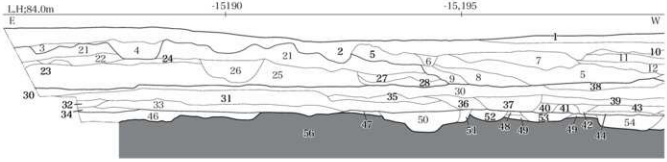
Ⅲ　検出遺構

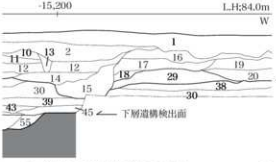
検出した遺構には、平安時代～江戸時代までの各時代の遺構がある。各遺構の詳細は一覧表に記し、各時期ごとに概要を記す。

平安時代以前の遺構　発掘区東半部で南北１間（柱間2.4ｍ）以上の掘立柱列（ＳＡ01）、素掘溝２条（ＳＤ02・03）を検出した。いずれも平安時代の遺物を含む暗白灰色粘質土（土層図46）を掘り下げた後に検出したもので、平安時代以前の遺構であることはわかるが、遺物が出土しなかったため詳細な時期は不明である。ＳＤ03からは奈良時代の須恵器小片が１点のみ出土したが、１点のみであることや斜行していることもあり奈良時代の遺構としてよいかは疑問が残る。

平安時代の遺構　ＳＤ04は幅0.3m以上、長さ3.8m以上の南北方向の素掘溝である。後述するＳＤ05により東半が壊されている。埋土は淡褐色粘土（土層図55）で、炭が混じる。９～10世紀の土師器、緑釉陶器、灰釉陶器が出土した。

鎌倉時代の遺構　溝（ＳＤ05）、井戸（ＳＥ06）、土坑（ＳＫ07～ＳＫ27）がある。ＳＤ05は幅0.7～1.5ｍの素掘溝で深さは0.25ｍである。13世紀の土師器、瓦器が出土している。ＳＥ06は掘方一辺2.2ｍの隅丸





1　灰黒色土
2　茶褐色砂質土
3　褐灰色土（小石多く含む）
4　暗茶褐色土・灰黒色土
5　茶黄色土・淡黄灰色土
6　黒灰色土
7　暗黄灰色土・灰黒色土
8　暗灰褐色粘質土
9　暗黒灰色粘質土
10　暗茶褐色土
11　暗茶灰色土
12　暗褐灰色粘質土
13　褐灰色粘質土
14　暗灰褐色粘質土
15　褐灰色粘質土
16　茶灰色土・褐灰色土
17　暗茶褐色土・暗灰褐色土
18　暗青灰色土・暗灰褐色土
19　暗灰褐色土
20　暗褐灰色土

21　褐茶色土（土師器細片多く混じる）
22　暗褐灰色粘質土
23　褐灰色土・暗黄茶色土
24　暗茶黄色土・暗灰褐色土
25　暗茶褐色土・暗褐灰色土
（土師器細片多く混じる）
26　暗茶褐色土・褐灰色土
（土師器細片多く混じる）
27　灰褐色粘質土・暗黄茶色砂質土
（土師器細片多く混じる）
28　褐灰色粘質土・暗黄茶色砂質土
29　暗褐灰色土
（暗茶褐色土と暗灰に混じる）
30　暗灰褐色土
31　灰褐色土・暗黄茶色土
32　暗灰褐色粘土・暗茶黄色土
33　褐灰色粘土・黄茶色土
34　淡褐灰色粘質土・暗褐茶色土
35　灰褐色粘土・灰緑色土
36　暗褐灰色土
（暗灰緑色土塊混じる）
37　黒灰色土
38　褐灰色シルト
39　暗褐灰色土（茶褐色土混じる）
40　淡褐灰色土・暗青灰色土
41　暗褐灰色土・暗褐茶色土
42　暗褐灰色粘質土
43　暗白灰色シルト・褐灰色土
44　暗灰緑色土・暗灰褐色粘土
45　暗茶褐色土・灰黒色土
46　暗白灰色粘質土
（暗黄茶色土塊混じる）
47　淡灰色粘土
48　暗灰緑色土・暗褐灰色粘土
49　褐灰色土・暗灰緑色土
50　暗灰色粘土・青灰色シルト
51　黒灰色砂質土
52　暗褐灰色粘土・暗灰緑色粘土
53　褐灰色粘土・青灰色粘土
54　暗褐灰色粘土
（青灰色粘土塊混じる）
55　淡褐色粘土（炭混じる）
56　暗灰緑色シルト・青灰色粘土（地山）

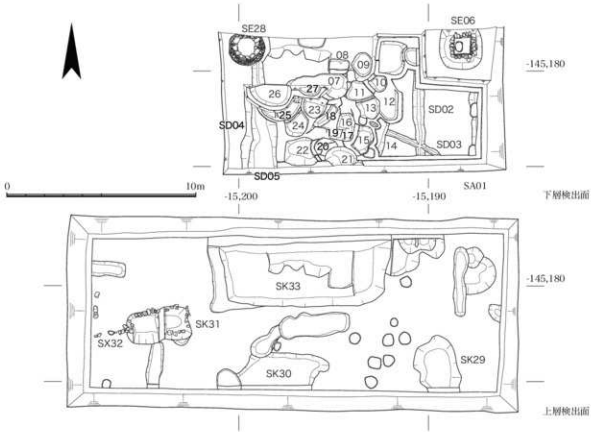
HJ第672次調査　発掘区南壁土層図（1/80）

方形で、井戸枠は下段が一辺0.8mの方形縦板組横桟留、上段が一辺0.9mの方形石組である。隅柱はない。横桟は2段あり、横桟と横桟との間に棒状の材を入れて支えていた。井戸の底に径0.45mの曲物を据えてまなことしている。曲物内には人頭大の石が詰まっていた。検出面からの深さは1.7mである。枠内から13世紀後半の土器等が出土した。ＳＫ07～ＳＫ27は平面不整形の土坑群で、深さは0.3～0.6mである。土坑は側面をえぐるように掘られたものが多い。いずれも埋土は青灰色粘土・褐灰色粘土である。幾つかの重複関係がみられ、発掘区中央部の地山が青灰色粘土部分にのみあることから、粘土採掘土坑と思われる。埋土からは13世紀中頃～後半の土器等が出土し、重複関係があるものの比較的短期間に掘られたようである。ＳＫ26・27は北半を後述のＳＫ33で壊されている。いずれも13世紀後半～末頃の土師器・瓦器などが出土している。

室町時代の遺構　井戸（ＳＥ28）、土坑（ＳＫ29～31）、石列ＳＸ32がある。ＳＥ28は上部をＳＫ33で壊されているが、掘方の径は1.9m、枠は内法径0.85mの円形石組である。検出面からの深さは0.7mである。掘方には底部まで拳大の石が充填されていた。枠内からは土器とともに犬形土製品等が出土している。ＳＫ31は東西3.3m、南北1.5mの平面長方形の土坑で、周囲に石を配している。土坑内は1～3cm角の土師器片で埋まっていた。土師器片は人為的に細かく砕いたものと思われ、何らかの意図があったように思われる。

江戸時代の遺構　土坑（ＳＫ33）がある。東西約9m、南北4m以上で、発掘区外北に続く。深さは1.1mである。江戸時代末の遺物が大量に出土した。瓦片が多く、家宅を処分した際の廃棄処理用の土坑と思われる。

時期不明の遺構　これらの遺構の他に、東西方向の石列ＳＸ32がある。長さ2m分を検出し、発掘区外西に続く。重複関係からＳＫ31より新しいことはわかるが、詳細な時期は不明である。石列の位置が敷地が南側に張り出す部分に合致していることから、ある時期の敷地の境を示す石列かもしれない。（池田裕英）



HJ 第672次調査　遺構平面図（1/200）

HJ 第672次調査　発掘区全景（上層遺構・西から）

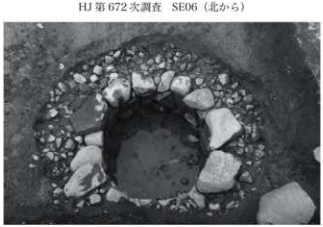
HJ 第672次調査　発掘区全景（下層遺構・東から）

HJ第672次調査　SA01（南から）

HJ第672次調査　SD04・05（南から）

HJ第672次調査　SE06（北から）

HJ第672次調査　SE06断割状態（南から）



HJ第672次調査　SE28（北から）

HJ第672次調査　SE28（東から）

HJ第672次調査　SK07～26（南から）

HJ第672次調査　SK33（東から）

HJ 第672次調査　検出遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模（間）	桁行全長	梁行全長	柱間寸法（m）		柱穴の深さ	備考
		桁行×梁行	(m)	(m)	桁行	梁行	(m)	
SA01	南北	南北1間以上	南北2.4以上	–	2.4	–	0.3	奈良～平安時代

遺構番号	掘方等			井戸枠			時期	主な出土遺物	備考
	平面形態	平面規模(m)	深さ(m)	構造	内法(m)	水層遮過施設等			
SE06	隅丸方形	一辺 2.2	1.7	上段：縦板組横桟留、下段：方形石組	上段：0.9m 下段：0.8m	曲物(径0.45m)	13世紀後半	土師器皿・羽釜、瓦器椀、白磁碗・皿・壺、青白磁壺、円盤形土製品、軒丸瓦（6235E、左巻三巴紋）、軒平瓦（6732G、6763H）、刻印平瓦（「東大」）、埴、道具瓦、丸瓦、平瓦、鉄釘、鉄滓、植物種子、魚骨、獣骨、鹿角、曲物、漆器皿、横櫛、櫛扁、砧錘車、砧鐵具（杵）、箸、斎串、木製側組工品	
SE28	円形	直径 1.9	0.7	石組	0.85	挙大の石	15世紀後半	土師器皿・高台付皿・羽釜、瓦質土器擂鉢・投鉢・浅鉢・小型浅鉢・風炉蓋、国産陶器（備前産甕、信楽産擂鉢・甕、常滑産甕、瀬戸美濃産壺）、青磁碗・皿、白磁皿、鉄釉碗、犬形土製品、丸瓦、平瓦、滑石製簪子、砥石、植物種子、魚骨、檜皮、漆器片、毬状玉、すりこぎ、砧錘車、箸、曲物、こけら屋根材、	

遺構番号	平面形等	平面規模(m)	深さ(m)	時期	主な出土遺物	備考
SD02	南北	0.5以上	0.15	8～10世紀？	須恵器蓋	
SD03	北西–南東			8～10世紀？	須恵器蓋	
SD04	南北	幅0.3以上	0.1以上	9～10世紀	土師器皿・甕、須恵器壺甕類、灰釉陶器皿	
SD05	南北	幅0.7～1.5	0.25	13世紀	土師器皿・羽釜、瓦器椀	
SK07～27	不整円形、不整方形	0.5～1.5	0.3～0.6	12世紀前半～13世紀後半	土師器皿・羽釜、瓦器椀・皿、緑釉陶器椀・皿、灰釉陶器椀・皿、白磁碗、青磁碗、軒丸瓦（6732J・6235種別不明）、軒平瓦（6733C）、丸瓦、平瓦、銅製帯金具（巡方）、鉄滓、漆膜、桃種	
SK29	不整円形	東西2.3×南北2.7以上	0.5	13世紀後半～末	土師器皿、回転台土師器皿、瓦器椀、丸瓦	
SK30	不整円形	東西4.5×南北1.7以上	0.15	14世紀後半	土師器皿・羽釜、瓦質土器浅鉢、須恵器鉢（東播産）、国産陶器（信楽産捏鉢、瀬戸美濃産卸皿・折縁深皿・花瓶、常滑産甕、白磁碗、青磁碗、青白磁碗？、円盤形土製品、丸瓦、平瓦、鉄釘、壁土、鉄滓、温石（石鍋を再利用）、砥石、銅銭（嘉祐通寶、熙寧元寶、鴨武不能）、魚骨？	
SK31	隅丸長方形	東西3.3×南北1.5	0.45	15世紀中頃	土師器皿・羽釜、瓦質土器擂鉢・風炉・浅鉢・深鉢、国産陶器（信楽産擂鉢、備前産甕、常滑産甕、瀬戸美濃産灰釉平椀・大皿・鉄釉椀、白磁碗、青磁碗、丸瓦、平瓦、木簡？鉄釘、壁土、鉄滓、蚊？銅銭（皇宋通寶、元祐通寶、嘉泰通寶、□熙元□、鴨武不能２）、植物種子、魚骨？	
SX32	東西石列	長さ2以上	–	15世紀中頃以降		SK31より新しい
SK33	長方形	東西9×南北4以上	1.1	19世紀中頃	土師器皿・高台付皿・鉢/甕、瓦質土器形浅鉢・鉢形・行灯、国産陶器（肥前産椀、唐産擂鉢、信楽産擂鉢・甕・鉢・行平鍋・鍋・急須・土瓶・椀・皿・灯明受け・燭台・ひょうそく・線香立・仏飯器・花瓶、産地不明鉢木鉢、国産磁器（肥前産椀・皿・紅皿・大皿・鉢・壺・花瓶・瓶・仏飯器、瀬戸美濃産椀、産地不明椀）、白磁碗、青花皿・盤、土師、土人形、泥笛、円盤形土製品、軒丸瓦（6235FMa、種別不明、平安時代前期、左巻三巴紋、右巻三巴紋、単弁蓮華紋）、軒平瓦（橘紋、平瓦桟花紋）、軒桟瓦、鳥瓦瓦（左巻三巴紋）、鬼瓦、道具瓦、丸瓦、平瓦、桟瓦、土管、鉄釘、鉄鐸、包丁、臀、銅製金具、鉄滓、石鹿、銅銭（宋永通寶、□元□□）、植物種子、魚骨、獣骨、貝、漆器椀、木札、曲物、桶、下駄、鞋、箒	

Ⅳ　出土遺物

遺物整理箱で60箱分の土器類と17箱分の瓦類が出土した。ＳＫ28からの出土が多く、土器類では22箱分と1/3を占める。

出土した遺物には奈良時代の軒平瓦・軒丸瓦・丸瓦・平瓦、土師器・須恵器、土馬、平安時代の丸瓦・平瓦、土師器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器、鎌倉～室町時代の軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦、土師器・瓦質土器・瓦器・国産陶器・輸入陶磁、土製品、漆器・曲物・箸、輸入銭貨、江戸時代末の軒丸瓦・軒平瓦・軒丸桟瓦・桟瓦・鳥瓦瓦・鬼瓦、土師器・瓦質土器・国産陶器・国産磁器・輸入陶磁、土製品、漆器・下駄・曲物・桶・箒・箸、銭貨などがある。各遺構出土の詳細は遺構一覧表に記し、以下主要なものについて報告する。　（池田裕英）

瓦類　丸瓦・平瓦・桟瓦・軒丸瓦・軒平瓦・軒桟瓦・鬼瓦・鳥瓦瓦・留蓋がある。ここでは軒瓦について記す。軒瓦は71点あり、軒丸瓦50点、軒平瓦14点、軒桟瓦7点である。軒丸瓦・軒平瓦の内訳は別表のとおりで、東大寺で同笵例が確認できるものが多く、条坊道路を隔てた東側の東大寺境内地からの流入品の可能性が考えられる。以下、特筆できる軒瓦について記す。

１は内区に小さい複弁８弁蓮華紋を飾る軒丸瓦である。間弁は無い。外区内縁には珠紋をめぐらす。外縁に右回りに展開する唐草紋をめぐらす点は特徴的である。

HJ 第672次調査　出土軒瓦（1/4）

瓦当側面の瓦当付近は幅1.0cm程度のケズリを施す。瓦当側面上半部はタテケズリ。瓦当裏面は接合部から下半部にかけて指頭圧痕を残し、のち側縁に沿ってケズリを施す。外区部分の小破片しか確認されていない東大寺114 B型式の良好資料とみられる。平安時代前期（794～910）の製作とみられる。

2は内区に複弁蓮華紋を飾り、外区に珠紋をめぐらす軒丸瓦である。中房蓮子配置は1＋6。間弁は二又にならない。蓮弁・間弁の先端は界線に接続する。弁区は中房・外区より1段高い。瓦当裏面下半部はナデで平坦に仕上げる。瓦当側面下半部はヨコナデを施す。東大寺128 D型式の良好資料で、平安時代前期の製作とみられる。

3はいわゆる東大寺式の軒平瓦、6733型式C種である。これまで6733型式C種は右半部資料しか知られておらず、本資料は左半部を補完する資料となる。顎の断面形態は顎面が無い曲線顎Ⅰである。凸面はタテケズリ。凹面は瓦当面から3.5cm程度まではヨコケズリ、側面寄りは1cm程度タテケズリを施し、その他は布目を残す。側面はタテケズリ。6733型式C種は平城宮・京軒瓦編年で第Ⅴ期（770～784）から平安初期（784～824）の製作とされる。

4は内区に巴紋を並べた連巴紋軒平瓦である。外区には珠紋をめぐらす。巴紋は右から2つ目は右巻き、それ以外は左巻きである。外縁頂部は脱笵後、未調整である。顎裏面にヨコナデを施す。凹面は布目痕を残す。東大寺では内区に円形紋をならべた東大寺513 B型式が知られ、この瓦との紋様の類似性から製作年代は中世Ⅱ期（1210～1260）と考える。（原田　憲二郎）

HJ 第672次調査　出土軒丸瓦・軒平瓦出土点数一覧表

軒丸瓦	点数	軒平瓦	点数
6235 E	1	6732 G	1
6235 F	1	6732 J	1
6235 M a	1	6733 C	1
6235 種別不明	2	6763 B	1
東大寺 114 B	2	興福寺Ⅷ平B 1	1
東大寺 128 D	1	古代	1
古代	2	中世（連巴紋）	1
中世（左三巴紋）	2	中世（唐草紋）	1
近世以降（左三巴紋）	17	近世以降（橘紋）	4
近世以降（左巴紋）	12	近世以降（唐草紋）	2
近世以降（右三巴紋）	5		
近世以降（右巴紋）	1		
近世以降	3		
軒丸瓦計	50	軒平瓦計	14

土器類　奈良～江戸時代の各時期のものがある。平安時代の包含層からは、9世紀後半頃の比較的まとまった緑釉陶器と灰釉陶器が出土している。ＳＥ28とＳＫ33の出土ものについて記す。

ＳＥ28からは、土師器、瓦質土器、国産陶磁器、輸入陶磁器が破片点数で213点（遺物整理箱1箱分）が出土した。出土点数の詳細は組成表に記すが、土師器皿と瓦質土器で9割を占めることがわかる。これらは、土器の型式から15世紀後半頃のものと考えられる。

土師器皿はいずれも灰白色系の胎土であるが、形態からａ群とｂ群の2つに分けられる。ａ群（2～10）は口縁部を強くヨコナデ調整するため、内面の口縁部と底

部の境が凹線状に窪む。口径は7.0～9.0㎝大のものがあり、7㎝代のものが多い。b群（12～25）は、平坦な底部に直線的な口縁部で、遺構からの出土量が最も多い。口径は6.0～15.0㎝大まで各種あり、8・11・12㎝代のものが多い。土師器高台付（11）は杯部が1点あり、胎土・製作方法はa群と同じである。

土師器羽釜は、大和H型とI型（26）が出土している。

瓦質土器は、実測図に示した擂鉢（31）・捏鉢（32）・風炉蓋（33）・深鉢（34）・浅鉢（35）・小型浅鉢（36）以外は小片である。小型浅鉢は底部を打ち欠いて底を抜いたあと、破面を整えて平滑にする。口縁部には焼成後に幅約1.0㎜、深さ約2.0㎜の切り込みを7箇所入れる。切り込みは、口縁を四等分した位置に四箇所と三等分した位置に三箇所に配する。風炉蓋は外面を非常に丁寧にミガキ調整し、3箇所に木瓜形の透孔を開ける。浅鉢は高台部分に楕円形の透孔を開ける。

備前産の甕（38・39）は15世紀頃の型式である。信楽産の擂鉢（37）は小片で擂目の有無・条数などは不明である。輸入陶磁器には龍泉窯系の青磁（27・28）と白磁皿（29）、鉄釉碗（30）がある。

HJ第672次調査　井戸SE28出土土器点数表

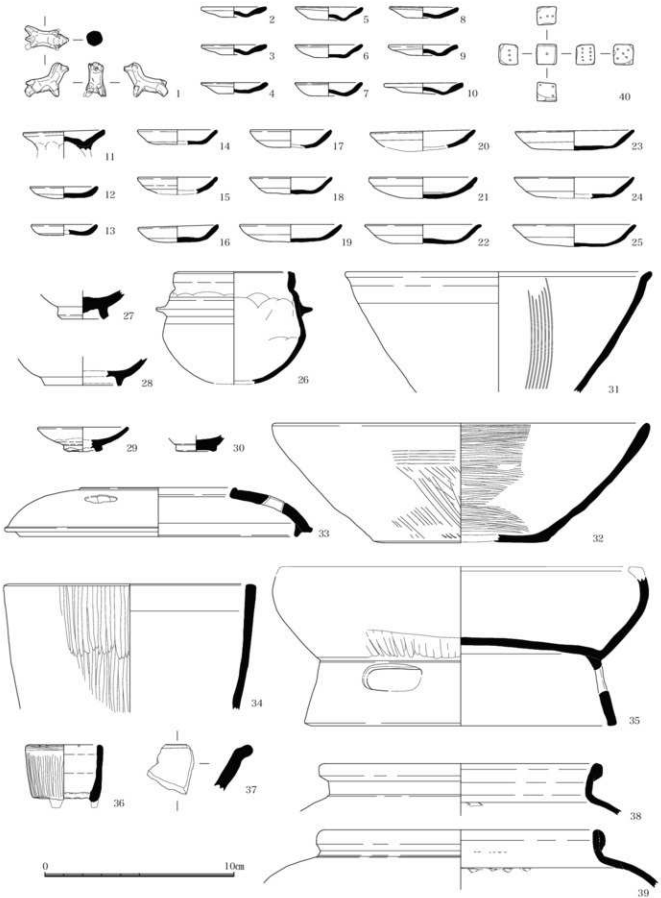
種類	産地等	器種	点数	出土比率
土師器	褐色系(a)群	皿	23	10.80%
	灰色系(b)群	皿	80	37.56%
		高台付皿	1	0.47%
		羽釜	13	6.10%
小計			117	54.93%
瓦質土器		擂鉢	4	1.88%
		捏鉢	6	2.82%
		浅鉢	9	4.23%
		深鉢	18	8.45%
		方形浅鉢	1	0.47%
		鉢類	20	9.39%
		小型浅鉢	1	0.47%
		風炉	6	2.82%
		風炉蓋	17	7.98%
小計			82	38.50%
国産陶器	常滑	甕	1	0.47%
	瀬戸・美濃	壺	1	0.47%
	備前	甕	2	0.94%
	信楽	擂鉢	3	1.41%
		壺・甕	3	1.41%
小計			10	4.69%
輸入陶磁器	青磁	碗	1	0.47%
		皿	1	0.47%
	白磁	皿	1	0.47%
	鉄釉	碗	1	0.47%
小計			4	1.88%
合計			213	100.00%

HJ第672次調査　包含層出土緑釉・灰釉陶器

HJ第672次調査　SE06出土鹿角

HJ第672次調査　SE28出土犬形土製品

HJ第672次調査　SK33出土国産陶器行平鍋把手



HJ第672次調査　ＳＥ28出土土器・土製品・石製品（1/4、38と39は1/8、40は1/2）

また犬形土製品が4点出土している。いずれも瓦質焼成である。四肢の一部を欠損するものの、おおよそ完形で出土している。1は体長4.7㎝、体高3.6㎝である。燻しがかからず灰白色の色調であるが、他の3点は燻しがかかり黒灰色の色調である。年代は15世紀後半で、犬形土製品では比較的古い年代の資料である。

ＳＫ33からは遺物整理箱にして22箱の土器類が出土しているが、その中に銘を有する行平鍋の把手がある（写真参照）。「赤ハタ」・「ハイ」は赤膚で作られたものである[2]。「佐保山」の銘については村田泥庵が「明治の初期に町田久成らが（中略）聖武天皇御陵の西方に築窯し、茶碗などを焼いて、佐保山、大佛殿などと銘印している」と記した記事がある[3]。「赤膚焼の陶工を招いて作らせたものらし」く、飴釉が掛かっていることも記されている。出土した「佐保山」銘のものも暗灰緑色の釉が掛かり、それにあたる可能性がある。奈良の近世窯業史を考える上でも興味深い資料となろう。

石製品　ＳＥ28からは滑石製の饗子（40）が1点出土している。一辺10㎜の立方体で、各面に小孔を穿孔して目を配す。目には2と6の代わりに3と8があり、後の追刻か当初からのものかは不明。また目の配置も、対称となる面の目の合計が現在のように7とはならない。（中島和彦・池田裕英）

Ⅴ　調査所見

本調査でわかった点をまとめると以下のようになる。

①　ＳＡ01やＳＤ02・03埋土からは土師器小片しか出土しておらず、時期を特定することは難しい。これらの遺構を覆う暗白灰色粘質土（土層図46）からは奈良時代の土器片や平安時代の土師器、緑釉・灰釉陶器が出土していることからみて、これらの遺構は8～10世紀頃の遺構と考えられる。

②　平安時代から室町時代の各時代の遺構を検出し、平城京廃絶後もこの地が利用し続けられた様子がわかった。平安時代の遺構はＳＤ04のみであるが、ＳＫ07～27などからも平安時代の土師器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器が出土しており、これらの遺構等で壊されてしまったようである。

③　ＳＫ07～27の土坑群は地山が粘土の部分にのみあり、粘土採掘坑と考えられる。埋土から13世紀後半の土器が出土しており、その頃に粘土採掘が行われていたようである。

④　15世紀後半～16世紀前半には土坑や井戸がつくられており、室町時代にかけて宅地として利用されたとみられる。

嘉永頃の松屋の敷地と発掘調査位置（1/2,000）

④　江戸時代末期の屋瓦など遺物が大量に出土したＳＫ33は塵芥処理のための土坑とみてよいと思われ、この頃家宅を処分したことが伺える。

最初に記したとおり、この地には16世紀半ばから17世紀半ばにかけての茶会記を残した松屋の瑯宅があったことが知られている。しかし、その後の土地の改変が大規模であったためか、その頃の遺構の残存状況が悪く、今回の調査では遺構・遺物から松屋・土門家に関するものは確認できなかった。嘉永6（1853）年の松屋家の絵図面（東大寺図書館蔵）には「表口八間三尺七寸」、「裏三十一間二尺」などと敷地の画辺の長さや周辺の宅地が書かれており、それを元に屋敷地を復原し、発掘区を重ねると上図のようになる。ＳＫ33から出土した遺物の時期からみると、土門家の宅地を処分する際に掘られたもので、そこから土門家最末期の姿を伺うことができる。土門家の敷地は広大であり、他の地点を調査する機会があれば関連する資料が得られるとも思われる。

いくつか史料によれば、今小路町周辺は宝永元（1704）年、享保11（1726）年、宝暦12（1762）年の3度にわたって大きな火災にあっている。しかし、市ＨＪ第531次・605次調査同様、今回の発掘調査でもこれらの大火の痕跡は確認できなかった。ただし、市ＨＪ第531次調査では18世紀前半頃の整地層と遺構を検出しており、宝永または享保の大火と近接していることからその火災後の宅地の整備に関ると考えられている。今回の調査では18世紀前半～中頃の遺物があまりみられない。火災後の塵芥処理の方法、宅地の使い方がどのようなものであったのかは興味深いところであるが、残念ながらそれを知る手がかりは得られなかった。（池田裕英）

1）永島福太郎「松屋会記」『茶道古典全集』第9巻 1957
2）立命館大学文学部　考古学・文化遺産専攻歴史考古学ゼミ「赤膚山元窯　大型窯の修復と発掘調査」2015
3）村田泥庵「奈良雑記」「奈良叢記」疑々堂書店 昭和17年

8．平城京跡（左京二条三坊七坪）の調査　第 673 次

事 業 名　宅地造成・農地造成	調 査 期 間　平成 25 年 12 月 2 日～ 12 月 10 日
届出者名　セイワホーム	調 査 面 積　150㎡
調 査 地　法華寺町 328―1 他	調査担当者　松浦五輪美

Ⅰ　はじめに

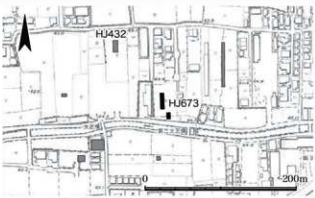
調査地は、平城京条坊復原では左京二条三坊七坪の南東にあたり、二条条間路の北側溝が位置している可能性が考えられる場所である。同坪内では、坪の北西部で市ＨＪ第 432 次調査[1] を行っており、中近世の河川氾濫堆積層の下で奈良時代の柱列を確認している。今回の調査では、二条条間路およびその周辺の宅地の様相についての知見が得られることが期待された。

発掘区は調査地の制約により、第１発掘区（北）と第２発掘区（南）の２箇所に分けて設定した。

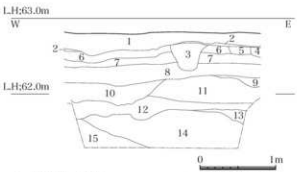
Ⅱ　基本層序

第１発掘区は、約 0.2 m の耕土以下、黄橙色砂質土が約 0.1 m、黄色砂質土が約 0.1 m、褐灰色粘質砂が約 0.2 m堆積し、西側で黄橙色粗砂、東側で灰色粘土が 0.3 m前後堆積している。この下に奈良時代の遺物を含む暗灰色粘土が 0.1 ～ 0.2 m堆積し、以下灰黄色細砂他が続き湧水が激しい。この砂層は掘削底よりさらに 0.8 m以上堆積していることがピンポールでの確認から推測される。奈良時代の遺構面は本来この砂層の上面付近（奈良時代遺物包含層直下、標高約 61.7 m）と推定されるが、河川により削平されたものと判断される。

第２発掘区は、0.1 ～ 0.2 m の耕土以下、灰橙色シルトが約 0.1 m、明灰色粘質土が約 0.2 m、橙色砂礫が 0.1 ～ 0.2 m、暗青灰色粘土が約 0.2 m、暗灰色粘土が 0.2 ～ 0.4 m、炭混じり暗灰色粘土が 0.1 ～ 0.4 m堆積し、

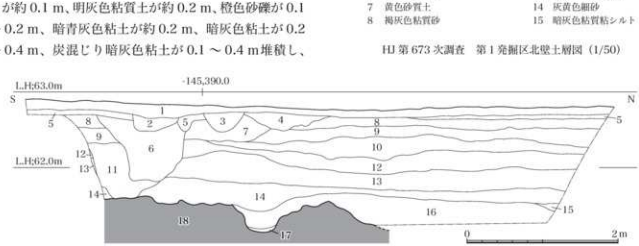


HJ 第 673 次調査　発掘区位置図（1/5,000）



1　黒褐色土（耕土）
2　灰白色砂質土（耕土）
3　褐灰色砂質土（素掘溝）
4　黄褐色砂質土（素掘溝）
5　灰黄褐色砂質土（素掘溝）
6　黄橙色砂質土
7　黄色砂質土
8　褐灰色粘質砂
9　灰黄褐色粘質砂
10　黄橙色粗砂
11　灰色粘土
12　暗灰色粘土（8 世紀遺物包含）
13　灰色粘質粘シルト
14　灰黄色細砂
15　暗灰色粘質粘シルト

HJ 第 673 次調査　第１発掘区北壁土層図（1/50）



1　黒色土（耕土）
2　灰色土＋黄色土（旧暗渠）
3　灰色土（素掘溝）
4　濁灰黄色土
5　暗橙色土
6　灰色土＋黄色土（水路跡？）
7　淡黄灰色砂質土
8　灰橙色シルト
9　明灰色粘質土
10　橙色砂礫
11　暗灰色砂混粘質土
12　暗青灰色粘土
13　暗灰色粘土
14　暗灰色炭混粘土
15　黒色炭層
16　灰色粘土（地山粘土ブロック混）
17　黒色炭層
18　青灰色粘土（地山）

HJ 第 673 次調査　第２発掘区西壁土層図（1/50）

HJ第673次調査　第1発掘区全景（南西から）

HJ第673次調査　第2発掘区全景（南東から）

現地表から－1.3mで青灰色粘土の地山に達する。地山面の最も高い部分の標高は約61.6mである。

Ⅲ　検出遺構

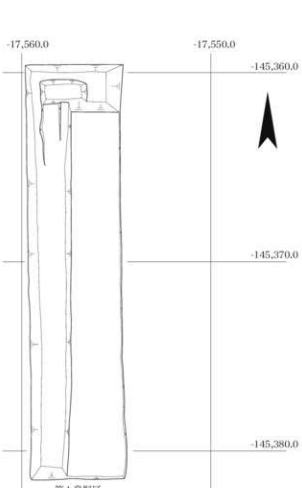
検出した遺構は、溝1条、土坑または溝の可能性のある掘り込み1基である。ともに第2発掘区の青灰色粘土上面で検出した。

溝SD01は、幅約0.5m、深さ約0.3mの東西方向の溝で、長さ0.9m分を確認した。埋土には8世紀の遺物が含まれ、上面付近には瓦が集中して堆積する。

掘り込みSX01は、第2発掘区北端から約3m南の位置を南肩とし、北へ向かって下がっていく。南端から約30°の傾斜で下がっていくが、現地の制約により深さ約0.3mまでの掘削で止めた。埋土はSD01と同じ地山粘土をブロック状に含む灰色粘土で、同時に埋められた可能性が高い。ただし遺物はSD01ほど集中しておらず、散漫に含まれている。　（松浦五輪美）

Ⅳ　出土遺物

遺物整理箱1箱分の土器類と、3箱分の瓦類がある。大半は第2発掘区の炭混じり暗灰色粘土層およびSD01からの出土である。



HJ第673次調査　遺構平面図（1/200）

第1発掘区での出土遺物はわずかで、黄色砂質土から18世紀以降とみられる土師器皿片、黄橙色粗砂から時期不詳（13世紀以降か？）の瓦器椀片が出土している。その下層の暗灰色粘土に8世紀代の須恵器・瓦片がわずかに含まれている。

第2発掘区の暗灰色粘土層からは、8世紀代の須恵器・土師器とともに少量ではあるが14世紀頃とみられる瓦質土器擂鉢および東播系須恵器鉢が出土し、他に坩堝片が出土している。

SX01からは8世紀頃の土師器杯・甕が少量出土し

HJ第673次調査　発掘区全景（南東から）

ている。

ＳＤ01からは、８世紀後半～９世紀初頭頃の土師器杯・壺・甕、須恵器杯・蓋・壺・甕が出土しており、また溝上面付近からは特に瓦が集中して出土し、以下この瓦類を報告する。

ＳＤ01出土瓦類には、丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦がある。軒瓦は３点あり、内訳は軒丸瓦6151型式Ａ種１点、軒丸瓦型式不明１点、軒平瓦6760型式Ｂ種１点である。丸瓦・平瓦は遺物整理箱１箱分ある。

軒丸瓦6151型式Ａ種は、内区に単弁８弁蓮華紋を飾る。細い弁の間から幅広い間弁がのぞき、弁・間弁とも先端が尖る点は特徴的である。外区内縁には珠紋をめぐらし、外縁は素紋である。6151型式Ａ種には弁・間弁の基部が中房から離れているものと、弁・間弁の基部が中房に接続するよう彫り直されたものがあるが、出土したものは彫り直し前のＡａ種である。外縁頂部から５㎜離れた瓦当側面に笵端痕が確認できる。瓦当側面上半部はタテケズリ。瓦当側面下半部はケズリ。瓦当裏面上半部から丸瓦接合部にかけてはタテ方向のユビナデを施す。瓦当裏面下半部はケズリで平坦にする。丸瓦部凹面側面付近はタテケズリ。

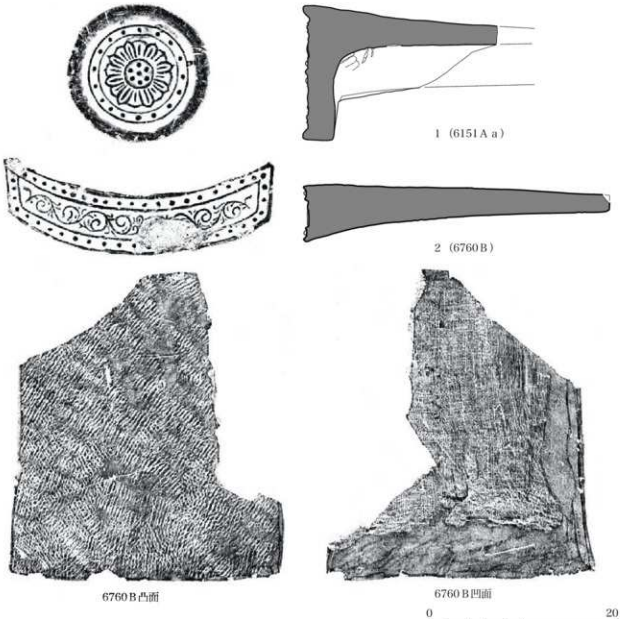
軒平瓦6760型式Ｂ種は、横視した花形の中心飾りで、唐草は左右両端から中心に向かって４回反転する。外区は内区より１段高く、珠紋をめぐらす。顎の断面形態は顎面が無い曲線顎Ⅰである。凸面は全体にナナメ縄タタキを施すが、瓦当付近の一部に布目が残る。凹面は瓦当面から６㎝程度まではヨコケズリ、側面寄りは４㎝程度タテケズリを施し、その他は布目を残す。側面はタテケズリ。

軒丸瓦6151－軒丸瓦6760型式の一組は平城宮・京瓦編年の第Ⅳ－２期（767～770年）に比定され、平城宮東院地区で施釉品が確認されており、東院玉殿所用との指摘もある。このような軒瓦の組み合わせが、出土数は少ないとはいえ、京内のこの場所で出土していることは、当坪の性格を考える上で今後も注意が必要である。

（松浦五輪美・原田憲二郎）

Ⅴ　調査所見

調査地の北半には古い河川が流れていたことがうかがえ、現在の菰川がより北方を北東から南西に流れていた可能性が考えられる。埋土中の遺物の磨滅状態からみて遺物自体も流されてきたと考えられ、奈良時代の遺構面がこの流れによって削られた可能性が高い。市ＨＪ



HJ第673次調査　出土軒瓦（1/4）

第432次調査で確認した遺構面の高さ（標高61.4ｍ）では地山が確認できず、逆に南寄りの第２発掘区では61.6ｍで地山が確認できた。詳細な流れの方向や規模は確認できなかったが、この坪内は奈良時代以降の河川によって遺構が削られた部分があると判断される。

第２発掘区で検出した溝および掘り込みについては、奈良時代の遺構と判断されるが範囲の制約から様相は明確ではない。過去の調査から想定される二条条間路北側溝の推定位置よりは北側にあり、形状からみても条坊側溝ではないと考えられる。ただし、溝ＳＤ01は側溝心推定位置から約４ｍ北に位置し、これが宅地内側の築地の雨落ちとして機能した溝である可能性は考えられる。より宅地内側に位置するＳＸ01とは同時に埋められた可能性が高く、宅地廃絶時に掘られた廃棄土坑としてのＳＸ01とともに埋められたという状況は想定できる。この後、この南寄り付近も14世紀以降は河川もしくはその氾濫による堆積が続き、現在の水田面の高さに至っている。

現在の奈良市内を流れる河川の過去の状態は複雑で不明な点が多く、現河川付近では奈良時代の遺構が影響を受けている可能性は高いと考えられている。しかし今回の調査では遺構を検出し、調査地付近では遺構が残存している可能性が高いことが明らかになった。

（松浦五輪美）

1）　奈良市教育委員会「平城京左京二条三坊七坪の調査　第432次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成11年度』2001

9．平城京跡（右京四条一坊九坪）の調査　第674次

事業名　宅地造成・資材置場造成	調査期間　平成25年12月24日～12月25日
届出者名　ヤマトラ	調査面積　19.7㎡
調査地　四条大路四丁目33番1	調査担当者　原田憲二郎

Ⅰ　はじめに

調査地は平城京の条坊復原によれば、右京四条一坊九坪の南端部西寄りに相当し、南側には四条条間北小路が想定される。発掘調査は、九坪内の様相把握を主目的として実施した。

Ⅱ　基本層序

発掘区内の基本的な層序は、上から造成土（約0.5 m）、黄灰色粘土（約0.2 m）と続き、現地表下約0.7 mで黄灰色砂質土または灰白色細砂の地山に至る。地山上面の標高は概ね62.6 mである。遺構は地山上面で検出した。

Ⅲ　検出遺構

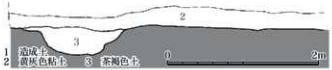
検出した遺構には奈良時代の溝、柱穴がある。発掘区南辺で東西方向の溝ＳＤ01を検出した。幅約1.5 mで、約2.9 m分を確認した。遺構検出面からの深さは約0.3 mで、埋土は茶褐色土である。奈良時代の土師器皿、須恵器蓋・甕、丸瓦、平瓦が出土した。柱穴は東西約0.8 m、南北約0.4 mで平面形長円形を呈する。遺構検出面からの深さは約0.2 mで、柱は抜き取られていた。

Ⅳ　出土遺物

出土遺物は奈良時代の土師器、須恵器、丸瓦、平瓦が遺物整理箱1箱分出土した。出土遺物の大半は東西溝ＳＤ01の埋土から出土した。

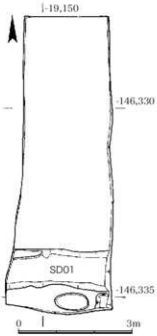
Ⅴ　調査所見

発掘区南端で確認した東西溝ＳＤ01の溝心の座標は、推定四条条間北小路北側溝心から北へ約6.1 m離れた場所にあたり、その性格として九坪の南面を画する溝の可能性が考えられる。東西溝ＳＤ01の南側に九坪南面の囲繞施設が想定できるが、今回の発掘区では掘立柱の柱穴を検出しており、九坪南面には掘立柱塀が巡っていた可能性が考えられる。　（原田憲二郎）



HJ第674次調査　発掘区西壁土層図（1/50）

HJ第674次調査　発掘区位置図（1/5,000）



HJ第674次調査　遺構平面図（1/100）

HJ第674次調査　発掘区全景（北から）

10. 平城京跡（左京五条三坊一坪）の調査　第675次

事 業 名　宅地造成	調 査 期 間　平成26年1月7日～1月17日
届出者名　積和不動産関西株式会社	調 査 面 積　84㎡
調 査 地　恋の窪一丁目595番1・5	調査担当者　松浦五輪美

Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京条坊復原では左京五条三坊一坪の東端にあたる。現在の佐保川の東岸に位置するが、周辺の試掘調査等では、水田面から−0.1～−0.4 mに奈良時代の遺構面が残っていることが確認されていた。

Ⅱ　基本層序

発掘区の東側では、約0.7 mの造成土以下、耕土（3・4）が0.3 m前後、氾濫堆積と考えられる砂層（5）が0.4 m前後、鎌倉時代以降と考えられる旧耕土の灰色粘質土（6）が0.2 m前後堆積し、現地表下約1.6 mで淵黄色から橙色の粘質シルトの地山に達する。この地山上面は軟質で土色が不鮮明であったため、遺構は約0.2 m下部の灰褐色シルト上面で確認している。

発掘区の西側では、旧耕土下に遺物を多く含む赤褐色土（11）が堆積しており、この上面および下部に遺構が認められた。地山上面の標高は、東側で約58.5 m、西側で約58.4 mである。

Ⅲ　検出遺構

検出した遺構は、柱列1条、溝2条、土坑3基である。

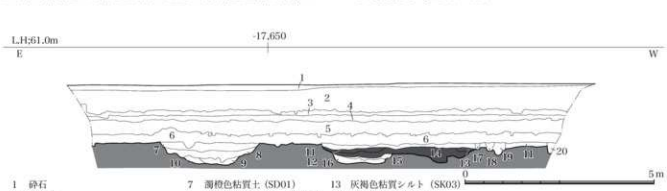
柱列ＳＡ01は、柱穴2箇所の南北1間分を確認したに過ぎないが、南北に延びる塀の一部と考えられる。柱間は約2.4 m（8尺）で、南側の柱穴は直径約0.2mの柱が長さ0.5mほど残存する。壁面にかかる北側柱穴の掘り込み面は赤褐色土層（土層図11層）の上面からであり、南側柱穴も柱根周囲の埋土が赤褐色土層と同様の

HJ第675次調査　発掘区位置図（1/5,000）

多量の遺物を含む土で埋められていることから、最も新しい時期の遺構と考えられる。

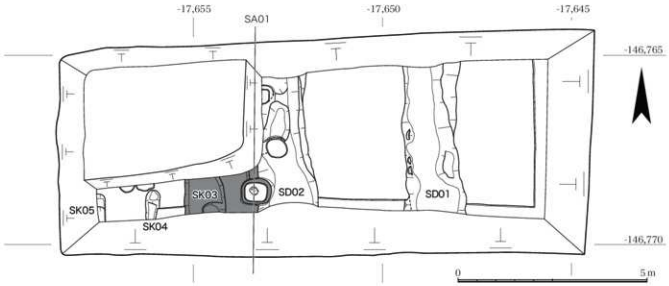
溝ＳＤ01は、最大幅約2.6 m、深さ約0.6 mの南北方向の溝である。断面形は皿状であるが、西肩の立ち上がりの方が急である。埋土には8世紀の遺物が含まれる。この溝は、位置的に左京五条三坊一坪と八坪間の東四坊坊間西小路の西側溝である可能性が高い。溝心の座標はＸ＝－146,768.0、Ｙ＝－17,648.75である。

溝ＳＤ02は幅1.5 m前後、深さは0.25 m前後の南北方向の溝である。東肩が赤褐色土層の東端と重なっているが、西肩が土坑ＳＫ03を埋めた土を除去した地山上面で確認できたため、この部分を溝として認識した。ただし底面は一定ではなく部分的に深くなっており、特に検出部北端は深い。あるいは土坑が連結した状態である可能性も考えられる。



1　砂石
2　造成土
3　黒色砂質土（耕土）
4　黒褐色砂質土（耕土）
5　暗灰色粘質砂（下部は灰褐色に漸移）
6　灰色粘質土（下部は暗灰色に漸移）
7　濁橙色粘質土（SD01）
8　暗褐色粘質シルト（SD01）
9　灰色粘質シルト（SD01）
10　褐灰色粘質シルト（SD01）
11　赤褐色粘質シルト
12　暗灰色炭混粘質土（SK03）
13　灰褐色粘質シルト（SK03）
14　暗褐色砂質土（SK03）
15　灰色粘質シルト（SD02）
16　暗褐色砂質土（SD02）
17　灰色粘質土
18　灰白色粘質土
19　黒褐色粘質土（SK04）
20　褐色粘質シルト（SK05）
21　濁黄色粘質シルト（深部は灰褐色シルト）

HJ第675次調査　発掘区南壁土層図（1/100）



HJ第675次調査　遺構平面図（1/100）

土坑ＳＫ03は、長径1.0ｍ以上、短径1.0ｍ程度の平面楕円状の土坑になると推定される。浅い窪み状を呈し、最深部でも西肩からの深さは0.2ｍ程度で、東肩は緩く明瞭ではない。埋土はＳＤ02まで覆うように広がっており、人為的に掘った土坑というよりは窪みを埋めた状態を呈するものかもしれない。

土坑ＳＫ04は、東西0.35ｍ、南北0.8ｍ以上、深さ約0.3ｍの平面楕円形の土坑。南に延びる溝の可能性もあるが土坑とした。北端部はさらに0.1ｍ深くなる。

土坑ＳＫ05は、東西0.2ｍ以上、南北0.7ｍ以上、深さ0.3ｍ以上の土坑と考えられ、発掘区南西隅に一部がかかるのみである。（松浦五輪美）

Ⅳ　出土遺物

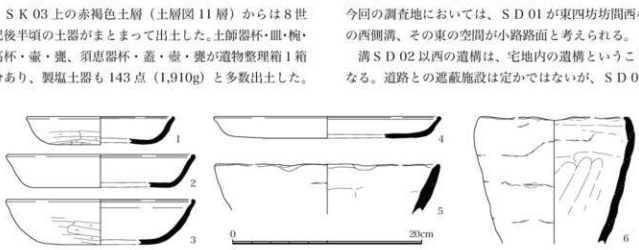
出土遺物には遺物整理箱4箱分の土器と3箱分の瓦類がある。耕土の灰色粘質土から鎌倉時代とみられる瓦器小片が出土した以外、多くは8世紀頃のものである。

ＳＫ03上の赤褐色土層（土層図11層）からは8世紀後半頃の土器がまとまって出土した。土師器杯・皿・椀・高杯・壷・甕、須恵器杯・蓋・壺・甕が遺物整理箱1箱分あり、製塩土器も143点（1,910g）と多数出土した。このうち土師器杯Ａ（１～３）、皿Ａ（４）と製塩土器（５・６）を図示した。製塩土器は多くが破片であるが、いずれも外面は未調整で粘土紐接合痕が残り、内面は縦または横方向のナデ調整で仕上げる。口縁部は内湾し端部は尖る。胎土は砂を多く含み、色調は赤褐色から黄褐色まで多様である。この他赤褐色土層からは、軒丸瓦6301型式Ｂ種が1点、砥石1点が出土した。（中島和彦）

Ⅴ　調査所見

今回の調査で検出した溝ＳＤ01は、一・八坪間の東四坊坊間西小路の西側溝と考えられる。この小路の延長上にあたる左京三条三坊三・六坪間の東四坊坊間西小路の西側溝が市ＨＪ第391次調査[1]で確認されている。座標を朱雀大路の振れ（Ｎ0°14′42″Ｗ）を参考に計算すると、計算上の溝心はＳＤ01溝心の約0.9ｍ西を通ることになる。二条分の距離を考慮すれば同じ延長上の溝と考えることは妥当であると言えよう。このことから、今回の調査地においては、ＳＤ01が東四坊坊間西小路の西側溝、その東の空間が小路路面と考えられる。

溝ＳＤ02以西の遺構は、宅地内の遺構ということになる。道路との遮蔽施設は定かではないが、ＳＤ01と



HJ第675次調査　出土土器（1/4）

HJ第675次調査　発掘区全景（北東から）

HJ第675次調査　発掘区全景（南西から）

02の距離からみて間に築地があったとは想定し難く、その痕跡も認められない。むしろ、ＳＤ02とした部分が何らかの遮蔽物（植込み等）を撤去した痕跡とも考える。ＳＤ02跡の窪みには、廃棄物の処理と考えられる炭と土器片の混じる土が所々溜まっていたが、それを覆う赤褐色土層は、その後の整地層の可能性もある。この上に柱列ＳＡ01が並び、新たに遮蔽施設が設けられたと考えることができる。ただし、現地形では調査区の西側30ｍには佐保川が流れており、広い居住空間は確保できない。土層に認められる氾濫堆積層から、少なくとも鎌倉時代以降は近くに河川が流れていたと判断できるが、奈良時代当時の河川の位置については検討を要する。条坊計画通りの小路の位置と、その西に遮蔽を必要とする宅地が広がっていた可能性を考えると、この坪は奈良時代には十分な居住空間が確保されていたと考えるべきであろう。

今回の調査によって左京五条三坊一坪の様相の一端を知りえた。また現在の地形が、概ね鎌倉時代以降に形成されたことも推測することができた。　（松浦五輪美）

1）　奈良市教育委員会「平城京左京三条三坊三坪の調査　第391次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成９年度（第２分冊）』1998

11. 平城京跡（左京五条四坊十四坪）の調査　第676次

事 業 名　宅地造成	調 査 期 間　平成26年1月14日～1月23日
届出者名　積和不動産関西株式会社	調 査 面 積　108㎡
調 査 地　大安寺六丁目779番	調査担当者　池田裕英・宮本賢治

Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復原によると左京五条四坊十四坪にあたる。この左京五条四坊十四坪では奈良市教育委員会が昭和63年度に市ＨＪ第154次調査[1)]を行っており、奈良時代の掘立柱建物や土坑を検出している。

今回の調査地は、坪の中央北寄りの位置にあたることから、十四坪内の様相の把握を目的に調査を行った。

Ⅱ　基本層序

発掘区内の基本的な層序は、上から灰黒色土（耕土）、灰褐色砂質土（床土）、明灰色粘質土・褐色砂質土、明灰色砂質土・褐色砂質土と続き、現地表下0.5mで茶黄色礫混じり粘土あるいは黄茶色土の地山にいたる。概ね発掘区北半が茶黄色礫混じり粘土、南半が黄茶色土の地山である。地山上面で淡茶褐色粘質土・黄茶色粘土の広がりを検出し、この層の上面でも遺構を検出したことから、この土は整地土と考えられる。整地土からは奈良時代の土器や瓦に混じって弥生土器も出土している。遺構は地山上面及び整地土上面で検出した。遺構面の標高は64.3mである。

Ⅲ　検出遺構

検出した遺構には掘立柱列、掘立柱建物があるが、調査区の東西幅が約5mであったこともあり、規模が判明した建物はない。

ＳＡ01は発掘区中央北よりで検出した掘立柱列である。検出したのは東西1間分（2.1m）のみであるが、組み合う柱穴がないことから柱列と考えておきたい。柱間は2.1mである。

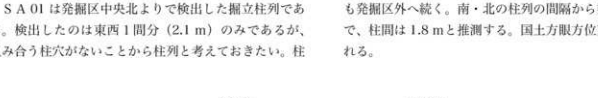
HJ第676次調査　発掘区位置図（1/5,000）

ＳＡ02は発掘区中央南寄りで検出した掘立柱列である。検出したのは東西1間分（3.0m）のみであるが、組み合う柱穴がなく、柱列と考えておきたい。柱間は3.0mである。国土方眼方位東で北にふれる。

ＳＢ03は発掘区中央東端で南北2間（4.2m）のみ検出した。東西棟掘立柱建物の西側柱列と考えておきたい。柱間は2.1mである。

ＳＢ04は発掘区中央西寄りで南北2間（4.2m）のみ検出した。東西棟掘立柱建物の東側柱列と考えておきたい。柱間は2.1mである。

ＳＢ05は発掘区中央で桁行2間（3.6m）分を検出した東西棟掘立柱建物である。柱間は1.8m。東・西とも発掘区外へ続く。南・北の柱列の間隔から梁間は2間で、柱間は1.8mと推測する。国土方眼方位東で北にふれる。

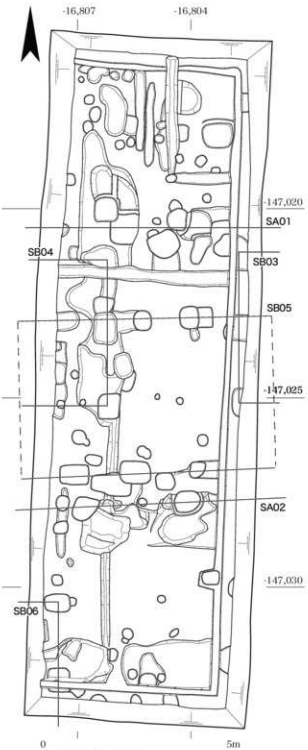


1　灰黒色土（耕土）
2　灰褐色砂質土（床土）
3　明灰色砂質土・褐色砂質土
4　灰褐色粘質土・黄橙色粘質土
5　暗茶褐色土
6　明灰色砂質土・褐色砂質土
7　淡褐灰色砂質土（素掘溝埋土）
8　灰色粘質土・黄茶色粘土（地山土）
9　灰色粘質土・黄橙色砂質土
10　灰色砂質土・濁黄褐色砂質土
11　暗橙茶色土・茶褐色粘質土（柱穴埋土）
12　茶褐色土・灰褐色土
13　暗黄茶色土・茶褐色土（柱穴埋土）
14　淡灰褐色土（素掘溝埋土）
15　暗茶褐色土・暗灰褐色土
16　暗茶黄色土・暗茶褐色土（柱穴埋土）
17　灰褐色粘質土・黄橙色粘質土（柱穴埋土）
18　淡茶褐色砂質土・灰色砂質土
19　灰褐色土・茶褐色土（柱穴埋土）
20　黄茶色土（地山土）
（8～10・18は整地土）

HJ第676次調査　発掘区東壁土層図（1/100）

HJ 第 676 次調査　検出遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模	桁行全長	梁行全長	柱間寸法（m）		柱穴の深さ	備考
		（桁行 × 梁行）	(m)	(m)	桁行（東西）	梁間（南北）		
SA01	東西	1 以上	2.1	–	2.1	–		
SA02	東西	1 以上	3.0	–	3.0	–		国土方眼方位東で北に傾く
SB03	東西？	1 以上 × 2	–	4.2	–	2.1		
SB04	東西？	1 以上 × 2	–	4.2	–	2.1		
SB05	東西	2 以上 × 2	–	3.6	1.8	(1.8)		国土方眼方位東で北に傾く
SB06	不明	1 以上 × 1 以上	–	–	–	2.1		



HJ 第 676 次調査　遺構平面図（1/100）

ＳＡ 06 は発掘区南西端で検出した。検出したのは南北 1 間（2.1 m）分のみである。掘立柱建物の北東隅の可能性を考えておきたい。

Ⅳ　出土遺物

本調査で出土した遺物は遺物整理箱にして 3 箱である。8 世紀の土師器・須恵器・製塩土器、丸瓦、平瓦の他、包含層や整地土、奈良時代の遺構の埋土中から弥生土器小片、サヌカイト剥片が出土している。柱穴から出土した遺物には時期を特定できるようなものはみられず、建物の時期は不明とせざるを得ない。

Ⅴ　調査所見

今回の調査で検出した掘立柱列・掘立柱建物は重複関係や主軸の傾きから 2 時期以上の変遷が考えられる。国土方眼方位東で北に傾く掘立柱列・建物は市ＨＪ第 154 次調査でも検出しており、関わりがあるかもしれない。

整地土や柱穴埋土からは弥生土器片が出土した。遺構はなかったが、本調査地の北側で行っている JR 奈良駅南特定土地区画整理事業に係る発掘調査では弥生時代の方形周溝墓や土坑を検出しており、本来は本調査地を含め更に南に広がっていたと思われる。　（池田裕英）

1 ）奈良市教育委員会『平城京左京五条四坊十四坪の調査　第 154 次』『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　昭和 63 年度』1989

HJ 第 676 次調査　発掘区全景（南から）

12. 平城京跡（左京四条五坊十六坪）・奈良町遺跡の調査　第677次

事 業 名　店舗新築	調 査 期 間　平成26年2月3日～2月19日
届出者名　京都中央信用金庫	調 査 面 積　153㎡
調 査 地　下三条町27-1	調査担当者　池田裕英

Ⅰ　はじめに

調査地は平城京の条坊復原では、左京四条五坊十六坪にあたり、調査地東半に東五坊大路、北端に三条大路が想定される。当該地では、奈良市教育委員会が2箇所の発掘区を設けて発掘調査を実施し（市ＨＪ第560次調査[1]）、鎌倉時代の溝、室町時代の井戸などを検出した。今回の調査はその発掘区と重複しない部分で行った。

Ⅱ　基本層序

発掘区内の層序は、近世以降に撹乱されており複雑であるが、現地表面下1.1 mで旧耕土の灰黒色土（土層図17）となり、その直下の層が暗灰緑色土の地山である。遺構はすべてこの地山上面で検出したが、発掘区西端部分はより一段深く削平されており遺構はなかった。地山上面の標高は発掘区南西隅で66.8 m、発掘区北東隅で67. 0 mであり、北東から南西に緩やかに下っている。

Ⅲ　検出遺構

検出した遺構には井戸、溝、土坑がある。

ＳＥ01は後述する溝ＳＤ03の掘削後に検出した。径1.8 m、深さ1.3 mである。埋土に小礫や人頭大の石が混じっており、石組みの枠の井戸であったと思われる。出土した遺物は12世紀後半のものである。

ＳＥ02は径3.1 m、深さ1.7 mで、断面はすり鉢状である。埋土の中に人頭大の石がみられ、石組みの枠の井戸であったと思われる。出土した遺物には13世紀頃のものと17～18世紀頃のものとがみられ、井戸が使用された時期と井戸枠を壊した時期を示していると思われる。この間の時期の遺物が出土していないことから、井戸は使われ続けていたのではなく、井戸が使われなくなった後、壊されるまで断絶があったと考えておきたい。

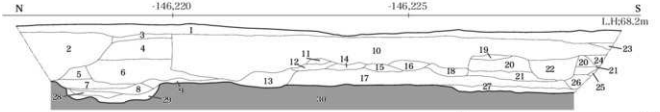
HJ第677次調査　発掘区位置図（1/5,000）

ＳＤ03は発掘区東寄りで検出した南北方向の素掘りの溝で、発掘区北端で東に曲がる。東、南とも発掘区外に続く。幅1.9～2.2 m、深さ0.2～0.3 mである。埋土は上・下2層に分けることができ、上層が褐灰色粘土（28）、下層が暗灰褐色粘土（29）である。埋土から15世紀前半の土師器、瓦質土器が出土した。

ＳＫ04は発掘区南端で検出した。重複関係からＳＤ03より新しい。東西2.9 m、南北1.3 m以上で発掘区外南へ続く。深さは0.2 mである。埋土から17世紀の土師器・瓦質土器が出土した。

Ⅳ　出土遺物

本調査では遺物整理箱で10箱の遺物が出土した。出土した遺物にはサヌカイト剥片、12世紀の土師器、13



1　クラッシャー
2　暗褐色土
3　暗栗灰色土
4　灰褐色土
5　淡茶灰色土
6　褐灰色土
7　淡褐灰色土
8　褐灰色砂質土
9　灰褐色粘質土
10　暗灰黒色土
11　暗茶黄色粘土・褐灰色粘土
12　灰黄色粘土・褐灰色粘土
13　暗褐灰色粘土・褐茶色粘土
14　灰緑色粘土・暗褐灰色土
15　暗灰色粘土
16　暗灰色粘土
17　灰黒色土
18　暗灰色粘土
19　暗褐灰色土
20　褐茶色砂質土
21　茶灰色砂質土
22　暗栗灰色土・暗褐灰色土
23　黒灰色土
24　暗褐灰色砂質土
25　褐灰色砂質土
26　暗灰緑色砂質土
27　褐灰色粘土・暗灰緑色土
28　褐灰色粘土
29　暗灰褐色粘土
30　暗灰緑色土（地山）

HJ第677次調査　発掘区東壁土層図（1/80）

世紀の土師器・瓦器、15世紀の土師器・瓦質土器・輸入白磁・青磁・鞴の羽口、17世紀の土師器・瓦質土器・輸入白磁・銅製金具、江戸時代以降の平瓦などがある。

V　調査所見

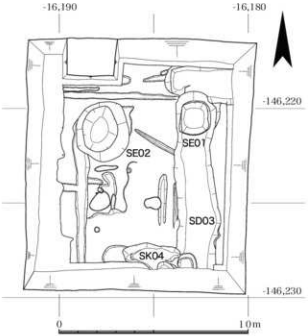
発掘区東半で検出した溝ＳＤ03は、右図・写真に示したように今辻子町を南北方向に通る道路の延長線上に位置する。この南北道路は平城京東五坊大路の遺存地割であることは最初に記したとおりであり、ＳＤ03が遺存地割や現在の道路といった地割りに関わる遺構の可能性が考えられる。ただし、ＳＤ03の位置には先行する井戸ＳＥ01があり、一時は宅地になっていたようである。また、発掘区北端で東に曲がっており、北には続かない。これには三条大路との関わりも考えられる。

本調査と同じ敷地内の市ＨＪ第560次調査ではＳＤ03より西と北とで、南北方向と東西方向の溝を検出している。遺構の時期は13世紀であるが、それぞれ東五坊大路、三条大路に関わる可能性が考えられている。

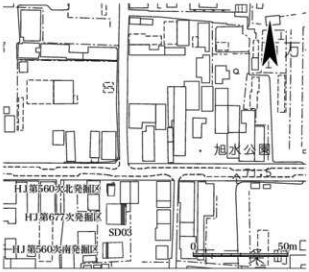
今回の調査でＳＥ01、ＳＤ03を検出したことで、長岡京遷都以降、条坊道路があった場所が12世紀には宅地となり、その後15世紀頃に再び何らかの区画のための溝が掘られたという変遷があったことがわかる。

ＳＤ03がどのような性格の遺構であるかは決めがたいが、奈良の町の地割や宅地化の変遷を考えるにあたり、手がかりとなる遺構であろう。　（池田裕英）

1）　奈良市埋蔵文化財調査センター「平城京跡（左京四条五坊十六坪・三条大路・東五坊大路）の調査　第560次」『奈良市埋蔵文化財調査年報　平成18（2006）年度』2009



HJ第677次調査　遺構平面図（1/200）



溝SD03と今辻子町・下三条町の道路位置関係図（1/2,000）

HJ第677次調査　SD03と今辻子町の南北道路（南から）

HJ第677次調査　発掘区全景（南から）

13. 平城京跡（左京三条五坊十二坪）・奈良町遺跡の調査　第678次

事業名　共同住宅新築	調査期間　平成26年2月24日～3月3日
届出者名　新星和不動産株式会社	調査面積　83㎡
調査地　油阪町1－131他	調査担当者　松浦五輪美

Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京条坊復原では左京三条五坊十二坪の東南にあたる。近隣の調査では、東隣の市ＨＪ第117次調査[1]で18世紀以降の土坑14基、西隣の市ＨＪ第571次調査[2]で18世紀末以降の土坑7基ほか8世紀頃の遺物を含む不整形な土坑が確認されている。また、西隣では17世紀前半から昭和40年代まで存在していた溜池の跡が確認されており、本調査地でも北半は溜池跡に該当すると予測された。

敷地の東端は十二坪と十三坪の坪境小路が推定される位置であり、条坊関係の遺構の確認が期待された。

調査は旧建物基礎による破壊が及んでいないと推定される位置で、敷地の南北に2箇所計画したが、溜池跡や想定以上の基礎掘削により、北発掘区で33㎡、南発掘区で50㎡の調査となった。

Ⅱ　基本層序

北発掘区は地表下約1.3ｍまでが造成土で、その下に黒灰色土と緑黄色土の混じった土が2ｍ以上続く。黒灰色土層は上面から約1.6ｍまでは黒灰色土がほとんどであるが、下部は逆に緑黄色土のブロックが多くなる。この層には18世紀以降から近代までの遺物が混じる。

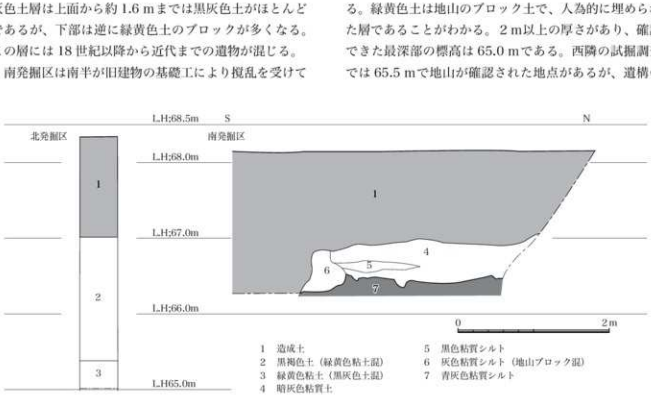
南発掘区は南半が旧建物の基礎工により攪乱を受けて

HJ第678次調査　発掘区位置図（1/5,000）

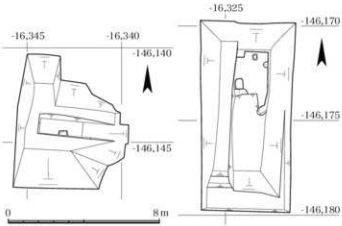
おり地山が確認できたのは北端付近のみである。地表から造成土約1.2ｍ、暗灰色粘質土約0.5ｍで青灰色粘質シルトの地山に達する。地山検出面の標高は66.5ｍ前後である。暗灰色粘質土には18世紀以降の遺物が含まれている。

Ⅲ　検出遺構

北発掘区での造成土下に堆積している緑黄色土混じりの黒灰色土層は、以前存在した溜池の埋め土と判断される。緑黄色土は地山のブロック土で、人為的に埋められた層であることがわかる。2ｍ以上の厚さがあり、確認できた最深部の標高は65.0ｍである。西隣の試掘調査では65.5ｍで地山が確認された地点があるが、遺構の



HJ第678次調査　北発掘区土層柱状図・南発掘区西壁土層図（1/50）



HJ第678次調査　発掘区遺構平面図（1/200）

HJ第678次調査　北発掘区全景（北から）

HJ第678次調査　南発掘区全景（北西から）

HJ第678次調査　南発掘区地山面残存部分（東から）

残存した部分の地山のレベルは66.6 mであることから考えて、より池の深い場所に当たっていると考えられる。この位置より北はさらに池の中心となっていくことから、敷地の北半は奈良時代の遺構面が削平されていると判断できる。東隣の調査での遺構面（地山）が地表下0.8～0.9 mであったことからも当該地が溜池内であると判断できる。

南発掘区では造成土下に暗灰色粘質土が堆積するが、これは18世紀末頃の広い掘り込みの埋土である可能性がある。この土層と基礎坑に壊されているが、灰色粘質シルトの土坑の残欠と見られる部分があり、粘土採掘坑と考えられる。西隣の調査で検出された不整形土坑と同様のものである可能性があるが、遺物は出土していない。

Ⅳ　出土遺物

出土遺物は遺物整理箱1箱分で、18世紀以降の国産陶器・国産磁器・瓦質土器がある。溜池埋土および南発掘区の暗灰色粘質土層から出土した。

Ⅴ　調査所見

今回の調査で敷地北半は出口池（油坂池）として絵図にも描かれている溜池跡であることが確認された。この池は17世紀前半に築造されたようであるが、その後池の範囲は拡大・縮小しており、昭和に宅地に転換された際には長方形の南辺が北へ寄って縮小している。池底は現地表下3.5 m以上と推定され、この範囲では奈良時代の遺構は残存していないと判断される。

南発掘区では坪境小路は確認できず、削平されたものか位置的なズレかは定かではない。ただし奈良時代の遺構が残存すると考えられる地山面は、地表下1.7 mまで削平されており、掘方の浅い遺構は消滅している可能性が高い。また、南発掘区南端では、三条大路の北側溝を期待していたが予想以上に撹乱を受けており、敷地の南端部は遺構の残存する可能性は低いと考えられる。

奈良町遺跡としての様相についても、地山面には直上の暗灰色粘質土が浅い窪み状に残る部分があるのみで、明確な遺構は無かった。（松浦五輪美）

1）　奈良市教育委員会「平城京左京（外京）三条五坊十三坪の調査　第117次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　昭和61年度』1987
2）　奈良市埋蔵文化財調査センター「平城京跡（左京三条五坊十二坪）の調査　第571次」『奈良市埋蔵文化財調査年報　平成18（2006）年度』2009

14. 平城京跡（左京一条四坊十一坪）の調査　第679次

事 業 名　宅地造成	調 査 期 間　平成26年3月14日～3月18日
届出者名　株式会社アイ・エスコーポレーション	調 査 面 積　30㎡
調 査 地　法蓮町618番1の一部、620番	調査担当者　池田裕英

Ⅰ　はじめに

調査地は平城京の条坊復原によれば、左京一条四坊十一坪にあたり、調査地の北約200mの狭岡神社がある丘陵から南西に向かって延びる尾根の東南辺に位置する。調査に先立ち、以前あった建物の解体に立ち会ったところ、現地表下1.4～3.0mまで基礎掘削が及び、遺構面が削平されていた。このため、建物が建っていなかった場所に発掘区を設定して調査を行った。

Ⅱ　基本層序

発掘区内の層序は、造成土の下、黒灰色砂質土（耕土）、灰色粘質土（床土）、灰色砂質土と続き、現地表下1.0mで茶黄色土の地山にいたる。発掘区南半では地山上に灰色粗砂が0.05m程度堆積しており、この層から平安時代前半の土師器・黒色土器・灰釉陶器が出土している。

遺構はすべて地山上面で検出した。地山上面の標高は70.7mである。

Ⅲ　検出遺構

検出した遺構には掘立柱建物、溝、土坑がある。

ＳＢ01は桁行、梁行とも2間以上の掘立柱建物の南東隅部と考えておきたい。柱間は桁行、梁行とも2.4m（8尺）と等しい。棟方向は不明である。南東隅の柱穴掘方から9世紀中頃の黒色土器A類椀が出土しており、平安時代の建物であることがわかる。また、北東の柱穴からは根固めに用いたかと思われる丸瓦、平瓦がみられた。柱穴の深さは概ね0.3mである。

ＳＤ02は幅0.4m、深さ0.2mで、重複関係からＳＤ03より古い。埋土は灰色砂質土・淡黄色粘土混合土である。埋土から奈良時代の土師器・須恵器が出土した。

HJ第679次調査　発掘区位置図（1/5,000）

ＳＤ03は幅0.3m、深さ0.05mの南北方向の溝である。南北3.7m分を検出した。埋土は灰色砂で、8世紀～9世紀中頃の須恵器、土師器とともに陰刻花文のある緑釉陶器小片が出土した。

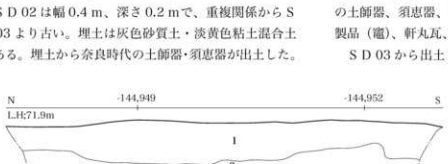
ＳＫ04は東西1.7m、南北1.0m以上である。深さは0.1mである。埋土は灰色砂質土で、8世紀後半の土師器・須恵器、軒丸瓦（6308B 1点）丸瓦・平瓦、9世紀前半～中頃の土師器、灰釉陶器小片が出土した。

ＳＫ05は東西1.4m、南北1.2mの平面楕円形の土坑で、深さは0.2mである。埋土は暗灰色砂質土・茶黄色粘土混合土で、9世紀中頃の土師器・黒色土器A類椀が出土した。

Ⅳ　出土遺物

今回の発掘調査では遺物整理箱にして5箱分の遺物が出土した。出土した遺物には8世紀後半～9世紀中頃の土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、製塩土器、土製品（竈）、軒丸瓦、丸瓦、平瓦、塼がある。

ＳＤ03から出土した緑釉陶器には陰刻花文がみられ



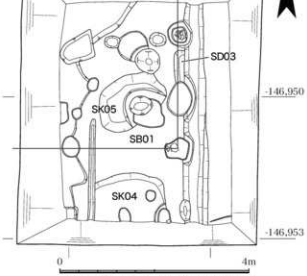
1　褐色土
2　暗黄色土（真砂土）
3　暗灰色土・灰色砂質土
4　明灰色砂質土・暗灰色砂質土
5　黒灰色砂質土（旧耕土）
6　灰色粘質土（床土）
7　明灰色砂質土・暗木橙色砂質土
8　淡黄色砂質土・灰色砂質土
9　灰色砂質土
10　灰色粗砂
11　暗黄色砂質土
12　茶黄色土（地山）

HJ第679次調査　発掘区東壁土層図（1/50）

HJ 第679次調査　検出遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模（間）	桁行全長	梁行全長	柱間寸法（m）		柱穴の深さ	備考
		桁行×梁行	(m)	(m)	桁行	梁行	(m)	
SB01	不明	2以上×2以上	2.4以上	2.4以上	2.4	2.4	0.3	9世紀中頃の土器出土

遺構番号	平面形	平面規模（m）	深さ（m）	時期	主な出土遺物	備考
SD02	南北溝	幅0.4×長さ4.6以上	0.2	8世紀	土師器、須恵器	SD03より古い
SD03	南北溝	幅0.3×長さ3.7	0.05	9世紀中頃	土師器、須恵器、緑釉陶器	
SK04	不整円形	東西1.7×南北1.0以上	0.1	9世紀中頃	土師器、須恵器、灰釉陶器	軒丸瓦6308型式B種出土
SK05	楕円形	東西1.4×南北1.2	0.2	9世紀中頃	土師器、黒色土器A類	



HJ 第679次調査　遺構平面図（1/80）

HJ 第679次調査　発掘区全景（南から）

る。緑釉陶器、灰釉陶器（ＳＫ04出土）とも1cm四方程度の小片で、詳細な時期は不明である。

軒丸瓦はＳＫ04から6308B（平城京瓦編年　第Ⅱ－2期）1点、包含層から型式不明1点が出土している。

Ⅴ　調査所見

調査地周辺では、西約400mにある奈良市立一条高校内で平成11年度に行った発掘調査（市ＨＪ第440次調査）[1]で平安時代の井戸を検出している。また、平安時代の創建とされる不退寺などもあり、長岡京遷都以後の遺構が検出されている地域でもある。

今回の発掘調査では、掘立柱建物や溝、土坑を検出したが、奈良時代の遺構はＳＤ02、ＳＫ04のみで、これ以外の遺構からは黒色土器Ａ類や緑釉陶器など9世紀中頃の土器が出土している。

発掘区南半では灰色粗砂の堆積がみられ、ここからも9世紀中頃の土師器や黒色土器Ａ類が出土しているが、この粗砂が何に由来するのかは不明である。砂の層は0.05mと薄く、河川からあふれた砂が堆積したように思われる。発掘区南西には北西から南東方向に地割の乱れた痕跡がみられる箇所もあり、河川があったのかもしれない。

（池田裕英）

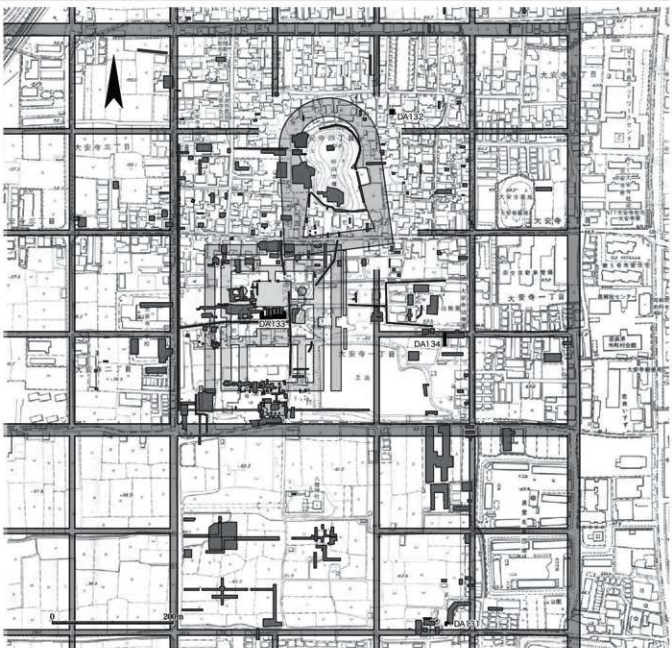
1）　奈良市教育委員会「平城京左京一条三坊十三坪の調査　第440次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成11年度』2001

HJ 第679次調査　柱穴瓦出土状況（東から）

15. 史跡大安寺旧境内の調査

奈良市教育委員会では、平成25年度に史跡大安寺旧境内において計4件の調査を実施した。第133次調査は、大安寺小学校旧校舎解体と建物新築に係る調査で、金堂と講堂の間を調査した。後述のように検出された古代の焼土層からは多種多様な遺物が出土し、焼土層の年代と遺物の来歴について重要な成果が得られた。他の3件は住宅建設に伴う小規模な調査で、いずれも境内縁辺部で、古代の大安寺に関わる遺構は検出できなかった。

調査次数	事業内容	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
DA第131次調査	個人住宅新築	東九条町1374番1他	H25.6.10～H25.6.26	30㎡	松浦
DA第132次調査	個人住宅除去および新築	大安寺四丁目1086番	H25.8.27～H25.9.3	35㎡	松浦
DA第133次調査	大安寺小学校旧校舎解体およびパンピホーム新築	大安寺二丁目1309-2	H25.12.16～H26.1.24	147㎡	原田香
DA第134次調査	長屋新築	大安寺一丁目1241番1の一部	H26.3.3～H26.3.18	99㎡	原田恵



史跡大安寺旧境内　発掘調査位置図（1/5,000）

（1）講堂地区の調査　第133次

Ⅰ　はじめに

調査地は、大安寺伽藍復原によると金堂と講堂の間に相当する。大安寺小学校校舎建設工事に伴い、1966年に奈良国立文化財研究所（当時）が発掘調査[1]を実施しており、大安寺の焼亡時の遺物を含む東西約8m、南北約3.5mの土坑が検出され、周辺にも焼土、灰層が広がっていることが明らかになっている。この焼土層は、約200点以上の唐三彩陶枕片、瓦類、土師器片等が含まれており、出土土器の年代が記録に残る講堂の焼亡時期（911年）とほぼ合致するとして、911年の講堂焼亡に伴うものと推察されている。

今回は、旧校舎基礎を残した状態で調査を実施し、1966年に実施された発掘区の一部とともに唐三彩陶枕片を含む焼土層を新たに検出することができた。また、工事の進行に並行しても厳重な立会を行った。

Ⅱ　基本層序

発掘区内の基本的な層序は、地表面から約0.2mまでは現代の盛土で、その下に茶灰色土、黄灰色粘質土ブロックを含む茶灰色土、土器片・瓦片を多く含む茶灰色粘質土、灰色粘土が堆積する。地表面から約0.5mで、黒褐色～黒赤褐色土の焼土層に至り、発掘区西半部と東辺部に広がっていた。厚さは約0.1～0.2mある。

焼土層内からは、唐三彩陶枕片・容器片、8世紀～11世紀後半の土器類や瓦類、施釉陶器、輸入磁器、ガラス製品、石製品、金属製品、壁画、螺髪、半球形土製品、炭、凝灰岩砕片などが遺物整理箱で126箱分出土した。

焼土層が金堂と講堂間の一面に広がっている様子からみて、罹災した品々を焼土・灰とともに埋め、整地したものと考えられる。位置関係や層位からみて、1966年に検出された焼土層と同一のものであろう。

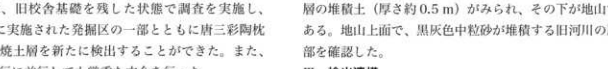
焼土層の下層には、土器片を含む淡灰色粘砂があり、その下が地山面（標高約61.2m）となる。

また、3地点（A～C地点）で焼土層下層の堆積状態を確認するために一部掘下げたところ、A・B地点では、灰黄色砂混粘土（厚さ約0.2m）の下が地山であった。C地点では、焼土層の下に軒丸瓦、軒平瓦を包含する三層の堆積土（厚さ約0.5m）がみられ、その下が地山である。地山上面で、黒灰色中粒砂が堆積する旧河川の肩部を確認した。

Ⅲ　検出遺構

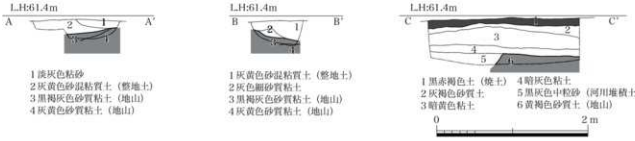
焼土層および淡灰色粘砂、地山上面でそれぞれ遺構検出作業を実施した。焼土層上面で土坑ＳＫ03、淡灰色粘砂上面で溝状土坑ＳＸ01・ＳＸ02、地山面では遺構を検出することはできなかった。

河川　C地点で地山直上から切り込む河川と考えられる肩部を土層観察により確認した。河川内の上層には黒灰色中粒砂が堆積しており、この周辺に一時期河川が流れていたことを示している。後に、この河川を土層図に示した3層（2～4）で埋めたて整地したと考える。整地層からは、軒丸瓦片（6235型式Ⅰ種）、軒平瓦片（6664



1 茶褐色粘質土（旧校舎基礎掘方）
2 暗褐色土（造成土）
3 暗灰色粘質土（旧発掘区埋戻土）
4 茶灰色土
5 黄灰色粘質土ブロック＋茶灰色土
6 茶灰色粘質土（遺物片多く含む）
7 灰色粘土（遺物片含む）
8 淡灰色砂質土（遺物片・凝灰岩層含む）
9 灰色砂質粘土＋焼土
10 黒褐色～黒赤褐色土（焼土層）
11 灰色粘質土＋焼土
12 淡灰色粘砂（遺物含む）
13 灰黄褐色砂質粘土（固くしまる）
14 淡灰色粘質土＋灰色砂礫
15 淡灰色細～中粒砂（13～15：地山）

DA第133次調査　発掘区東壁土層図（1/100）

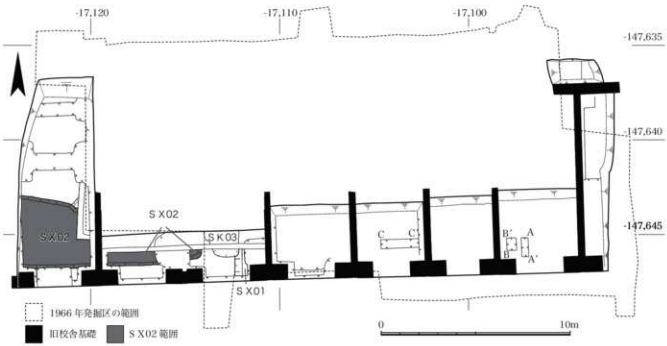


1 淡灰色粘砂
2 灰黄色砂混粘質土（整地土）
3 黒褐灰色砂質粘土（地山）
4 灰黄色砂質粘土（地山）

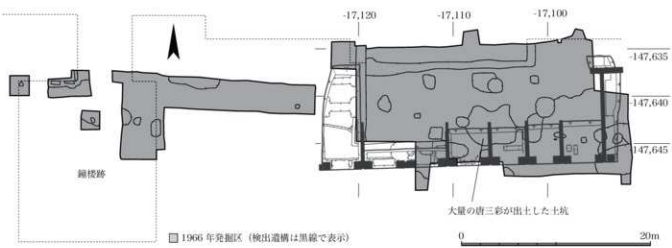
1 灰黄色砂混粘質土（整地土）
2 灰色細砂質粘土
3 黒褐灰色砂質粘土（地山）
4 灰黄色砂質粘土（地山）

1 黒赤褐色土（焼土）
2 灰褐色砂質土
3 暗黄色粘土
4 暗灰色粘土
5 黒灰色中粒砂（河川堆積土）
6 黄褐色砂質土（地山）

DA第133次調査　A～C地点下層土層図（1/50）



DA 第 133 次調査　遺構平面図（1/200）



DA 第 133 次調査発掘区と 1966 年発掘区の位置関係（1/400）

DA 第 133 次調査　発掘区南辺（東から）

DA 第 133 次調査　S X 02（南から）

DA 第 133 次調査S X 02(西から)

型式Ａ種・6712型式Ａ種）、11世紀初頭の土師器杯・皿片等が出土。

ＳＸ01　発掘区中央部で検出した南北方向の溝状の落ち込みで、東西約0.7ｍ以上、南北1.4ｍ以上、深さは約0.2ｍ。東端は旧校舎基礎により壊されていた。

遺構内には、11世紀後半の土師器皿片を含んだ焼土層が堆積していた。

ＳＸ02　発掘区の西半で検出した東西9.4ｍ以上、南北1.5～3.6ｍの溝状の土坑で、検出面からの深さは約0.1～0.3ｍ。土坑内には、上層に厚さ約0.35ｍの黒色砂質土（焼土層）、下層に厚さ約0.1ｍの黄灰色砂質土（砂礫混じり）が堆積しており、上層から11世紀後半の土師器片や瓦器片、唐三彩陶枕片や瓦塼、ガラス製品、石製品、金属製品、土製品、壁画片などが出土した。

ＳＸ01・02は、遺構内に焼土層がみられることから、大安寺の火災によって生じた瓦礫や焼土と共に埋め立てられたと考えられる。

ＳＫ03　焼土層直上で検出した東西1.8ｍ、南北1.4ｍ以上の不整形な土坑である。土坑内には8世紀～9世紀頃の丸瓦、平瓦片や中世の右巻巴紋軒丸瓦1点、11世紀後半～12世紀初頭頃の土師器皿片を含んだ明灰色粘土が堆積していた。

Ⅲ　出土遺物

出土遺物の大半は、焼土層からのものである。焼土層内には細片が多く包含されていたため、焼土層（遺物整理箱450箱分）を持ち帰り、土壌洗浄による遺物の抽出を行った。その結果、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、鬼瓦、道具瓦、施釉瓦、土師器、須恵器、黒色土器Ａ類、瓦器、奈良三彩、緑釉陶器、灰釉陶器、唐三彩、青磁、白磁、国産陶磁器、ガラス製品、石製品、金属製品、塑像片、螺髪、半球状土製品、壁画片、鉄滓、窯壁、炭、木片、種、凝灰岩片があることがわかった。以下、遺物の種類ごとに概要を述べる。

瓦類　丸瓦・平瓦・道具瓦・不明瓦が遺物整理箱で107箱分（焼土層出土81箱分）、軒丸瓦20点、軒平瓦26点、鬼瓦2点、二彩の垂木先瓦3点、刻印のある丸瓦が4点、平瓦が1点、ヘラ描きのある丸瓦1点が出土。

焼土層から出土した二彩瓦には、地垂木先瓦2点、飛檐垂木先瓦1点がある。地垂木先瓦1点は、厚さ1.2㎝、直径は17.0㎝に復原できる。外面はベースに淡緑色釉を施したのちに濃緑色釉で四弁花紋を描いている。外面にトチンの跡が残る。飛檐垂木先瓦は、濃緑色釉で四弁紋を描き、隙間を褐色釉で埋めている。釘穴、トチン跡が残る。

土器類　土器類は遺物整理箱で2箱分ある。概要は表にまとめた。以下、下層、ＳＸ02、焼土層から出土した土器類について述べる。

下層出土土器類　焼土層の下層に堆積していた3層から、土師器、須恵器、黒色土器Ａ類、緑釉陶器、灰釉陶器、唐三彩が出土した。遺物整理箱で約1/2箱分ある。

土師器には、杯Ａ（1・2）、杯Ｂ、皿Ａ、甕（15・16）、羽釜（17）がある。杯・皿類は1㎝以下の破片が多いが、器厚が3㎜前後と薄いものが多い。1は口径12.7～13.1㎝、器高2.5㎝を測る。口縁部上半はヨコナデ、内面にはハケメ痕跡が残る。2は口径17.6㎝、器高2.3㎝。口縁部屈曲が強い。1は9世紀末～10世紀初頭、2は10世紀前半～中頃のものと考える。煮炊具には甕と羽釜があり、いずれも体部外面にはタタキ痕跡が露呈している。15は口径16.0㎝で、体部外面にタタキ、内面にはあて具痕跡が明瞭に残る。16は口径21.4㎝で、体部にタタキおよびあて具痕跡が残る。肩部外面には黒斑がある。口縁部の特徴から大和産と考えられる。17は口径26.0㎝、鍔径は32.4㎝に復原できる。胎土には長石・石英が多く含まれ、色調は淡橙褐色である。これらは口縁部の特徴から、15・17は大和産、16は南山城産のものと推察する。時期的には9世紀以降と考えられるが、15は10世紀末頃～11世紀前半にまで下る可能性がある。

須恵器、黒色土器Ａ類はいずれも細片である。緑釉陶器には段皿片、灰釉陶器には椀片・皿片・壺片がある。9世紀代のものであろう。唐三彩陶枕片が1点出土したが、部位は不詳。

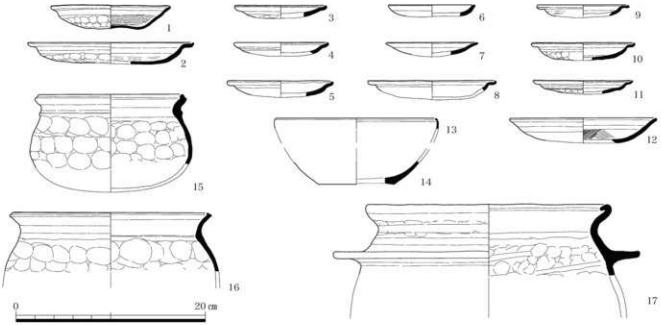
ＳＸ02出土土器類　ＳＸ02内に堆積していた焼土層から遺物整理箱で1箱分の土器類が出土した。土師器、須恵器、黒色土器Ａ類、瓦器、奈良三彩、青磁、唐三彩陶枕がある。

土師器には、杯Ａ、皿Ａ（3～8）、甕があるが細片が多い。3～8は、口径9.8～13.6㎝、器高1.2～2.0㎝に復原できる。形態的な特徴と法量から、3～7は11世紀後半頃、8は11世紀前半～中葉頃と考えられる。

須恵器、黒色土器Ａ類はいずれも細片である。瓦器は口縁部片で、11世紀後半頃のものであろう。

奈良三彩壺（18）は体部片で、体部外面に淡緑色釉、濃緑色釉、褐釉がかかる。体部内面には釉がみられない。釉層が厚く、ガラス質感が強い個体である。

青磁（14）は鉢の底体部片で、二次的に火を受け、釉が変色している。体部内外面はオリーブ色の釉が掛かるが、底部外面縁辺部は釉が掻きとられて露胎がみえる。



DA 第133次調査　出土土器（1/4）

底径は約8.0㎝に復原できる。

唐三彩陶枕は、破片25点があり、ＳＸ02を覆う上層の焼土層と接合するものがある。

焼土層出土土器類　焼土層から遺物整理箱で1箱分の土器類が出土した。土師器、須恵器、黒色土器Ａ類、瓦器、奈良三彩、緑釉陶器、灰釉陶器、青磁、唐三彩がある。

土師器は、杯Ａ・杯Ｂ・皿Ａ（9～12）・椀Ａ・甕があり、量的には杯・皿類の破片が多い。皿Ａは口径9.9～15.6㎝に復原できる。9～11は口縁部上半を強くヨコナデして仕上げている。12は底部内面～口縁部内面下半にかけてハケメ痕跡が残る。形態的特徴と法量から、11世紀中葉～後葉にかけてのものと考えられる。

須恵器は、杯Ａ・杯Ｂ・杯Ｂ蓋・皿・壷・鉢・甕がある。細片が多いため詳細な時期は不明であるが、8世紀代～9世紀前半頃までのものと考える。杯Ａ・Ｂは、底部外面はヘラキリ痕跡が残り、杯Ｂ蓋は扁平である。これらは、二次的に火を受けた痕跡が残るものが多い。

黒色土器Ａ類は、椀の高台から体部にかけての破片が少量ある。細片のため実測し難いが、高台の断面形は三角形状を呈しており、低いものと高いものがある。10世紀以降と考えられる。

瓦器は、椀の口縁部片であるが、いずれも細片である。器壁が分厚く、ミガキも緻密に施されており、11世紀後半頃のものと考えられる。

奈良三彩は、壷（20）、陶枕（19）がある。20は壷の高台と考える。高台径が28.8㎝に復原できる大型の壷または瓶になると思われる。外面は淡緑釉のベースに濃緑釉を格子状に掛けている。内面は淡緑釉のみである。内外面とも釉層が薄く、釉下にロクロケズリの痕跡がみえる。19は、枕面から側面にかけての破片である。外面には緑釉ベースに褐釉と白釉が点描されているが、二次的に火を受け釉が変色している。内面にはヘラナデの痕跡が残る。接合方法は、枕面と側面は、端部を直角に切った粘土板を貼り合わせているが、側面下端は斜め45度の状態で残存していることから、側面と底面の端部を45度に切って接合していると考えられる。器厚は、枕面が約0.5㎝、側面が0.8～1.0㎝を測る。

緑釉陶器は椀片1点、灰釉陶器は椀・皿の破片2点がある。いずれも9世紀代のものと考える。

青磁（13）は内湾しながら立ち上がり、口縁端部が内側に肥厚する。鉢の口縁部になると考えられ、ＳＸ02出土の青磁鉢（14）と同一個体になる可能性がある。口径は約13.0㎝に復原できる。

唐三彩は、容器になると考えられる破片（巻首図版Ⅰ-32）が1点と陶枕が53点ある。32は、約1.5㎝×3.0㎝の小破片で全形は不詳であるが、厚さ約3㎜の器壁に縦に長い半円形状の粘土が2箇所以上に貼り付けられている。それぞれ、縦に2条の刻線があり、獣脚を表現したようにみえる。

唐三彩陶枕は、下層から1点、ＳＸ02から25点、包含層からも1点出土しており、焼土層出土のものを含めて合計81点に及ぶ。多くのものが二次的に火を受け、釉が爛れている。製作年代に大きな幅が認められないため、一括してここで概要を述べておく。

陶枕片は箱形のものが主体を占めているが、細片が多いため箱形枕の形態が分かるものは少ない。このうち、枕面が凹面をなす凹面枕は3点確認した。胎土は、白色～淡紅茶色の素胎（**Ⅰ類**）と白色と褐色系粘土を練り合わせた絞胎（**Ⅱ類**）がある。以下、胎土と枕面に残る紋様の種類ごとに記述[2]する。

Ⅰ類（巻首図版Ⅰ・p 63）

四弁花紋　押印による花紋が残る資料は20点ある。花弁の特徴から3つに分類できる。

①素弁単弁四弁花紋（21・22）　中房の周りに単弁の花弁が4枚配されているもので、2点確認した。花紋の最大径は約2.0㎝、器厚は約0.4㎝。ベースが緑釉、中房が褐釉、花弁が白釉に塗り分けられている。中房・花弁は茶褐色釉で縁取りされている。胎土は淡茶色をおびた白色を呈する。裏面はヘラナデの後、不定方向のナデを施している。

②素弁三裂弁四弁花紋（23～26）　中房の周りに花弁先が三つに分かれる素弁を配するもので、二次的に火を受けて釉が爛れ不鮮明なものが多いが、肉眼観察で13点確認した。花紋の大きさは、最大径1.4～1.6㎝が7点、これよりやや大きい1.8㎝が1点ある。花弁の形状や大きさから異笵と考えられるものが少なくとも3点(23～25)以上はある。器厚は約0.4～0.6㎝。釉は、ベースが緑釉、花弁が白釉、中房が黄釉のもの（23）、ベースが褐釉、花弁が緑釉、中房が白釉のもの（24）、ベースが緑釉、花弁と中房が白釉のもの（25・26）がある。24は沈線があることから、周帯を巡らすタイプになると考える。これらは、内面をハケメやヘラケズリで調整した後、不定方向ナデを施している。枕面と側面の接合部内面には、補強用の粘土が残る。

③重弁三裂弁四弁花紋（27）　基本的に②と同じ紋様構成であるが、花弁内に子葉状の模様を配したもの。枕面から側面にかけての破片を1点確認した。花紋の最大径は約2.7㎝。器厚は枕面・側面ともに0.45㎝。器表面全体が二次的に火を受けているため分かりにくいが、釉はベースが褐釉、花弁が緑釉で、中房と花弁内の円形模様が白釉。枕面縁辺部には、褐色のベースに白釉を点描している。枕面内面に糸切り痕跡が残っており、その上から不定方向のナデが施されている。

この他に、四弁花紋が押印されたと考えられる資料が4点あるが、釉の爛れが激しく肉眼観察では紋様の形が判断できなかった。

団花紋　連珠紋とC字形紋を確認した。

①連珠紋（28・29）　2点確認した。29は、枕面の中央に水鳥が一配され、その周りを二重の円形区画線が巡る。円形区画線の内側と外側の幅は約1.0㎝で、内に直径0.9㎝の連珠で飾る。水鳥頭部の上には鋸歯状の葉紋がみられ、円形区画線の外側には縦方向の線刻があることから、周帯が巡ると考えられる。器厚は約0.5㎝。枕面内面には不定方向のヘラナデ痕跡が残る。28は、枕面から二側面にかけての破片である。連珠紋と外側の円形区画線と四周帯の線刻が残る。内面には、各面に補強用の粘土がみられる。器厚は枕面が約0.4㎝、側面は0.4～0.5㎝。釉は、珠紋と四周帯が緑釉、四周帯と円形区画の間が褐釉、珠紋間は白釉、四周帯には白釉が点描されている。側面は緑釉のベースに、褐釉と白釉が施されている。

②C字形紋（34）　2㎝四方の小破片を1点確認した。C字形紋の端部は、玉緑状に肥厚し内側に巻き込んでいる。器厚は0.4～0.5㎝。釉はベースに藍釉を施しており、1966年調査で出土した連珠紋の資料[3]と紋様構成と釉色が近似しており、同一個体になる可能性がある。

その他　紋様が確認できるものが4点ある。33は無紋の周帯内側に綾杉紋を配している[4]。37は魚々子紋が施されている。36は魚々子紋と草花様の紋様があるが詳細は不明。35は、釉の爛れが著しくどのような模様になるか不明。この他に、無紋の周帯が配される破片が4点ある。

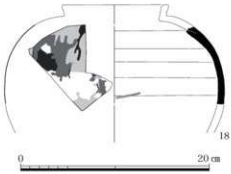
Ⅱ類（巻首図版Ⅰ・p 63）

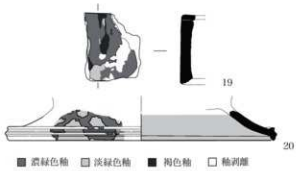
絞胎は6点確認した。30は、枕面が凹面をなす凹面枕で、枕面・長側面・底面の三方が残る[5]。枕面は赤褐色粘土と白色粘土の絞胎、長側面にはにぶい橙色粘土と白色粘土の絞胎、底面は素胎の白色粘土を使っている。長側面内面に残るにぶい橙色粘土の接着粘土の状態から、最初に長側面の上下端面に接着粘土を塗ってから枕面と底面を接合していることがわかる。長側面内面は、不定方向のナデにより絞胎が見えない。釉は、全面に透明度の強い黄色釉をベースに、緑釉を流し掛ける。器厚は三面とも約0.4㎝。このほかに暗褐色粘土と白色粘土を練り合わせた小片の資料もある。

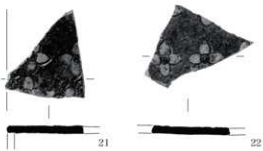
今回出土した陶枕は、1966年調査で出土した陶枕と同一個体と考えられる資料があるため、照合作業をおこなった上で再度報告する予定である。

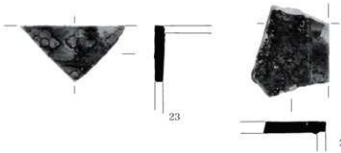
ガラス製品（巻首図版Ⅱ）　ガラス製品の破片は複数出土しているが、今回はこのうちの5点について分析を行った[6]。

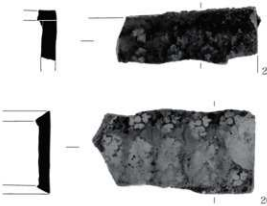
分析の結果、ガラスの成分には、鉛ガラス（38）とアルカリ石灰ガラス（39～43）があることが判明した。

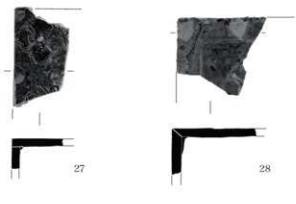


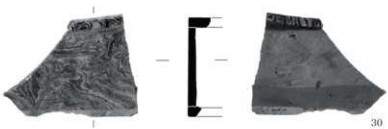


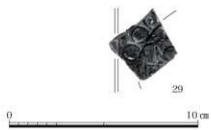




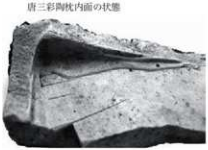








唐三彩陶枕内面の状態



DA133次調査　奈良三彩（1/4）、唐三彩陶枕（1/2）

DA第133次調査　出土瓦類・土器・陶磁器内訳表

出土地点	遺物	種　類	器種・型式・点数	時　期	備　考
下層	瓦類	軒丸瓦	6235型式1種1点	Ⅳ-2期（767～770）	3片接合。
			型式不明3点	8世紀	
		軒平瓦	6664型式A種1点	Ⅰ-2期（715～721）	
			6712型式A種2点	Ⅲ-2期（749～757）	
	土器	土師器	杯A、皿、甕、羽釜、杯B	8世紀代～11世紀初頭	細片が多い。
		須恵器	壺、杯ヵ皿	8世紀～9世紀代	体部片。
		黒色土器A類	椀	10世紀代	細片。
		緑釉陶器	段皿ヵ1点	9世紀代	体部細片。
		灰釉陶器	椀2点、皿5点、壺ヵ1点	9世紀代	皿5点は同一個体。
		唐三彩	容器片1点	8世紀	層の上の方から出土。
SX01	瓦類	軒平瓦	250型式C種1点	鎌倉時代後期（1253～1333）	遺構掘削時の混入か。
	土器	土師器	杯、皿、甕	10世紀～11世紀後半	いずれも細片。
SX02	瓦類	軒丸瓦	6138型式E種1点	Ⅲ-2期（749～757）	
			型式不明1点	8世紀	
		軒平瓦	6712型式A種2点	Ⅲ-2期（749～757）	
			型式不明1点	8世紀	
	土器	土師器	杯A、皿、甕	10世紀後半～11世紀後半	土師器の細片が多い。時期的には10世紀代後半～11世紀初頭頃のものが主体を占める。
		須恵器	鉢、甕	8世紀以降	
		黒色土器A類	椀	10世紀代	
		瓦器	椀ヵ皿	11世紀後半ヵ	
	陶器	奈良三彩	壺体部片2点	8世紀代	2点接合。
		唐三彩	陶枕片25点	8世紀	二次的に火を受けている破片多い。
	緑器	青磁	鉢ヵ（底部）1点	10世紀代	越州窯系、焼土層出土青磁口縁部と同一個体ヵ。
焼土層	瓦類	軒丸瓦	6304型式D種1点	Ⅰ-2期（715～721）	
			6091型式A種2点、6138型式C a1点、6138型式E種1点	Ⅲ-2期（749～757）	
			51型式A b種1点、51型式A c種1点	平安時代前期（784～911）	
			型式不明5点	8世紀	
		軒平瓦	6664型式A種6点	Ⅰ-2期（715～721）	軒平瓦6664型式A種3点・6712型式A種1点は平瓦部凹面に朱が付着。
			6712型式A種8点	Ⅲ-2期（749～757）	
			6712型式B種1点	平安時代前期（784～911）ヵ	
			型式不明1点	8世紀	
		鬼瓦	無紋鬼瓦1点	平安時代ヵ	
		刻印瓦	丸瓦凸面段部に「了」1点、丸瓦凹面玉縁部に「了」1点、平瓦凹面に「了」1点	8世紀	
		垂木先瓦	二彩地垂木先瓦2点	8世紀	濃緑色釉で四弁花紋を描いている。外面にトチン痕跡がある。
			二彩飛檐垂木先瓦1点	8世紀	濃緑色釉で四弁花紋を描いている。外面にトチン痕跡と方形の釘穴がある。
	土器	土師器	杯A、皿A、鉢、甕	8世紀～11世紀後半	土器は細片で二次的に火を受けているものが多い。量的には土師器杯・皿片が、時期的には10世紀代後半～11世紀初頭のものが多い。
		須恵器	杯A・B、壺、甕	8世紀～9世紀前半	
		黒色土器A類	椀	9世紀後半～10世紀後半	
		瓦器	椀	11世紀後半ヵ	
	陶器	奈良三彩	陶枕1点、壺の高台ヵ1点	8世紀	陶枕は短側面の破片と考えられる。
		緑釉陶器	椀1点	9世紀	緑釉陶器・灰釉陶器はいずれも細片。
		灰釉陶器	椀1点、皿1点	9世紀	
		唐三彩	陶枕53点、容器ヵ1点	8世紀	二次的に火を受けている破片多い。
	緑器	青磁	鉢ヵ（口縁部）1点	10世紀代	SX02出土の青磁片と同一個体ヵ。
SK03	瓦類	軒丸瓦	右巻巴紋1点	中世	
	土器	土師器	皿	11世紀末～12世紀初頭頃ヵ	口縁部細片。

いずれも焼土層から出土したものである。

38は、鉛ガラスの半球形状の玉で、径約1.2㎝、高さ0.7㎝。二次的に火を受け、表面が白く濁る。アルカリ石灰ガラスには、ローマンガラス系統（40・41）、東南アジア系統（43）、ササン（イスラム）ガラス系統（39・42）のものがある。40・41は、残存する形状から容器片と考えられる。41は二次的に火を受け、表面が溶けて変色している。43は直径0.3㎝、高さ㎝、孔径は約1.0㎝。39は、長さ1.3㎝、横幅0.7㎝、厚さ0.5㎝で、滴状の形をしている。表面は淡オリーブ灰色である。42は半球形状の玉で、表面は淡乳青色を呈し、表面が荒れている。直径1.0㎝、高さ0.5㎝を測る。

石製品（巻首図版Ⅱ）　水晶、瑪瑙、サヌカイト、花崗岩、凝灰岩がある。

水晶は、水晶玉（44～50）と多数の砕片が出土した。44は直径0.9㎝の球形で、46は直径2.2㎝、高さ1.0㎝の半球形状を呈する。焼土層出土。この他に0.5㎝以下の水晶砕片が48.4ｇ分出土した。ほかの石製品はいずれも砕片である。

金属製品（巻首図版Ⅱ）　金糸、銅鉈、銅釘、板状銅製品、棒状銅製品、銅滓、銅湯玉、不明銅製品、鉄釘、不明鉄製品がある。

金糸は、51が残存長2.0㎝。分析の結果、非常に純度の高い金であることが判明した。52は残存長4.2㎝。重さは、２点あわせて0.1ｇである。いずれも薄く延ばした金を螺旋状に巻いている。２点とも焼土層出土。大安寺には繍仏があったことが『大安寺縁起并流記資材帳』にみえ、これらの金糸は繍仏に使用されたものかもしれない。

土製品　土製品には、半球形状土製品、円板形土製品、螺髪、塑像片がある。

半球形状土製品は６点ある。53は、最大径3.9㎝、高さ1.8㎝を測る。底面の相対応する二箇所をヘラで切り落としている。底外面には糸切り痕跡が残る。53と54の球面には、漆と金箔が付着。用途は不明だが、何かに嵌めこんで使用していた可能性がある。

円板形土製品は３点ある。いずれも平瓦を転用し、径約２㎝の大きさに加工している。

塑像は、どこの部位になるか不明。仕上土の上に色彩が残るが、二次的に火を受け黒色に変色している。

螺髪は全部で21点出土した。粘土紐を先端部から底部に向かって巻いて作っており、円形状の底面には指紋が残っている。底部外面には一辺が約0.1㎝大の方形の穴があるものと無いものがある。穴は、１穴が11点、２穴が１点ある。サイズには大小があり、大きいものは底径1.1～1.4㎝、高さ1.1㎝前後、小さいものは底径1.0㎝、高さ0.7㎝である。これらは逆三角錐状の外型を利用して作っている可能性があり、底面に残る穴は棒状の工具を刺して型から取った痕跡と考える。

壁画片（巻首図版Ⅱ）　砕片が多数あるが、今回は６点の資料について蛍光Ｘ線分析をおこなった[7]。いずれも二次的に火を受けており、多くの無機顔料や染料が焼失・変色していたが、分析結果から、緑青や群青などの銅由来の顔料や、ベンガラ・黄土など鉄を含む顔料、鉛由来の顔料が使用されていることがわかった。

Ⅳ　調査所見

今回の調査では、焼土層や下層から多彩な遺物が出土した。以下、出土遺物の観察結果から判明したことをまとめておく。

①　金堂と講堂の間の調査で出土した唐三彩陶枕片は、従来の出土数と合わせると約280点に及ぶことになった。「模様や製作技法が多様で、釉の配色も異なる個体が多い。」と神野氏が指摘[8]しているが、今回の調査で出土した唐三彩陶枕は、花紋と色彩は多様であるが、製作技法については基本的には大差はない。

また、道慈によって請来されたとする大安寺の唐三彩陶枕は、「実用品としての陶枕を意図して持ち帰ったのではなく、のせられた意匠、装飾を持ち帰ることを意図して陶枕を選んだ。」とも指摘されているが、これまでに奈良三彩を初め、古代の日本の焼物には同様の方法で花紋を写したと考えられる個体は発見されていない。垂木先用の三彩瓦[9]は、釉薬を塗り分けることにより四弁花紋ふうに仕上げているが、押印や陰刻で花弁を描くような技法は採用していない。平安時代になると、緑釉陶器に陰刻花紋が描かれるようになるが、唐三彩のように花紋部分の色を塗り分けることはしない。

奈良三彩を初めとする日本の古代施釉陶器は、唐三彩陶枕の意匠や装飾を写したとまでは考えにくく、配色を参考にしただけにすぎないのではないだろうか。

大安寺に大量の陶枕が中国から請来された意図は測り知れないが、金堂もしくは講堂に置かれていた可能性がある点も考慮すると、単なる色見本的な目的で持ち帰ったとするには無理がある。やはり当初の目的は、実際に陶枕[10]を使用するためか、あるいは記念品として持ち帰ったと考えた方が妥当であろう。

②　ガラス製品には、鉛ガラス、アルミナソーダガラス、ローマングラス、ササンガラスがあり、様々なガラス原材料を使用していることもわかった。堂内荘厳具の

水晶片

螺髪

半球形状土製品

螺髪の底部外面

塑像片

DA 第 133 次調査　ガラス破片・土製品

DA第133次調査　ガラス製品・石製品・土製品・金属製品内訳表

出土地点	遺　物	種　類	備　考
下層	ガラス製品	ガラス片	ガラス製品：ガラス片１点
	石製品	水晶片、瑪瑙玉髄片、凝灰岩片	石製品：水晶砕片約3.5ｇ、瑪瑙１点
	金属製品	板状銅製品、銅鋲、不明鉄製品、鉄釘	
	壁土	色彩が残る漆喰、壁土	
	木製品	割りさき、用途不明木製品、炭	
ＳＸ０１	石製品	凝灰岩片	
	金属製品	銅片、鉄釘	銅片１点、鉄釘１点
ＳＸ０２	ガラス製品	板状ガラス片、ガラス片	
	石製品	水晶玉（半球状）、水晶片、凝灰岩片、	石製品：半球形状水晶玉２点、水晶砕片約2.0ｇ出土。
	土製品	瓦塔、塑像片ヵ、半球形状土製品	土製品：瓦塔３点出土。底面径約1.0～1.4cm、高さ約0.8～1.0cm。半球形状土製品２点出土。うち１点に表面に金箔が付着。
	金属製品	板状銅製品、銅湯玉、不明銅製品片、鉄釘、不明鉄製品片	
	木製品・炭化物	炭、金箔付き木製品	木製品：2cm四方の板状木製品に金箔が付着。
	壁土	色彩が残る漆喰、壁土片、漆喰	
	種子	不明	
焼土層	ガラス製品	ガラス玉（半球状）、板状ガラス片、ビーズ	ガラス製品：鉛ガラスとアルカリ石灰ガラス（ローマンガラス系統、東南アジア系統、ササンガラス系統）がある。
	石製品	水晶玉、水晶片、瑪瑙玉髄片、凝灰岩片、サヌカイト片	水晶：水晶玉１点、半球形状水晶５点、砕片約42.8ｇ。
	金属製品	金糸、銅製釘、板状銅製品、棒状銅製品、銅湯玉、不明銅製品片、鉄釘、不明鉄製品片、銅滓	金属製品：金糸は蛍光Ｘ線による定性・定量分析の結果、非常に純度の高い金であることが判明。
	土製品	瓦塔、塑像片ヵ、半球形状土製品、円盤形土製品	土製品：瓦塔18点、半球形状土製品６点、円板形土製品３点が出土。
	壁土	色彩が残る細片	
	木製品・炭化物	炭、割りさき、炭化木	
	種子	ウリ種	
	骨	骨片	

飾りに使われていたものと考えられる。

③　金堂と講堂の間にある焼土層の下層から10世紀前半～11初頭頃の土師器皿が出土したことから、下層が堆積した時期は11世紀初頭以降であることが判明した。

また、焼土層は、罹災した大量の遺物を含んだ整地土と考えられ、共伴した土器の年代から整地作業が行われた時期は11世紀後半以降であることも明らかにすることができた。

④　焼土層の時期は、これまでは大安寺講堂が焼失した延喜11（911）年の火災に伴うもので、出土遺物は講堂のものが投棄されたとみられてきた。

しかし、今回の調査成果により、延喜11年の火災よりも新しい時期の火災に伴うもので、出土土器の年代から推測すると、11世紀初頭から11世紀後半までの間の火災が候補となり、金堂が焼けたとされる寛仁元年（1017）の火災が有力となろう。

寛仁元年の火災では、講堂も焼けたと記す史料[11]もあることから、焼土層に包含されていた多種多様の遺物が金堂か講堂のどちらの建物に伴うものか判断しにくいが、講堂北辺部の発掘調査[12]では焼土層が確認されていないことを考慮すると、少なくとも金堂・講堂間で検出した焼土層は金堂の火災に伴うもので、多彩な遺物は金堂の荘厳具や法具等であったと理解しておくのが妥当であると考える。

（三好美穂）

1）八賀晋「大安寺発掘調査」『奈良国立文化財研究所年報 1967』1967
2）本稿では、神野恵氏が「大安寺陶枕再考」『河南省鞏義市黄冶窯跡の発掘調査概報』2010奈良文化財研究所（以下、「大安寺陶枕再考」）で提示された陶枕の形態・技法・用語に準拠した。
3）「大安寺陶枕再考」p 68－33
4）「大安寺陶枕再考」p 72－61・62と同一個体の可能性がある。
5）「大安寺陶枕再考」p 74－70・71と同一個体の可能性がある。
6）ガラス製品および金属製品の成分分析は、奈良文化財研究所埋蔵文化財センター田村朋美氏に実施して頂き、分析結果についてもご教示を賜った。
7）壁画片の蛍光Ｘ線分析は、奈良県立橿原考古学研究所鶴真美、奥山誠義両氏に実施して頂き、分析結果についてもご教示を賜った。
8）「大安寺陶枕再考」参照。
9）大安寺出土の施釉瓦先瓦については、中井公氏が「大安寺重木先瓦考」『奈良市埋蔵文化財調査年報　平成23（2011）年度』で詳細な観察をおこなっており、参考にした。
10）大安寺出土唐三彩陶枕は、大きさから陶枕と考えられている。
11）『雲孔私記』の「或記」、『御堂関白記』『日本紀略』『扶桑略記』など。
12）奈良市教育委員会「大安寺旧境内発掘調査報告Ⅲ81-2次調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書　昭和56年度』1982

（2）花園院推定地の調査　第 131 次

Ⅰ　はじめに

調査地は、大安寺旧境内の南東隅で、花園院の推定地にあたる。花園院推定地では過去数度の調査が行われているが、その様相は不明である。大安寺南辺を画す七条条間路北側溝と考えられる溝が検出されているが、付近は岩井川の旧流路や氾濫の影響を受け、奈良時代の様相は未だ明確ではない。なお、当敷地内では昭和 48 年の宅地造成に係る発掘調査が行われているが、発掘区の位置が明確ではなかったため、改めて調査を実施した。

Ⅱ　基本層序

厚さ約 0.2 m の表土の下に 0.6 m の真砂土の造成土があり、以下黒灰色土 0.1 m、灰色粘土 0.6 m、灰色の砂混粘土（3 層に分かれる）が 0.3 m前後あり、黄色粘土の地山に達する。地山面の標高は 62.1 m前後で、現地表からの深さは約 1.7 mである。

なお、発掘区東半で昭和 48 年の発掘区を確認した。

Ⅲ　検出遺構

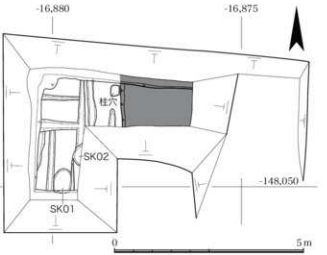
主な遺構は、土坑 2 基、柱穴 1 である。土坑 ＳＫ01 は、南北 0.6 m、東西 0.45 m の平面楕円形で、深さは約 0.24 mあり、断面形は逆台形状を呈す。埋土に 10 世紀の黒色土器Ａ類が含まれる。土坑ＳＫ 02 は、南北 0.6 m、東西 0.25 m以上、深さ 0.26 m で発掘区外東に広がる。埋土は締まった褐色土で、出土遺物はなかった。柱穴は南北 0.3 m × 東西 0.25 m の方形で、深さ 0.3 m。掘方の壁面がほぼ垂直なため柱穴と判断したが、時期不明。

Ⅳ　出土遺物

土器類・瓦類合わせて整理箱 1 箱である。多くの遺物は、最も砂質の強い最下部の暗灰色砂混粘土からの出土である。奈良・平安時代の須恵器・土師器・黒色土器が多く、この他灰釉陶器 6 点、緑釉陶器と越州窯系青磁が 1 点づつある。

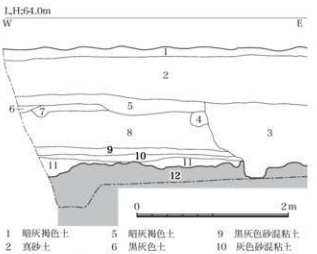
Ⅴ　調査所見

調査の結果、奈良時代の遺構は確認できず、大安寺に関連する手掛かりは得られなかった。遺構の直上に堆積する砂混じりの粘土は、水流による堆積の可能性が高く、この付近にも岩井川の氾濫堆積物が及んでいると考えられる。その氾濫する状態は少なくとも 10 世紀までは続いていたものと思われ、その後は耕作地として利用されていたようである。ただし、奈良時代において旧流路に対して治水が行なわれていたかは不明であり、またこの地域が花園院として区画された場所かどうかについても、新知見は得られなかった。　（松浦五輪美）



DA 第 131 次調査　発掘区遺構平面図（1/100）

（網掛部は昭和 48 年の発掘区）



1	暗灰褐色土	5	暗灰褐色土	9	黒灰色砂混粘土
2	真砂土	6	黒灰色土	10	灰色砂混粘土
3	旧発掘区埋戻土	7	褐灰色土	11	暗灰色砂混粘土
4	地山ブロック	8	灰色粘土	12	黄色粘土（地山）

DA 第 131 次調査　発掘区北壁土層図（1/50）

DA 第 131 次調査　発掘区全景（西から）

（3）賤院推定地の調査　第 132 次

Ⅰ　はじめに

調査地は、大安寺旧境内の北東隅にあたり、賤院推定地の北方に位置する。付近では、約 50 m東で行った市ＤＡ第 78 次調査[1]があるが、奈良時代の遺構は確認されていない。大安寺旧境内推定範囲の北辺地域は現在住宅地となっており、発掘調査も少なく、奈良時代における様相は不明な部分が多い。

発掘箇所は現家屋の裏庭にあたり、南北 5 m × 東西 7 mの発掘区を設定したが、中央部に水道管が通っていたためアゼとして残した。

Ⅱ　基本層序

現地表下約 0.25 mまでは近世以降の盛土である。さらに約 0.15 m下で黄色シルトまたは黄色礫混じり粘土の地山となるが、堆積土は様々である。西半では中世以降の盛土とみられる暗褐灰色土が地山直上に広く堆積している。

地山上面の標高は 63.2 ～ 63.3 mで、庭となっていた東半より建物のあった西半の方が低く、より削平を受けた可能性がある。

Ⅲ　検出遺構

主な遺構は土坑７基、溝２条、埋甕遺構１基、その他柱穴とみられる小穴がある。

ＳＫ 01 ～ 03 は直径 0.4 ～ 0.5 mの平面円形の土坑で、深さ 0.1 ～ 0.2 mの椀状の掘方である。埋土の質が似ており、形状的にも似ることから、同時期に同じ目的で掘られたものと考えられるが、時期は不明。

ＳＫ 04 は南北 1.2 m以上、東西 0.4 m以上の平面楕円形状の土坑。褐色土の範囲を土坑として捉えたが、深さは 0.03 mほどしか残っておらず時期は不明。

ＳＫ 05 は南北 0.25 m、東西 1.5 mで平面形は東西区にまたがる長方形状と推測される土坑。深さは 0.1 m程度しか残存しておらず、底面が平坦な浅い皿状の断面を呈す。出土遺物は少量であるが奈良時代の土器片が含まれていた。

ＳＫ 06 は南北 1.3 m、東西 0.3 m以上で平面楕円形を呈するとみられる土坑。アゼ断面にかかる土層の観察から、盛土直下から掘込みが始まっており、深さは本来 0.3 m以上あったものと判る。埋土から 15 ～ 16 世紀頃の土器が出土している。ＳＫ 04 ～ 06 は重複関係から 04 → 05 → 06 の順に新しい。

ＳＫ 07 は南北 2.7 m、東西 0.9 m以上の隅丸方形の掘方と推定される。近世盛土直下から残存しており、18 世紀以降の遺物が出土している。工事掘削が遺構検出面より下がらないことから掘り下げは行なっていないが、井戸の掘方と考えられる。

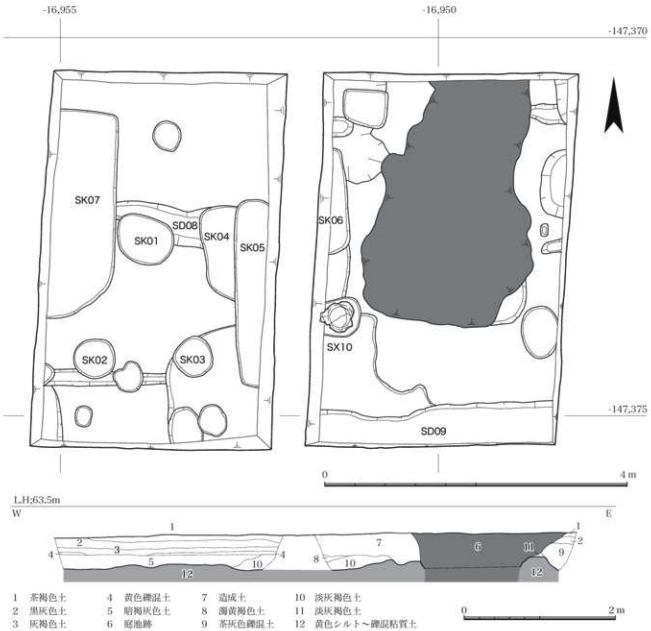
ＳＤ 08 は幅 0.45 m前後、深さ 0.05 mの東西方向の溝で、長さ約 1.2 m分を確認した。重複関係から本発掘区中最も古い遺構で、古代の土師器皿の小片が出土した。

ＳＤ 09 は南北 0.6 m以上、東西 5.1 m以上、深さ 0.1 m以上で発掘区外に広がる掘り込みであるが、溝状の遺構と判断した。埋土から 19 世紀以降の遺物が出土した。

ＳＸ 10 は埋甕遺構である。底部径が約 0.25 mの 17

DA 第 132 次調査　発掘区全景（南から）

DA 第 132 次調査　発掘区西半部全景（北から）



DA 第 132 次調査　発掘区遺構平面図・北壁土層図（1/50）

世紀以降とみられる瓦質土器の深鉢が据えられている。上部は盛土造成により破壊されている。銅製の飾り金具の小片が出土した。

柱穴とみられる掘方からは 14 ～ 16 世紀の遺物が出土するものはあるが、奈良時代の掘方と判断できるものはない。

Ⅳ　出土遺物

土器類が遺物整理箱 1 箱分、瓦類が 1 箱分ある。盛土や遺構の埋土から、形象埴輪を含んだ若干の埴輪片が出土しており、特徴から杉山古墳のものと考えられる。この他、奈良時代の須恵器・土師器・平瓦、室町時代の土師器・瓦質土器、江戸時代の瓦質土器・国産磁器・軒平瓦などが出土しているが、多くは小片である。

Ⅴ　調査所見

調査地は大安寺寺域の隅とも言え、重要な施設や大型の建物が存在したとは考えにくい場所である。今回の調査でも明確に奈良時代の遺構と判断できるものはなかったが、埋土に奈良時代より後の遺物が含まれない遺構や、重複関係から時期の古くなる可能性をもつものはある。

しかし、現状では大安寺に関連する遺構とは判断し難く、この付近での奈良時代における土地利用に関してはさらに調査成果を積み重ねていく必要がある。

（松浦五輪美）

1）　奈良市教育委員会「塊院推定地北方地区の調査　第 78 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成 10 年度』1999

（4）苑院推定地の調査　第134次

Ⅰ　はじめに

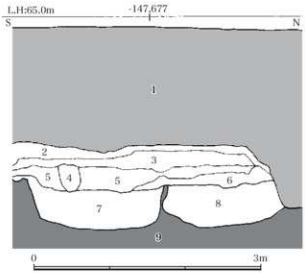
当該地は平城京左京六条四坊十二坪にあたり、大安寺の伽藍復原[1]では苑院の推定地とされている場所の北東部にあたる。十二坪については、「大安寺伽藍縁起并流記資財帳」が勧録された天平19（747）年段階では大安寺寺院地外で、早良親王が大安寺に移り住んだ神護景雲2（768）年頃に「東院」として寺院地に組み込まれたとする見解[2]と、「食堂并大衆院」にあてる見解[3]も出ている。苑院推定地内ではこれまで7次の調査[4]が実施され、奈良時代の掘立柱建物・井戸・溝・土坑などが確認されているが、性格が確定できる証拠は得られていない。このような成果をふまえて、今回の調査は特に奈良時代の遺構の様相確認を主目的とした。なお、当敷地内では昭和48年に奈良県教育委員会による発掘調査が行われているが、発掘区の位置が明確ではなかったため、その位置確認も目的とした。

Ⅱ　基本層序

発掘区内の土層は、北半では現地表面からの深さ約2.1 mまでが造成土で、この直下で黄褐色粘土の地山となり、ここが昭和48年の発掘区と確認できた。南半では現地表面からの深さ約1.6 mまでが造成土で、以下、濁黄灰色土（厚さ約0.1 m）、黒灰色土（耕土、厚さ約0.2 m）、灰色砂質土（厚さ約0.1 m）、茶灰色砂質土（厚さ約0.1 m）と続き、現地表面からの深さ約2.1 mで、黄褐色粘土の地山となる。遺構検出はこの地山上面で行なった。検出面の標高は概ね62.8 mである。

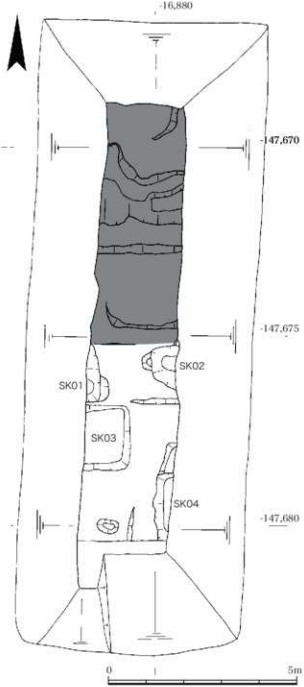
Ⅲ　検出遺構

主な検出遺構には土坑4基がある。土坑ＳＫ01は南



1　造成土（真砂土、県1973年調査後の造成土）
2　地山と3・5・6の混合土（県1973年調査時の耕土）
3　黒褐色土（耕土）
4　3・5の混合土
5　灰色砂質土
6　茶灰色砂質土
7　濁黄褐色土（灰褐色砂質土と地山ブロック多い、SK03埋土）
8　濁黄褐色土（地山ブロック多い、SK01埋土）
9　黄褐色粘土

DA第134次調査　西壁土層図（1/50）



DA第134次調査　発掘区遺構平面図（1/100）
（網掛部は奈良県教育委員会昭和48年調査の発掘区）

北約1.5 m、東西約0.5 m分を検出した。検出面からの深さは約0.5 m。埋土から奈良時代の土師器・須恵器、塼、平瓦、砥石の小片が出土した。

土坑ＳＫ02は南北約1.3 m、東西約0.9 m分を検出した。検出面からの深さは西側が約0.3 m、東側が約0.4 mで、底は段差が付く。

土坑ＳＫ03は南北1.7 m、東西約1.2 m分を検出した。検出面からの深さは約0.5 m。埋土から奈良時代の土師器・須恵器の小片が出土した。

土坑ＳＫ04は南北2.6 m、東西約0.5 m分を検出した。検出面からの深さは北側が約0.2 m、南側が約0.4 mで、底は段差が付く。奈良時代の土師器・須恵器、室町時代の瓦質土器、江戸時代の国産陶磁器が出土した。

Ⅳ　出土遺物

出土遺物には奈良時代の土師器・須恵器、室町時代の瓦質土器、江戸時代の国産陶磁器、奈良時代の平瓦・塼、砥石がある。遺物は全体で遺物整理箱１箱に満たない。

Ⅴ　調査所見

奈良時代の遺構は無く、大安寺苑院に関係する手掛りは無かった。検出した土坑ＳＫ01～04の性格については、いずれも掘削深度が、地山である黄褐色粘土下の黄褐色砂質土が露出する深さで止めていること、埋土に地山である黄褐色粘土ブロックを多く含んでいることから、粘土採掘坑とみられる。土坑ＳＫ03からは18世紀の陶磁器が出土しており、採掘は江戸時代におこなわれたとみられる。なお、今回の調査地の北西側約20 m離れた苑院・賤院両推定地を区画する条間南小路上で、２箇所の調査[5]が行なわれており、ここでも同様の粘土採掘坑が確認されている。　（原田憲二郎）

１）村田治郎「薬師寺と大安寺の古地」『史迹と美術』240号　史迹・美術同攷会 1954

２）鍾方正樹「総括」『史跡大安寺旧境内Ⅰ　杉山古墳地区の発掘調査・整備事業報告』奈良市教育委員会 1997

３）上原真人『古代寺院の資産と経営−寺院資財帳の考古学−』株式会社すいれん舎 2014

４）藤井利章「第Ⅱ部　29 奈良県 29-18 大安寺遺跡」『日本考古学年報26』日本考古学協会 1975
奈良市教育委員会「史跡大安寺旧境内の調査　83－3次」『奈良市埋蔵文化財調査報告書　昭和58年度』1984
奈良市教育委員会「史跡大安寺旧境内の調査　第29次の調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　昭和62年度』1988
奈良市教育委員会「史跡大安寺旧境内の調査　第52次の調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成４年度』1993
奈良市教育委員会「苑院推定地の調査　第64次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成５年度』1994
奈良市埋蔵文化財調査センター「苑院地区の調査　第113次」『奈良市埋蔵文化財調査年報　平成17（2005）年度』2008

５）奈良市教育委員会「史跡大安寺旧境内の調査　83－4次」『奈良市埋蔵文化財調査報告書　昭和58年度』1984、
奈良市教育委員会「史跡大安寺旧境内の調査　第43次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成２年度』1991

DA第134次調査　発掘区全景（南から）

DA第134次調査　発掘区全景（北から）

16. 元興寺跡（西南行大房）・脇戸古墳・奈良町遺跡の調査　第72次

事 業 名　奈良市杉岡華郵書道美術館収蔵庫増築工事	調 査 期 間　平成25年7月8日～7月9日
届出者名　奈良市長	調 査 面 積　4.2㎡
調 査 地　脇戸町3番地	調査担当者　原田憲二郎

Ⅰ　はじめに

調査地は元興寺の伽藍復原では、西南行大房の南西部に相当する。西南行大房は、調査地から東方へ約50 m離れた市ＧＧ第38次調査で礎石とみられる遺構が、調査地北側に隣接する市ＧＧ第51次調査の北発掘区では基壇築成土とみられる版築遺構が確認されている。

また、本調査地から北西へ約30 m離れた市ＧＧ第39次調査や、調査地北側の市ＧＧ第51次調査と第53次調査では、古墳時代後期の円墳と推定される脇戸古墳の周濠が確認されている。本調査地も脇戸古墳の周濠想定地であることから、西南行大房に関する遺構の確認と、脇戸古墳周濠の確認を主目的として実施した。

Ⅱ　基本層序

発掘区内の層序は、美術館建築時の造成土（真砂土、厚さ約0.4 m）を除去すると、美術館建築前の整地土（黒褐色土、厚さ約0.55 m）、コンクリートブロックの擁壁設置時の整地土（淡黒褐色土、厚さ約0.2 m）と続き、地表下約1.2 mで、灰色粘土塊が部分的に入る濁黄褐色礫土となる。この層は擁壁設置時の撹乱部分を除き、発掘区全体に厚さ0.07 m程度堆積しており、市ＧＧ第51次調査北発掘区でも確認されている版築遺構の可能性も考えられるが、1層しか確認できていないい為、断定できない。濁黄褐色礫土の下で黄褐色礫土の地山となる。地山上面の標高は概ね87.4 mである。

Ⅲ　検出遺構

遺構検出は地山上面でおこなったが、遺構は無かった。

Ⅳ　出土遺物

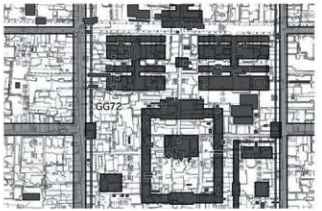
出土遺物は少なく、遺物整理箱で1箱分に満たない。

出土遺物には、奈良時代から平安時代にかけての須恵器甕・丸瓦・平瓦、江戸時代の土師器皿・国産陶器（信楽産擂鉢・備前産甕）・国産磁器（肥前産碗）・丸瓦・平瓦・軒丸瓦がある。なお、埴輪は出土しなかった。

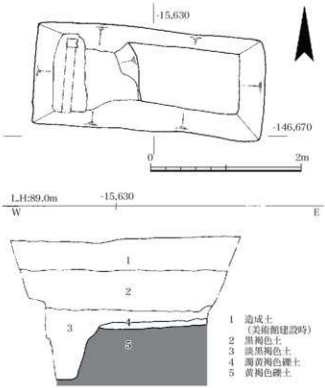
Ⅴ　調査所見

今回の調査地は脇戸古墳の周濠想定位置であるが、関連する遺構は無かった。後世の削平により失われた可能性も考えられるが、市ＧＧ第51調査北発掘区で確認されている脇戸古墳の溝底の標高は約87.2 mで、本調査地の地山の標高は約87.4 mと、本調査地の方が約0.2 m高いことから、削平を受けたとは考えにくい。さらには、本調査区東側に隣接する市ＧＧ第51次調査南発掘区も周濠想定位置で、地山の標高は約87.5 mであるが、周濠は確認されていない。このようなことから脇戸古墳は造り出しのある円墳あるいは前方後円墳の可能性も考慮に入れ、今後周辺の調査をおこなう必要がある。

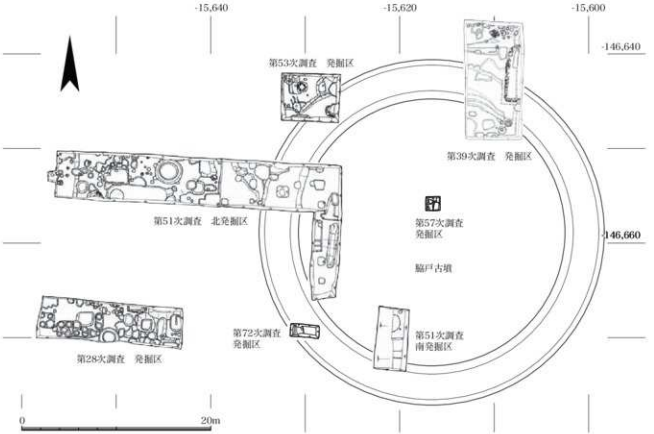
（原田憲二郎）



GG第72次調査　発掘区位置図（1/5,000）



GG第72次調査　遺構平面図・北壁土層図（1/50）



脇戸古墳と周辺の調査位置図（1/400）

GG 第 72 次調査　発掘区全景（東から）

GG 第 72 次調査　発掘区全景（南西から）

17. 西大寺跡（右京一条四坊九坪）の調査　第32次

事業名　中学校給食室建設事業	調査期間　平成25年7月22日～8月1日
届出者名　奈良市長	調査面積　105.6㎡
調査地　西大寺野神町一丁目6番1号	調査担当者　原田憲二郎

Ⅰ　はじめに

ＳＤ第32次調査地は平城京の条坊復原によれば、右京一条四坊九坪の北東隅に相当し、北側に一条北大路が、東側には東四坊坊間路が想定される。また九坪は西大寺の一画と考えられ、称徳陵兆域にも推定されている。

本調査地北側の右京一条北辺四坊六坪の調査（国118・151次）では、大型の建物遺構が確認され、これらは六坪と東隣の三坪の間にある園地とみられる池と一体で利用されたと推定され、古絵図の記載等からも、ここが称徳天皇の山荘であった可能性が考えられている。

また本調査地東側の伏見中学校内である右京一条四坊八坪内では、２箇所で発掘調査（市ＳＤ第１・６次）が行なわれたが、遺構は確認されていない。本調査では九坪内の様相把握を主目的として、発掘調査を実施した。

Ⅱ　基本層序

発掘区内の層序は、北辺では現地表面から約0.4ｍ、南辺では約0.1ｍの厚さの造成土を除去すると、灰白色粘土もしくは灰白色砂礫の地山となる。この上面で遺構検出を行った。検出面の標高は、91.3～91.6ｍである。

Ⅲ　検出遺構

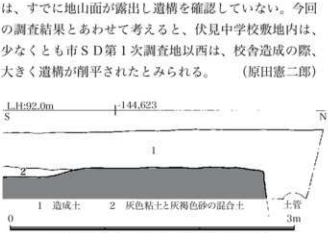
旧校舎の基礎や地下埋設管を確認したのみで、遺構は検出できなかった。

Ⅳ　出土遺物

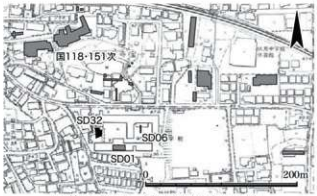
遺物は出土しなかった。

Ⅴ　調査所見

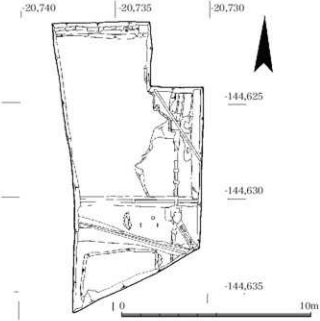
今回の調査地の東側約10ｍの市ＳＤ第１次調査地では、すでに地山面が露出し遺構を確認していない。今回の調査結果とあわせて考えると、伏見中学校敷地内は、少なくとも市ＳＤ第１次調査地以西は、校舎造成の際、大きく遺構が削平されたとみられる。　（原田憲二郎）



SD第32次調査　発掘区西壁土層図（1/40）



SD第32次調査　発掘区位置図（1/5,000）



SD第32次調査　遺構平面図（1/200）

SD第32次調査　発掘区全景（南から）

18. 南紀寺遺跡の調査　第６次

事 業 名　宅地造成	調 査 期 間　平成 25 年９月 24 日～ 10 月３日
届出者名　やまと不動産	調 査 面 積　140㎡
調 査 地　南紀寺二丁目 275 番１	調査担当者　松浦五輪美

Ⅰ　はじめに

調査地は、南紀寺遺跡の北西部にあたる。道路を挟んで北側では、平成 19 年度に発掘調査（市 MK 第５次調査[1]）を実施しており、古墳時代中期の掘立柱建物や土坑等を確認している。また、その東 100 m での調査（同第１・２次調査[2]）で確認された同時期の周濠区画は、豪族の居館跡の可能性が考えられている。これらのことから、周辺には古墳時代の遺構が広がっているとみられ、本調査地においてもその存在が予測された。

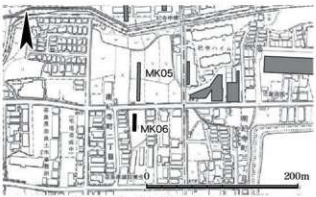
Ⅱ　基本層序

発掘区内は南北で状況が異なっており、北半は河川跡である。南半の基本土層は、黒色土（耕土）が厚さ 0.25 m前後、湯黄灰色土（床土）が 0.05 ～ 0.15 m、暗灰色土が 0.05 m前後堆積し、現地表下 0.3 ～ 0.4m で地山の暗橙色粘土となる。ただし、発掘区中央付近では床土直下で湯橙色礫層の地山となる。地山面の標高は約 95.5m である。

北半は暗灰色土以下が、紫灰色土 0.2 m前後、部分的に 0.2 m の暗灰色粘質土を挟み、暗灰色砂質粘土が 0.2 ～ 0.3 m堆積し灰色砂礫となる。灰色砂礫層は 0.8 m以上堆積し、拳大から人頭大の円礫の層で湧水が激しく掘削困難なため、下底部の確認には至らなかった。紫灰色土以外は河川堆積層であり、古墳時代の遺物を含む。

Ⅲ　検出遺構

検出した遺構は、土坑２基、柱穴とみられる掘方７つである。

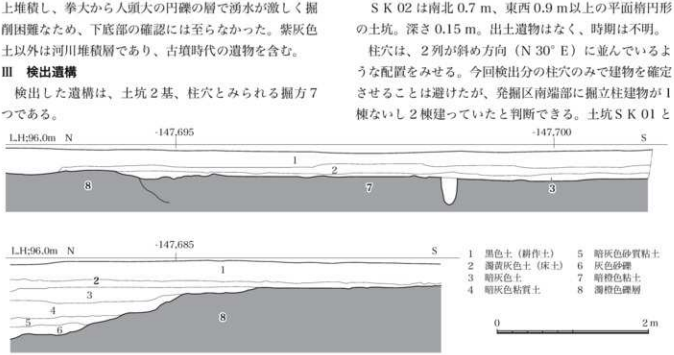


MK 第６次調査　発掘区位置図（1/5,000）

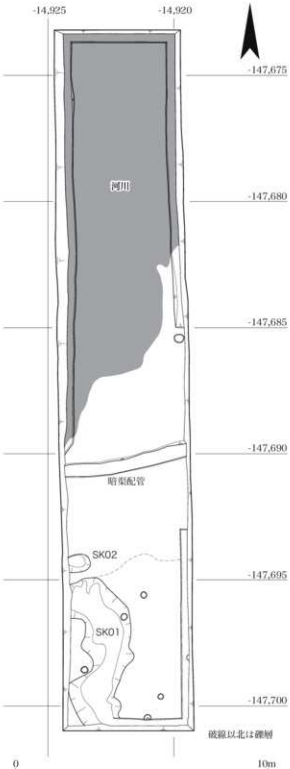
ＳＫ01 は、南北６m以上、東西 2.4 m以上で発掘区外南西に広がる平面楕円形状と考えられる土坑。深さは最深部で約 0.3 m であるが、土坑の縁沿いが深く、底面中央部は 0.1 m程度高い。このため土坑の底部に浅い溝が廻るような形状を呈している。この土坑内には人頭大から数cm大の大小様々な礫が含まれている。ただしそれらが特に人為的に配されたとは見られず、埋土とともに埋め込まれたものと判断できる。また一部には、下層の礫層が表出している部分もある。埋土には、古墳時代中頃の土器が含まれる。

ＳＫ02 は南北 0.7 m、東西 0.9 m以上の平面楕円形の土坑。深さ 0.15 m。出土遺物はなく、時期は不明。

柱穴は、２列が斜め方向（Ｎ 30°Ｅ）に並んでいるような配置をみせる。今回検出分の柱穴のみで建物を確定させることは避けたが、発掘区南端部に掘立柱建物が１棟ないし２棟建っていたと判断できる。土坑ＳＫ01 と



MK 第６次調査　発掘区東壁土層図（上が南端部、下が中央部　1/50）



MK 第６次調査　遺構平面図（1/150）

重なる柱穴は土坑より古く、土坑以前に建物が建っていたことが判る。埋土からの出土遺物はない。

この他、発掘区北半で北東から南西に流れていた河川跡を確認した。南東河岸部から幅約 10 m分を確認しており、第５次調査南端で北西肩を検出している溝が河岸の一部とするなら、幅 20 m程度の河川が現道路位置

MK 第６次調査　発掘区全景（南西から）

に流れていたことになる。出土遺物から、埋没した時期も古墳時代に収まると推測される。

Ⅳ　出土遺物

遺物整理箱で３箱分の土器類があり、大半が河川とＳＫ01からの出土である。時期は５世紀後半～６世紀末頃のもので、須恵器杯・杯蓋・器台・壺・甕、土師器椀・高杯・甕がある。また河川からは小片であるが製塩土器が20点ほど出土した。

Ⅴ　調査所見

今回の調査地で遺構が確認されたのは、発掘区南半部に集中しており、調査地のさらに南側に集落等が広がっていると考えられる。調査区南西隅にかかる土坑ＳＫ01内に礫が多数含まれていた状態から、より南部に第１・２次調査で検出された護岸貼石のような遺構が存在する可能性は否定できない。ただし、今回の調査範囲の礫だけでは判断できないが、より南部に礫を利用した遺構が存在したとしても、ＳＫ01の掘り込み内に礫が含まれていた状態は濠の斜面から礫が崩落した状態とは異なっていると考えられる。いずれにしても、調査地の南側に集落が広がると推定すると、第５次調査成果と併せ、河川を挟んだ両岸に古墳時代中頃の集落が営まれていた様相がうかがえる。　（松浦五輪美）

1）　奈良市埋蔵文化財調査センター「南紀寺遺跡の調査　第５次」『奈良市埋蔵文化財調査年報　平成 19（2007）年度』2010
2）　奈良市教育委員会「南紀寺遺跡の調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成２年度』1991
奈良市教育委員会「南紀寺遺跡の調査　第２次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成３年度』1992

19. 平城山第12号地点第3号須恵器窯跡の調査　第1次

事 業 名　宅地造成	調 査 期 間　平成25年4月18日～4月23日
届出者名　セキスイハイム近畿株式会社	調 査 面 積　20㎡
調 査 地　朱雀四丁目3－2	調査担当者　松浦五輪美　池田裕英

Ⅰ　はじめに

調査地は1964年度に行われた平城ニュータウン造成計画に伴う分布調査によって第12号地点と位置づけられ、1972年度の奈良国立文化財研究所の調査によって、瓦窯6基（歌姫西瓦窯）と須恵器窯2基（第12号地点1号窯・2号窯）が確認された場所に近接している[1]。

位置的には須恵器窯の存在する斜面と同一の斜面であり、南西に約20m、高低差約3m上方に位置している。

遺構は宅地造成に伴う切土作業中に発見した。炭層の広がりがみつかり、窯跡もしくは灰原の可能性があることから、急遽確認調査を行った。なお、本窯跡（灰原）を1972年度調査時の須恵器窯に次ぐ第3号窯と仮称しておく。

Ⅱ　基本層序

付近の斜面は灰黄色土（土層図Ⅰ）または明黄白色粘質土またはシルト（Ⅱ）からなる地山の直上を造成土（1）が覆っていた。造成土を除去すると部分的に斜面崩落土と思われる濁茶灰色土（2）、濁黄灰色土（3）が堆積している箇所があったが、須恵器片を含む灰原である黒灰色土（4）を検出した。発見された遺構もある程度削平された状態であった。黒灰色土の上面の標高は発掘区西端で68.4m、東端で66.8mである。

NY第1次調査　発掘区位置図（1/5,000）

Ⅲ　検出遺構

検出した遺構は須恵器窯の灰原である。

傾斜角約30°で西から東に下る斜面に、長さ（東西）約4.5m、最大幅（南北）約2.5mにわたって灰原が広がっていた。ただし、南および東西は削平されており、本来の範囲は不明である。特に西側、斜面の上方は窯本体が存在したはずであるが、既造成地となっている。

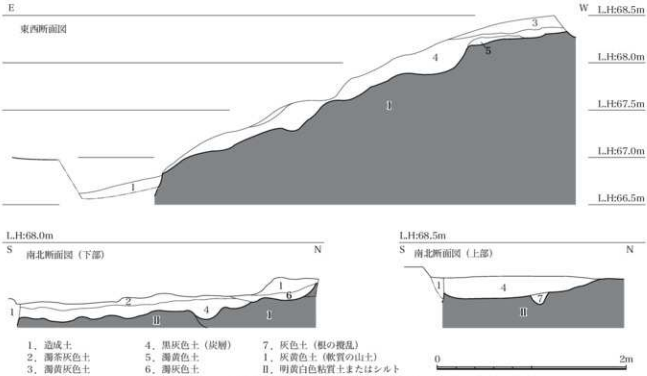
灰原の堆積状態は、最も厚いところで約0.3mであるが、概ね0.2mの厚さで残っていた。灰原は一回の操業分のみと判断され、本体の窯もしくは隣接の窯の灰原が重なっている状態は認められない。

底部の横断面は浅い皿状の窪地で、縦断面は上端1mほどが水平であり、そこから二段ほど低い階段状を呈しながら下る。底面には赤化や硬化等の直接熱を受けた状態は認められなかった。ただし、上半では底面が崩れやすい部分が認められた。

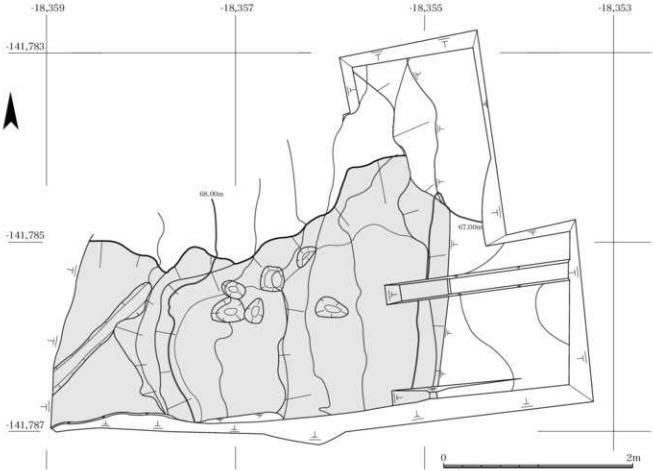
上端の水平面には長軸に斜行する幅約0.15mの溝状の窪みが残るが、意図的なものか木の根によるものかの判断はつかなかった。底面中央付近に認められる径0.2m前後の窪みは根の影響によるものと考えられる。

灰原には7世紀後半の須恵器が混じっており、熔着したものや、燃焼不足のものも認められる。出土した須恵器は杯蓋もしくは壺蓋が多く、甕や鉢などもある。特に上端の水平部分での出土が多く、この部分には窯体片も多く含まれていた。

奈良山第10・11・12号地点位置図（1/2,000）



NY 第 1 次調査　発掘区土層図（1/40）

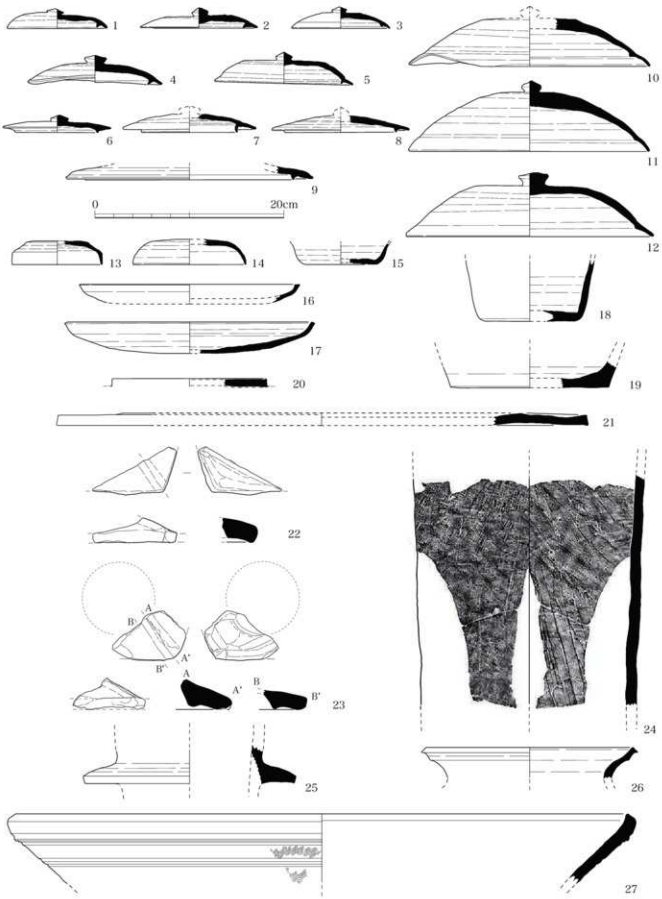


NY 第 1 次調査　遺構平面図（1/40）

NY 第 1 次調査　灰原検出状態（北から）

NY 第 1 次調査　発掘区全景（東から）

NY 第 1 次調査　発掘区全景（北から）



NY第1次調査　出土土器・土製品（1/4）

Ⅳ　出土遺物

整理コンテナ5箱分の須恵器片が出土した。

出土した須恵器の器種には蓋、杯、皿、鉢、壺、甕、円盤状土製品、塔形土製品がある。これらの中には、奈良国立文化財研究所が1972年に調査した奈良山第12号地点H地区出土の須恵器片と接合したものがある[2]。

杯蓋にはかえりのあるもの（1～12）とないもの（13・14）とがある。かえりのあるものは口径（最大径）により

Ⅰ：25.4～26.2cm（9～12）

Ⅱ：14.0～14.6cm（4・5・7・8）

Ⅲ：10.6～12.4cm（1～3・6）

と分けることができる。

全体の形と内面のかえりには関わりがあるようで、

a：笠形の形態で、かえりが口縁端部と同程度かそれよりも上で収まるもの（1～5）

b：器高が低く直線的な形態でかえりが垂直方向に下がって口縁部より下に出るもの（6～9）

c：口径が25cmを超え、器高が高く、かえりの突出の小さいもの（10～12）

の3種に分けることができる。

これらは杯や皿、椀、壺などの蓋と思われるが、どの器種に対応するかについては出土した土器からは特定することが困難である。

かえりのない13・14は頂部から口縁部にかけての形態、ロクロナデによる調整具合からみて時期的な問題はあるものの杯H蓋として報告しておく。ただし、13は1・3と、14は4・5と口径が見合うことから杯身として焼成された可能性は考えられる。15は箱形の形態から杯と考えておきたい。皿（16・17）は口縁端部を平坦につくる。17は底部外面にヘラケズリが施されている。18・19は鉢あるいは壺であろう。外面の調整は18がカキメ、19がロクロナデである。20・21は円盤状土製品としておく。20は硯の可能性も考えられる。外面はロクロナデである。21は蓋の可能性もあるが、端部、器表面の調整が蓋とは異なる。上面は不定方向のヘラケズリで下面は剥離のため不明である。22・23は塔形土製品である。類例が奈良山第11号地点E地区から出土している。22・23とも上面、下面ともナデにより調整し、上面に断面三角形の粘土帯を貼り付けて降棟を表している。赤褐色の焼き上がりである。23は内面中心部に円形を呈する凹みがみられ、この部分に円形の心材を組み合わせる構造であったとみられる。「利柱」としての塔の意味を有する小型の塔形土製品と位置づけられるものと考えられている[3]。24～27は甕である。24は外面を格子目タタキののちヘラケズリしている。内面は下半が斜め方向の、上半が縦方向のヘラケズリである。長胴の甕の体部片とみておきたい。25は鍔が付くもので、鍔の上面はロクロナデ、下面は不定方向のナデである。26は内外面ともロクロナデ。27は赤褐色の焼き上がりで、外面の沈線の間に波状文を施している。

出土した土器片の中には赤褐色の生焼けの状態のものもみられる。杯と甕とが熔着したものもあり、甕体部片の中には焼き台に利用されたものがあるようである。

杯H蓋としてよいか疑問の残るものや、器種が不明なものが多いが、これらの須恵器は7世紀後半に位置づけられるものであろう。

Ⅴ　調査所見

調査の結果、切土工事中に検出した灰層が須恵器窯の灰原であることを確認した。従って、本来窯本体がこのすぐ上方（西側）に存在していたといえる。検出した灰層は1層のみであった。出土した須恵器片の中には先述したように奈良国立文化財研究所による奈良山第12号地点H地区の発掘調査で出土した資料と接合したものがあり、灰原が北・東方向に更に広がっていたことが考えられる。

出土した土器には蓋、杯、皿や鉢、甕の他、塔形土製品や鍔付甕、器種は特定できないが円盤状土製品等やや特殊な土器が含まれることが特筆される点であろう。

奈良市内での時期の須恵器が出土している遺跡はこれまでほとんどみつかっておらず、飛鳥地域で出土している須恵器とも異なっているようである。そうすると、京都府側が候補地となるが、詳細なことは現状では不明とせざるを得ない。生産された須恵器がどこに供給されていたのかは今後の調査の進展を待ちたい。

8世紀に歌姫西瓦窯が営まれる以前からこの付近が須恵器の生産地として窯業の好適地として知られていたことがうかがえる。今回の発見は既知の窯跡以外にもさらに複数の窯が作られていた可能性を示唆するものといえ、今後も注意が必要となろう。　（池田裕英）

1）奈良県教育委員会『奈良山　平城ニュータウン予定地内遺跡調査概報』1973

2）独立行政法人　国立文化財機構　奈良文化財研究所　奈良文化財研究所学報第93冊『奈良山発掘調査報告　Ⅱ－歌姫西須恵器窯の調査』2014

3）2）文献所収　小田裕樹「3　塔形土製品について」

4）本報告にあたっては奈良文化財研究所　青木　敬、小田裕樹、金田明大、神野　恵の各氏から種々ご教示を頂いた。記して感謝致します。

20. 平成 25 年度実施　小規模調査・試掘等一覧

調査次数	遺跡名	調査地	調査期間	調査面積	事業者 / 事業内容	届出受理番号
2013-1	平城京跡（右京四条三坊十四坪）	平松一丁目 860-1 の一部	H25.6.5	30㎡	八洲エイジェント・一建設 / 宅地造成	H25.3069
	調査結果・措置：現地表下 0.05 ～ 1.15 m（標高 74.9 ～ 76.0 m）で地山上面を確認。15 世紀以降の土坑等を 2 基検出。地山上面は中世以降に大きく削平されていると考えられる。工事着手。					
2013-2	南紀寺遺跡	高畑町 71-1,76,77	H25.7.17	25㎡	（株）フォレストホーム / 宅地造成	H25.3135
	調査結果・措置：現地表下 1.8 m（標高 104.1 m）で河川堆積の砂礫層を確認。遺構・遺物包含層は確認できず。能登川の流路内と考えられる。工事着手。					
2013-3	平城京跡（左京二条七坊十六坪）・奈良町遺跡	今小路町 29-1	H25.9.5	30㎡	個人 / 老人福祉施設建設	H25.3486
	調査結果・措置：現地表下 1.2 m（標高 82.4 m）で江戸時代の遺構面を確認。幕末の土坑を検出し、さらに下層で平安時代後半の包含層を確認する。発掘調査を実施（HJ 第 672 次調査）。					
2013-4	遺物散布地（5A-027）	左京四丁目 7-3 の一部	H25.9.18	38㎡	（株）ケーエーエム / 有料老人ホーム	H25.3056
	調査結果・措置：現地表下 0.1 ～ 0.6 m（標高 48.7 m）で地山上面を確認。古墳時代の土器を含む溝を 1 条検出。周辺は大きく削平されている。工事着手。					
2013-5	平城京跡（左京九条四坊十四坪）	東九条町 162-1 他	H25.10.30 ～ 10.31	45㎡	（株）トライアルカンパニー / 店舗建設	H25.3291
	調査結果・措置：現地表下 1.3 m（標高 60.5 m）で弥生時代の包含層を確認。小柱穴・素掘溝などを検出。遺構面に影響が及ばないように基礎構造を変更して、工事着手。					
2013-6	元興寺旧境内・奈良町遺跡	西新屋町 40 番 1	H26.2.5 ～ 2.6	13㎡	個人 / 店舗付住宅	H25.3395
	調査結果・措置：現地表下 1.2 ～ 1.8 m（標高 85.1 ～ 85.8 m）で地山上面を確認。室町・江戸時代の土坑と包含層を確認。基礎掘削は地山まで及ばない。工事着手。					
2013-7	特別史跡・特別名勝 平城京左京三条二坊宮跡庭園	三条大路一丁目 5-37	H25.12.2 ～ 12.26	12㎡	奈良市長 / 保存整備事業	H25.1097
	調査結果・措置：庭園の池の礫敷きなどの遺構・遺構面の経年変化の状況の確認を行った。					
2013-8	土ノ口遺跡	雑之庄町 721 番地	H26.2.20 ～ 2.21	55㎡	（社福）大和清寿会 / 有料老人ホーム建設	H25.3428
	調査結果・措置：　5 箇所の発掘区を設定した。現地表下 0.2 ～ 0.3 m（標高 115.0 ～ 116.8 m）で地山上面を確認。結果、溝 1、柱穴 1、土坑 1 を確認し、さらに消滅されたと考えられていた古墳の墳丘が残存していることが判明。発掘調査を実施した。（土ノ口遺跡第 2 次調査）					

21. 平成 25 年度実施　踏査一覧

No.	踏査地	事業者	事業内容	事業面積	届出受理番号	調査期間	踏査所見
1	小倉町地内	株式会社クリーンエナジーマネジメント	太陽光発電事業	約 19,271㎡	H25.4001	H25.10.15	事業地内に遺構・遺物ともに認められず。工事着手。

22. 平成 25 年度実施　工事立会一覧

番号	届出受理番号	遺跡	届出地	届出者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
1	H24.3473	西大寺跡	西大寺南町 1-39	大阪ガス㈱ 導管事業部北東部導管部長　飯田良介	ガス管埋設・入替	道路	H25.4.1	GL-1.4 m まで掘削、既設管埋設土内
2	H24.3547	右京三条二坊一坪 西一坊大路	三条大路南五丁目 413-2	㈱吉川商事	擁壁工事	宅地	H25.4.10	GL-1.5 m まで掘削、GL-1.45 で地山確認
3	H24.3517	右京一条南大路	西大寺南町（区画整理事業地内 7 街区 3 画地）	個人	共同住宅新築	宅地	H25.4.10	GL-1.5 m まで掘削、GL-1.1 m で旧河川堆積土確認
4	H24.3518	右京四条三坊一坪 西二坊大路	尼辻西町 209 番 6	個人	共同住宅新築	宅地	H25.4.12	GL-0.12 m まで掘削、盛土内
5	H24.3407	左京二条七坊十二坪 二条大路、奈良町遺跡	油留木町 38 番	個人	個人住宅新築	宅地	H25.4.15	工事先行
6	H24.3478	南紀寺遺跡	南紀寺町四丁目 88-5 ～ 15	大阪ガス㈱ 導管事業部北東部導管部長　飯田良介	ガス管埋設	道路	H25.4.17	GL-1.0 m まで掘削、盛土内

番号	届出受理番号	遺跡	届出地	届出者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
7	H24.3408	右京二条二坊九坪	西大寺国見町一丁目 2137-71	南都地所㈱ 代表取締役 坂本安正	寄宿舎新築	宅地	H25.4.17	GL-0.8 m まで掘削、GL-0.65 m で遺物 (奈良時代) 包含層確認
8	H24.3553	右京七条四坊九坪	六条三丁目 1172-2	個人	個人住宅新築	宅地	H25.4.22	GL-0.38 m まで掘削、盛土内
9	H24.3475	元興寺跡 奈良町遺跡	西寺林町 28-6	個人	店舗兼個人住宅新築	宅地	H25.4.22	GL-0.3 m まで掘削、盛土内
10	H24.3500	右京五条四坊六坪	平松四丁目 396 番 20	個人	個人住宅新築	宅地	H25.4.22	GL-0.2 m まで掘削、底で地山確認
11	H24.3409	左京四条六坊十二坪 奈良町遺跡	南城戸町 69・70 番	個人	個人住宅新築	宅地	H25.4.22・23	西へ下る斜面地の東側は GL-0.5 m掘削、GL-0.35 m で暗褐灰色粘質土 (炭・焼土混) 確認 西側は東側掘削底-0.9 m まで掘削、東側掘削底-0.55 で 18 世紀以降の遺構面確認
12	H24.3399	左京五条七坊十五坪 奈良町遺跡	紀寺町 949-1 他	個人	賃貸住宅新築	宅地	H25.4.23	GL-0.35 ～ 0.65 m まで掘削、底で地山確認
13	H24.3520	右京北辺三坊五坪	西大寺北町三丁目 148 番 2	㈱岡宝　代表取締役会長　三岡敬子	共同住宅新築	宅地	H25.4.25	GL-0.35 m まで掘削、盛土内
14	H24.3541	南之庄山城跡 (南殿城) 遺物散布地 (奈良県遺跡地図 12B-0017)	都祁南之庄町 1002	個人	個人住宅新築	宅地	H25.4.26	GL-0.5 m まで掘削、GL-0.2 m で地山確認、 過去の宅地造成時に遺構面削平か
15	H24.1145	史跡大安寺旧境内 附石橋瓦窯跡	東九条町 1316	八幡神社	社務所の除却及び新築	神社境内	H25.5.1	GL-0.3 m まで掘削、黄灰色土内
16	H24.3524	右京五条三坊十坪 西三坊坊間西小路	平松二丁目 281 番 92	個人	個人住宅新築	宅地	H25.5.1	GL-0.3 m まで掘削、盛土内
17	H24.3479	南紀寺遺跡	南紀寺町二丁目 151-4 ～ 11	大阪ガス㈱ 導管事業部北東部導管部長　飯田良介	ガス管埋設	道路	H25.5.2	GL-0.7 m まで掘削、旧耕作土内
18	H24.3543	奈良町遺跡	高畑町 1272 番 1、1270 番 3	個人	個人住宅新築	宅地	H25.5.7	GL-0.45 m まで掘削、GL-0.3 m で地山確認
19	H25.3021	右京三条四坊十一坪 西四坊坊間路	宝来三丁目 12-4 ～ 四丁目 4	大阪ガス㈱ 導管事業部北東部導管部長　大塚達	ガス管埋設	道路	H25.5.13	GL-1.8 m まで掘削、GL-0.9 m で旧河川堆積土確認
20	H25.3015	左京三条六坊六坪 奈良町遺跡	高天町 32 番 1 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H25.5.14	GL-0.3 m まで掘削、表土内
21	H24.3528	左京一条南大路	東包永町 6 番 3	個人	個人住宅新築	宅地	H25.5.20	GL-0.35 m まで掘削、盛土内
22	H23.3398	左京五条六坊十一・十四坪 左京五条七坊三・六坪 奈良町遺跡	京終地方東側町 1 番地～田中町 633 番地	大阪ガス㈱ 導管事業部北東部導管部長　飯田良介	ガス管入替	道路	H25.5.20	GL-1.3 m まで掘削、GL-1.2 m で地山確認
23	H25.3010	右京四条四坊十五坪 西四坊坊間西小路	平松一丁目 746-11	㈱協栄ホーム 代表者　久保西竜成	分譲住宅新築	宅地	H25.5.21	GL-1.3 m まで掘削、盛土内
24	H25.3001	左京四条四坊十二坪	三条大宮町五丁目 231-1 ～ 3	大阪ガス㈱ 導管事業部北東部導管部長　飯田良介	ガス管埋設	道路	H25.5.23 H25.5.24	市道 :GL-0.7 m まで掘削、盛土内 県道 :GL-1.6 m まで掘削、GL-1.43 m で地山確認
25	H24.3255	左京四条五坊十四坪	杉ヶ町 53-1	個人	賃貸住宅新築	宅地	H25.5.29	GL-1.6 m まで掘削、GL-0.7 m で奈良時代遺構面 (弥生時代末～古墳時代初頃遺物包含層)、GL-1.0 m で地山確認
26	H24.3480	右京七条三坊三・六坪	七条一丁目 8-28-1 ～ 一丁目 8	大阪ガス㈱ 導管事業部北東部導管部長　飯田良介	ガス管埋設	道路	H25.5.30	GL-0.85 m まで掘削、GL-0.4 m で地山確認
27	H24.3501	左京六条四坊十六坪	大安寺五丁目 975-17	㈱アーバンネット 代表取締役 清水石信	分譲住宅新築	宅地	H25.5.31	GL-0.2 m まで掘削、盛土内
28	H25.3005	左京四条一坊七坪 東一坊坊間路	四条大路二丁目 892 番 3、891 番 4	個人	宅地造成・共同住宅新築	水田	H25.6.4	GL-1.8 m まで掘削、GL-1.25 m で奈良時代遺構面 (旧河川堆積土)、GL-1.4 m で地山確認、東一坊坊間路東側溝検出
29	H24.3534	西大寺跡	西大寺芝町一丁目 2485-2	個人	賃貸住宅新築	宅地	H25.6.5	GL-0.6 m まで掘削、盛土内
30	H25.3055	左京四条五坊十六坪 三条大路、奈良町遺跡	三条町 469-1 番地	㈱中西興業　代表取締役　中西守弘	店舗新築	宅地	H25.6.5	GL-0.8 m まで掘削、底で地山確認
31	H25.3018	左京三条一坊三坪 朱雀大路	三条大路三丁目 445-1	㈱タジマモーターコーポレーション 代表取締役 田嶋伸博	店舗新築	駐車場	H25.6.10	GL-0.6 m まで掘削、床土内
32	H24.1155	史跡大安寺旧境内 附石橋瓦窯跡	東九条町 1293-1	関西電力㈱　奈良営業所長　高瀬博美	電柱建替に伴う接地工事	農地	H25.6.10	GL-0.7 m まで掘削、盛土内
33	H25.3045	右京北辺四坊三坪	西大寺宝ヶ丘地内	奈良市水道事業管理者	水道管埋設	道路	H25.6.10	GL-0.65 m まで掘削、GL-0.15 m で地山確認
34	H24.3539	古市城跡	古市町 1846 番 54	個人	個人住宅新築	宅地	H25.6.10	GL-1.6 m まで掘削、GL-0.4 m で地山確認
35	H25.3057	左京三条五坊六坪 三条条間路	大宮町一丁目 37-14	パナホーム㈱　都市開発支社長　小林 敦	モデルルーム新築	宅地	H25.6.10	GL-0.75 m まで掘削、盛土内

番号	届出受理番号	遺跡	届出地	届出者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
36	H25.3008	左京四条五坊七・八坪 奈良町遺跡	三条本町地内	奈良市長	道路工事、表面整備・上屋設置等	道路 駅前広場	H25.6.14	GL−1.8 m まで掘削、西端では GL−0.9 ～ 1.3 m で地山。北端では−1.55 ～ 1.8 m で旧河川堆積土確認
37	H24.3450	左京五条東七坊大路 奈良町遺跡	東十輪院町 973-4 ～地蔵町 997-1	大阪ガス㈱ 導管事業部北東部導管部長　飯田良介	ガス管入替	道路	H25.6.14	GL−1.4 m まで掘削、盛土内
38	H25.3090	左京二条三坊十五坪	法華寺町 50−7・15・16	個人	個人住宅新築	宅地	H25.6.17	GL−1.25 m まで掘削、GL−1.15 で旧耕作土確認
39	H25.3083	西大寺跡	西大寺野神町一丁目 585 番 1 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H25.6.18	GL−0.3 m まで掘削、GL−0.25 で地山確認
40	H25.3082	左京二条五坊北郊	法通町 745 番 4 の一部	㈱ダイワ興産 代表取締役　喜多 理	分譲住宅新築	宅地	H25.6.18	GL−0.35 m まで掘削、盛土内
41	H24.3303	左京四条二坊九坪 田村第跡	四条大路一丁目 724 番 1、725 番 2	医療法人中野産婦人科理事長　中野昌芳	診療所新築	宅地	H25.6.27	GL−1.35 m まで掘削、GL−1.15 で旧耕作土確認
42	H24.3558	奈良町遺跡	高畑町 824 番地	個人	宅地造成・下水道工事	荒蕪地 宅地	H25.7.1	GL−1.6 m まで掘削、造成土・既設管掘形内
43	H25.3111	吉市城跡	吉市町 2139−32	個人	個人住宅新築	宅地	H25.7.3	GL−0.4 m まで掘削、北東角 GL−0.3 で地山確認、他は盛土内
44	H25.3038	奈良町遺跡	北御門町 1−1	一建設㈱奈良営業所代表取締役　堀口忠美	分譲住宅新築	宅地	H25.7.3	GL−0.35 m まで掘削、盛土内
45	H25.3049	西大寺跡	西大寺芝町一丁目 2519 番 6 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H25.7.4	工事先行
46	H24.3438	左京二条七坊十三坪 奈良町遺跡	南半田東町 20	㈱魚元わかさ旅館 代表取締役　下谷幸司	旅館新築	駐車場	H25.7.5	GL−2.4 m まで掘削、GL−1.3 ～ 1.5 m で北部では旧河川堆積土、中部以南では地山確認
47	H25.3033	左京六条四坊十四坪 六条条間路、鳥山古墳	大安寺一丁目 1170−2	奈交自動車整備㈱ 取締役社長　俞谷裕規	事務所新築	駐車場	H25.7.8	GL−0.25 m まで掘削、盛土内
48	H25.3041	左京五条四坊十六坪	大森町 130−2 他（区画整理事業地内 27 街区 1 ～ 4 画地）	個人	店舗新築	宅地	H25.7.8	GL−2.4 m まで掘削、GL−1.4 m で奈良時代遺構面（地山）確認
49	H24.3522	左京三条四坊十四坪 三条条間路	大宮町二丁目 127−30	個人	共同住宅新築	宅地	H25.7.9	GL−2.2 m まで掘削、柱状炎良工事時の視風により、地山検出深度確認できず
50	H25.3069	右京四条三坊十四坪	平松一丁目 860−1 の一部	㈱八画エイジェント 代表取締役　河合　浩 一建設㈱ 代表取締役　堀口忠美	宅地造成	宅地	H25.7.10	GL−0.3 ～ 1.75 m まで掘削、GL−0.05 ～ 1.6 m で地山確認、地山上面で中世以降の遺構検出
51	H25.3099	左京四条六坊七坪 奈良町遺跡	寺町 4−1	学校法人伝香寺学園 理事長　西山明彦	幼稚園新築	宅地	H25.7.11	GL−1.5 m まで掘削、GL−0.6 m で旧河川堆積土・地山確認
52	H25.3075	右京三条四坊十三坪	宝来四丁目 682・683 番	個人	個人住宅新築	宅地	H25.7.16	GL−0.25 m まで掘削、掘削底で祭地土・地山確認、地山上面で小穴検出
53	H25.3047	元興寺跡（重点地区） 奈良町遺跡	薬師堂町 16	個人	個人住宅新築	宅地	H25.7.16	GL−0.25 m まで掘削、盛土あるいは茶褐色土内
54	H25.3104	右京五条四坊五坪	五条三丁目 868 番 17	個人	個人住宅新築	宅地	H25.7.16	GL−0.3 m まで掘削、盛土内
55	H25.3152	右京北辺三坊三坪	西大寺本町 267 番 1・5、269 番 3・4、270 番 3・4	㈱セブン−イレブン・ジャパン 代表取締役　井原隆一	店舗新築	駐車場	H25.7.19	GL−0.9 m まで掘削、盛土内
56	H25.3153	元興寺跡 奈良町遺跡	染地之内町 27−1	個人	個人住宅新築	宅地	H25.7.23	GL−0.25 m まで掘削、盛土内
57	H25.3053	右京二条三坊十三坪	菅原町 297−1 ～ 262−7	大阪ガス㈱ 導管事業部北東部導管部長　大塚達	ガス管入替	道路	H25.7.23	GL−1.7 m まで掘削、GL−0.9 m で地山（奈良時代遺構面）確認
58	H24.3455	菅原寺跡（喜光寺跡）	菅原町 516-1 ～ 3	喜光寺 代表役員　山田法胤	行基堂新築	境内地	H25.7.24	GL−0.8 m まで掘削、灰色砂・黄灰色粘土混合土（池堆立土か旧河川堆積土）内
59	H25.3060	右京四条三坊十六坪	宝来二丁目 131 番 1	個人	賃貸住宅新築	宅地	H25.7.26	GL−0.5 m まで掘削、盛土内
60	H25.3068	右京二条三坊二坪	西大寺南町 2119−1 他（区画整理事業地内 17 街区画）	㈱ショーワ薬局 代表取締役　吉川惠司	クリニック（薬局・医院）ビル新築	宅地	H25.7.29	GL−2.0 m まで掘削、GL−1.85 で旧河川堆積土確認
61	H25.1027	史跡大安寺旧境内附石橋尼墓跡	大安寺一丁目 1242−1 他	奈良市長	幼稚園舎の耐震補強工事	幼稚園	H25.7.30	GL−0.12 m まで掘削、盛土内
62	H25.3112	左京五条二坊十三坪	大安寺西一丁目 341 番 8	㈱福岡屋建設工業 代表取締役　入澤邦雄	分譲住宅新築	宅地	H25.7.30	GL−1.6 m まで掘削、GL−1.4 m で地山確認
63	H25.3054	右京四条一坊十五坪	四条大路五丁目 2 番 55 号	奈良市長	配管工事	幼稚園	H25.8.2	GL−1.05 m まで掘削、灰色シルト質粘土内
64	H25.3100	左京九条二坊二・七坪	西九条町四丁目 2-3 ～三丁目 4-13	大阪ガス㈱ 導管事業部北東部導管部長　大塚達	ガス管移設	道路	H25.8.2	GL−2.05 m まで掘削、GL−1.4 m で旧河川堆積土、GL−1.55 で地山確認
65	H25.3144	右京四条三坊十二坪	平松一丁目 78 番 7	個人	個人住宅新築	宅地	H25.8.2	GL−0.3 m まで掘削、盛土内
66	H25.3093	右京四坊一条南大路	若草台三丁目 1901−10	個人	個人住宅新築	宅地	H25.8.5	GL−0.3 m まで掘削、掘削底で地山確認

番号	届出受理番号	遺跡	届出地	届出者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
67	H24.3552	左京九条二坊五坪九条大路	西九条町四丁目 2-2～大和郡山市内	大阪ガス㈱ 導管事業部北東部導管部長　飯田良介	ガス管埋設	道路	H25.8.6	GL-2.2 m まで掘削、GL-1.15 m で地山確認
68	H25.3110	左京六条一坊十六坪東一坊大路	柏木町 468-1 他	㈱カミング 代表取締役　松島正昭	店舗新築	宅地	H25.8.6	GL-2.15 m まで掘削、GL-1.8 m で旧耕作土確認、灰色粘土内
69	H25.3159	右京三条四坊十坪	菅原町 650	大阪ガス㈱ 導管事業部北東部導管部長　大塚達	ガス管埋設	道路	H25.8.7	GL-2.65 m まで掘削、既設管掘形内
70	H25.3023	左京八条四坊五坪八条大路	東九条町 634	大阪ガス㈱ 導管事業部北東部導管部長　大塚達	ガス管埋設	道路	H25.8.7	GL-2.3 m まで掘削、土層確認できず
71	H25.3116	左京三条四坊十四坪	大宮町二丁目 127-35	個人	個人住宅新築	宅地	H25.8.9	GL-1.4 m まで掘削、GL-0.45 m で地山確認
72	H25.3089	右京北辺三坊八坪	西大寺北町二丁目 450-5	個人	個人住宅新築	宅地	H25.8.12	GL-0.35 m まで掘削、盛土内
73	H25.3188	右京二条三坊十四坪	青野町 111-13	㈱栗美住宅 代表取締役　古川好男	分譲住宅新築	宅地	H25.8.12	GL-0.4 m まで掘削、灰色シルト内
74	H25.3102	左京七坊一条南大路奈良町遺跡	東包永町 33～62	大阪ガス㈱ 導管事業部北東部導管部長　大塚達	ガス供給管引込	道路	H25.8.16	GL-1.3 m まで掘削、GL-1.2 m で地山確認
75	H25.3122	右京北辺四坊二坪	西大寺宝ヶ丘地 645 番 3	個人	個人住宅新築	宅地	H25.8.19	GL-1.25 m まで掘削、GL-0.7 m で地山確認
76	H25.3137	左京二条四坊七坪東四坊坊間路	法蓮町地内	奈良市水道事業管理者	水道管埋設	道路	H25.8.21	GL-0.65～1.1 m まで掘削、GL-0.45 m で地山確認
77	H25.3140	左京二条三坊六坪	法華寺町 201-1・5・7 の各一部	個人	共同住宅新築	宅地	H25.8.23	GL-1.1 m まで掘削、GL-1.0 m で旧耕作土確認
78	H25.3190	右京五条四坊九坪	平松五丁目 560 番 28	個人	個人住宅新築	宅地	H25.8.23	GL-0.35 m まで掘削、GL-0.25 m で地山確認
79	H25.3118	左京七坊南一条大路奈良町遺跡	東包永町 6	大阪ガス㈱ 導管事業部北東部導管部長　大塚達	ガス供給管引込	道路 宅地	H25.8.26	道路：GL-1.4 m まで掘削、既設管掘形内　宅地：GL-0.75 m まで掘削、暗褐色土内
80	H25.3150	右京北辺四坊五坪	西大寺赤田町一丁目 4-25	大阪ガス㈱　導管事業部北東部導管部長　大塚達	ガス管入替	道路 宅地	H25.8.27	GL-1.6 m まで掘削、GL-0.6 m で地山確認
81	H24.3461	新薬師寺	高畑町	国立大学法人 奈良教育大学 学長　長友恒人	高圧ケーブル敷設	学校用地	H25.8.28	GL-1.2 m まで掘削、既設管掘形内
							H25.8.29	GL-0.8 m まで掘削、撹乱土内
							H25.9.3	GL-0.9 m まで掘削、撹乱土内
82	H25.3160	西大寺跡	西大寺新田町 1-10～3（525）	大阪ガス㈱ 導管事業部北東部導管部長　大塚達	ガス管埋設	宅地	H25.8.30	GL-1.1 m まで掘削、GL-0.8 m で旧耕作土確認
83	H25.3151	奈良町遺跡	高畑町 664 番 1・2	個人	個人住宅新築	宅地	H25.9.3	GL-0.45 m まで掘削、茶灰色土内
84	H24.3201	左京五坊二条大路	芝辻町一丁目～法蓮町地内	奈良市下水道管理者 奈良市長	下水道敷設	道路	H25.9.3	GL-10.0 m まで掘削のところ GL-3.4 m で立会、土層確認できず、深くとも GL-1.5 m で地山確認
85	H25.3142	右京一条二坊三坪	二条町二丁目 2-24～3-26	大阪ガス㈱ 導管事業部北東部導管部長　大塚達	ガス管新設	道路	H25.9.3	GL-0.8 m まで掘削、GL-0.1 m で旧耕作土・GL-0.4 m で地山確認
86	H25.3120	左京五条七坊六坪奈良町遺跡	築地之内町 13、井上町 3-6、5-4	個人	賃貸住宅新築	宅地	H25.9.3	GL-0.7 m まで掘削、盛土内
87	H25.3158	左京二条三坊五坪	法華寺町 155-1 他	㈱新学会 代表役員　正本正明	駐車場整備	宅地	H25.9.5	GL-1.35 m まで掘削、盛土内
88	H25.3032	左京四条六坊大路奈良町遺跡	餅飯殿町 9 番地	個人	個人住宅新築	宅地	H25.9.5	北側道路面-0.2 m まで掘削、茶黄色粘質土内
89	H25.3213	右京七条四坊十六坪	六条西四丁目 1402-61	個人	個人住宅新築	宅地	H25.9.9	GL-0.3 m まで掘削、盛土内
90	H24.3511	左京二条六坊北郊	法蓮町 1255 番 16	個人	個人住宅新築	宅地	H25.9.10	GL-0.2 m まで掘削、盛土内
91	H25.3183	左京四条五坊十二坪	杉ヶ町 16-3・9	個人	共同住宅新築	宅地	H25.9.10	GL-0.6 m まで掘削、底で旧耕作土確認
92	H25.3080	左京三条四坊三坪三条条間路	大宮町三丁目 208 番 5	㈱咲かす農園 代表取締役　杉本信雄	店舗付共同住宅	宅地	H25.9.11	GL-1.0 m まで掘削、GL-0.75 m で旧耕作土・GL-0.95 m で旧河川堆積土確認
							H25.9.12	GL-0.8 m まで掘削、GL-0.65 で旧耕作土確認、淡灰色粘砂土内
93	H25.3201	左京三条妻六坊五坪奈良町遺跡	上三条町 22-7	京阪電鉄不動産㈱ 代表取締役　三浦達也	モデルルーム新築	宅地	H25.9.12	エレベーターピット：GL-1.3 m まで掘削、茶褐黄色礫土内、旧建物部分は底以下まで撹乱 その他：GL-0.8 m まで掘削、GL-0.35 m で鎌倉時代の遺構面（黄茶灰色砂質シルト）確認
94	H24.3550	興福寺跡 奈良町遺跡	中筋町 13-2、15-1	個人	診療所兼住宅新築	宅地	H25.9.13	GL-0.8 m まで掘削、盛土内
95	H25.3211	左京五条七坊十一坪紀寺跡、奈良町遺跡	西紀寺町 35-1	個人	個人住宅新築	宅地	H25.9.19	GL-0.5 m まで掘削、茶灰色粘質土内

番号	届出受理番号	遺跡	届出地	届出者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
96	H25.3189	右京七条四坊十一坪	七条西町一丁目 627 番 178	ファースト住建㈱ 東大阪支店 代表取締役　中島雄司	分譲住宅新築	宅地	H25.9.25	GL-0.45 ～ 0.95 m まで掘削、盛土内
97	H25.3205	右京四条一坊十四坪	四条大路五丁目 1036-4	㈱栗実住宅 代表取締役　古川好男	宅地造成	宅地	H25.9.26	西側道路面-0.9 m まで掘削、GL-0.65 m で奈良時代遺構面（地山）確認
							H25.10.8	旧耕作土上面-0.7 m まで掘削、-0.5 m で奈良時代遺構面（地山）確認、西一坊坊間路東（？）側溝検出
98	H25.3091	池田遺跡	池田町 178-5	㈱ナカガワ 代表取締役社長 中川基成	事務所増築	宅地	H25.9.26	GL-1.15 m まで掘削、GL-0.4 m で旧耕作土・GL-0.7 m で灰茶色粘土・GL-0.85 m で黄灰色粘土の地山（古墳時代遺構面）確認
							H25.9.27	
99	H25.3303	右京六条四坊十一坪	六条二丁目 1125-5	個人	個人住宅新築	宅地	H25.10.3	工事先行：GL-0.5 m ? まで掘削、盛土内
100	H25.3218	右京三条二坊六坪	尼辻北町 3290 番 1・2 の各一部	㈲ウエムラ 代表取締役　上村正之	宅地造成	宅地	H25.10.4	新設道路面-1.53 m まで掘削、GL-0.7 m で旧河川堆積土確認
101	H25.3191	新薬師寺	高畑町 234-1、345-2 の一部	奈良市道路管理者 奈良市長	通学路整備工事	学校用地	H25.10.7	道路面-0.75 m まで掘削、GL-0.5 m で地山確認
							H25.10.11	道路面-0.75 m まで掘削、道路-0.5 m で地山確認
102	H25.3222	左京七条四坊十六坪 六条大路	東九条町 1448 番 1	㈲京西ハッピーサービス 代表取締役　川西弘泰	デイサービス寄宿舎新築	宅地	H25.10.9	GL-1.1 m まで掘削、底で旧耕作土確認
103	H25.3219	左京四条四坊八坪	三条添川町 96-1、97-5	個人	診療所付住宅新築	宅地	H25.10.10	GL-0.8 m まで掘削、底で旧河川堆積土確認
104	H25.1066	名勝円成寺庭園	忍辱山町 1273 番地-1	円成寺 代表役員　田端祐弘	収蔵庫新築	境内地	H25.10.12	高さ 1.6 m の屋面を 0.7 m 後退、盛土内
105	H25.3162	左京五条一坊二坪	柏木町 51-1	㈱あかしや代表取締役社長 水谷 豊	倉庫兼事務所新築	宅地	H25.10.15	GL-1.3 m まで掘削、GL-1.2 m で旧耕作土確認
106	H25.3242	左京三条六坊八坪 奈良町遺跡	高天市町 25 番地、26-3 番地	個人	個人住宅新築	宅地	H25.10.21	GL-0.75 m まで掘削、暗灰色土（近世以降の遺物包含層）内
107	H25.3269	古市城跡	古市町 2381-1	個人	個人住宅新築	畑地	H25.10.22	GL-1.4 m まで掘削、GL-0.55 ～ 0.7 m で地山確認
108	H25.1075	史跡春日大社境内	春日野町 160 番 1	春日大社 宮司　花山院弘匡	コンテナハウスの設置	境内地	H25.10.24	掘削なし
109	H25.3286	左京四条六坊十二坪 奈良町遺跡	南城戸町 60 番 1・2	個人	個人住宅新築	宅地	H25.10.24	GL-1.8 m まで掘削、盛土内
110	H25.3279	左京四条六坊五坪 奈良町遺跡	南魚屋町 10	個人	賃貸住宅新築	宅地	H25.10.24	GL-2.0 m まで掘削、GL-1.1 m で旧河川堆積土（弥生時代？遺構面）確認
111	H25.3061	左京三条六坊十坪 奈良町遺跡	中筋町 37	個人	賃貸住宅新築	宅地	H25.10.25	GL-0.65 m まで掘削、底で茶褐色土（室町時代遺物包含層）確認
112	H25.3239	左京四条五坊十四坪 奈良町遺跡	杉ヶ町 55 ～杉ヶ町内	大阪ガス㈱ 導管事業部北東部導管部長　大塚遠	ガス管新設	道路	H25.10.28	GL-1.45 m まで掘削、GL-0.75 m で旧耕作土、GL-1.15 m で旧河川堆積土確認
113	H25.3333	遺物散布地	都祁南之庄町 1432 番 5	㈱アライの森 代表取締役　新井賢士	ソーラーパネル設置	宅地	H25.10.28	GL-0.5 m まで掘削、GL-0.1 m で地山確認
114	H25.3251	右京二条三坊十四坪	青野町 111-12	㈱栗実住宅 代表取締役　古川好男	分譲住宅新築	宅地	H25.10.30	GL-0.4 m まで掘削、底で地山確認
115	H25.3226	新薬師寺隣接地	高畑町	国立大学法人 奈良教育大学 学長　長友恒人	図書館増築	学校用地	H25.10.30 H25.10.31 H25.11.5 ～7	GL-5.5 m まで掘削、GL-3.5 m で地山確認
116	H25.3171	右京四条四坊八坪	宝来三丁目 196 番 1	個人	宅地造成	畑地	H25.10.31	GL-1.3 m まで掘削、GL-0.8 m で地山確認
117	H24.3561	左京三条六坊二坪	高天市町 87	㈱ミューズ木本 代表取締役　木本幸造	共同住宅新築	宅地	H25.11.5	GL-2.0 m まで掘削、GL-1.3 m で地山確認
118	H25.3167	鹿野園石器散布地	白毫寺町 944 番 1 他 13 筆	㈱西井商店 代表取締役　西井康博	太陽光発電設備設置	雑種地	H25.11.5	GL-0.6 m まで掘削、盛土内
119	H25.3249	左京四条四坊十三坪	三条木町 1112 番	個人	汚染土壌入替	宅地	H25.11.5	GL-3.1 m まで掘削、GL-2.2 m で地山確認
120	H25.3066	右京四条一坊十四坪 西一坊大路	四条大路五丁目 96 番 2、97 番の一部、100 番 1・2、1059 番の一部	㈲ホリウチ 代表取締役　堀内鎮治	デイサービスセンター新築	宅地	H25.11.5	GL-1.5 m まで掘削、盛土内
121	H25.3273	右京五条三坊六坪	五条二丁目 601 番 51	個人	個人住宅新築	宅地	H25.11.6	GL-0.3 m まで掘削、盛土内
122	H24.3345	秋篠古墳群	山陵町 649-1・649-3 の各一部	個人	個人住宅新築	宅地	H25.11.7	GL-0.35 m まで掘削、GL-0.3 m で地山確認
123	H25.3050	左京三条六坊十一・十二坪 奈良町遺跡	小西町 25-1 他 林小路町 1-6 他	京阪電鉄不動産㈱ 代表取締役　三浦達也	共同住宅新築	宅地	H25.11.7	GL-3.9 m まで掘削、GL-3.6 m で地山確認

番号	届出受理番号	遺跡	届出地	届出者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
124	H25.3235	左京一条東二坊大路	法華寺町 1211-1～1217-5	大阪ガス㈱ 導管事業部北東部導管部長　大塚　達	ガス管移設	道路	H25.11.7	GL-1.25 m まで掘削、GL-1.15 m で地山確認
125	H25.3331	二条条間路 西三坊大路	青野町 117	個人	擁壁新設	畑地	H25.11.8	GL-2.5 m まで掘削、GL-0.7 m で地山確認
126	H25.3260	矢田原遺跡	矢田原町 769 番 1、770 番 1、771 番	個人	個人住宅新築	宅地 水田	H25.11.12	GL-0.5 m まで掘削、盛土内
127	H25.3170	左京五条三坊八坪 四条大路	恋の窪一丁目 2-2	市民生活協同組合ならコープ 理事長　森　宏之	事務所新築	宅地	H25.11.13	GL-1.45 m まで掘削、盛土内
128	H25.3202	左京四条五坊七坪 東五坊坊間路	三条町 606-72	個人	共同住宅新築	宅地	H25.11.13	GL-1.2 m まで掘削、GL-0.6 m で旧河川堆積土確認
129	H25.3056	遺物散布地	左京四丁目 7-3 の一部	㈱ケーエーエム	有料老人ホーム新築	原野	H25.11.15～26	GL-1.4～1.55 m まで掘削、GL-0.25～0.3 m で地山確認
130	H25.3250	左京二条七坊四坪 奈良町遺跡 奈良奉行所跡	鍋屋町 6、8-4	㈱久保 代表取締役　阪本武男	工場新築	宅地	H25.11.18	GL-0.3 m まで掘削、盛土内
131	H25.3234	西大寺跡	若葉台三丁目 188 番 5	個人	個人住宅新築	宅地	H25.11.19	GL-0.25 m まで掘削、盛土内
132	H25.3261	左京五条五坊五坪 五坊大路	西木辻町 191 番 3	森田殖産㈱ 代表取締役　森田規子	共同住宅新築	宅地	H25.11.22	GL-0.7 m まで掘削、盛土内
133	H25.1080	史跡大安寺旧境内 附石橋瓦窯跡	大安寺二丁目 1303-19	関西電力㈱　奈良営業所長　佐々木　裕	危険電柱の建替え	道路	H25.11.25	GL-3.0 m まで掘削、GL-0.8 m で凝灰岩粉滑層、GL-1.15 m 以下まで灰色粘土質砂が続く
134	H25.3048	左京三条五坊十四坪 奈良町遺跡	油阪町 439-1・6	個人	駐車場造成	駐車場	H25.11.26	中央部：GL-0.7 m まで掘削、GL-0.6 m で地山確認
135	H25.1097	特別史跡・特別名勝 平城京左京三条二坊 宮跡庭園	三条大路一丁目	奈良市長	地下水調査	庭園	H25.11.29	GL-0.4～0.55 m まで掘削、概ね GL-0.5 m で茶褐色粘土（遺構面）確認
					基準点の設置		H25.12.2	GL-0.5 m まで掘削、盛土内
136	H25.3217	左京四条一坊十六坪	四条大路二丁目 824-3、825-1 の一部	個人	共同住宅新築	駐車場	H25.12.2	GL-1.45 m まで掘削、GL-1.2 m で旧耕作土確認、底面が床土上面
137	H25.3429	左京一条四坊十一坪	法蓮町 620	㈱アイ・エスコーポレーション	宅地造成	宅地	H25.12.2	基礎抜き時、GL-1.3 m で地山確認
138	H25.3323	右京八条三坊八坪	七条一条 523 番 2・6	個人	個人住宅新築	宅地	H25.12.5	設計 GL-0.95 m まで掘削、盛土内
139	H25.3272	左京三条五坊十二・十三坪 奈良町遺跡	油坂地方町 1-1 他	新星和不動産㈱ 代表取締役　佐藤　卓	共同住宅新築	宅地	H25.12.6	南辺：GL-2.5 m まで掘削、盛土内 北部：GL-2.5 m まで掘削、地理土内 中央東：GL-2.1 m まで掘削、底面で地山検出 中央西：GL-2.7 m まで掘削、GL-2.2 m で地山確認
140	H25.3374	左京八条四坊十・十一坪	東九条町 655-2 他	個人	個人住宅新築	水田	H25.12.9	GL-1.7 m まで掘削、GL-0.8 m で遺構面（地山上面）確認
141	H25.3228	右京北辺三坊八坪	西大寺北町二丁目 1-13	大阪ガス㈱ 導管事業部北東部導管部長　大塚　達	ガス供給管引込	道路 宅地	H25.12.10	道路：GL-1.5 m まで掘削、盛土内 宅地：GL-1.3 m まで掘削、GL-1.1 m で地山確認
142	H25.3004	右京七条一坊十坪	六条町 78、79、85、86・93-合併	医療法人　康仁会 理事長　高比康臣	介護老人保健施設増築	水田	H25.12.10	GL-1.3 m まで掘削、GL-1.1 m で遺構面（地山上面）確認
143	H25.3327	左京五条一坊六坪	柏木町 63 番 1	個人	資材置場造成	水田	H25.12.11	GL-1.6 m まで掘削、GL-1.0 m で遺構面（灰黄色粘質土）確認
144	H25.1078	史跡大安寺旧境内 附石橋瓦窯跡	大安寺二丁目 1309-2	奈良市長	旧校舎解体およびバンビーホーム新築工事	学校用地	H25.12.16～H26.1.24、2.21・24	発掘調査（ＤＡ第 133 次調査）として報告
145	H25.3309	左京一条四坊七坪	法蓮町 1953-2	個人	個人住宅新築	宅地	H25.12.19	GL-0.45 m まで掘削、北～東辺では GL-0.15 m で、南辺は GL-0.2 m で地山確認
146	H25.3337	三条大路左京四条五坊四坪、奈良町遺跡	三条町 500 地先	西日本電信電話㈱ 奈良支店 支店長　高木康弘	電話地下管路設備工事、電柱新設工事	道路	H25.12.21	GL-0.9 m まで掘削、盛土内
			三条本町 1-15 地先				H26.1.20～21	GL-2.0 m まで掘削、盛土内
147	H25.3310	古市遺跡	古市町 1507-9、1508-20	㈱イーストホーム　代表取締役　福垣多喜穂	分譲住宅新築	宅地	H25.12.24	GL-0.5 m まで掘削、盛土内
148	H25.3095	右京四条二坊十六坪	尼辻中町 146-3	近畿日本鉄道㈱ 鉄道事業本部大阪輸送統括部長　三輪　隆	駅舎建替・バリアフリー化工事	駅舎	H25.12.26	GL-1.3 m まで掘削、GL-0.15 m で地山確認
							H26.1.14	GL-1.4 m まで掘削、GL-0.9 m で地山確認
149	H25.3256	左京一条四坊十四坪	法蓮町 645-2	個人	個人住宅増築	宅地	H25.12.27	GL-0.3 m まで掘削、底面で地山確認
150	H25.3342	右京五条三坊十六坪 四条大路	平松二丁目 221 番 6	ファースト住建㈱東大阪支店 代表取締役　中島雄司	分譲住宅新築	宅地	H26.1.6	GL-0.25 m まで掘削、盛土内
151	H25.3371	奈良町遺跡	高畑町 1417 番	個人	個人住宅新築	宅地	H26.1.6	GL-0.9 m まで掘削、GL-0.2 m で地山確認

番号	届出受理番号	遺跡	届出地	届出者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
152	H25.3360	右京二条三坊四坪 菅原東遺跡	近鉄西大寺駅南土地区画整理事業施工地区 41 街区 4 画地	個人	賃貸住宅新築	宅地	H26.1.7	GL-0.5 m まで掘削、盛土内
153	H25.3338	右京四条三坊十坪	平松一丁目 1 ～宝来二丁目 5-9	大阪ガス㈱ 導管事業部北東部導管部長　大塚　達	ガス管埋設	道路	H26.1.14	GL-1.8 m まで掘削、GL-0.8 m で地山確認
154	H25.3334	左京三条四坊十五坪	大宮町五丁目 134-6、135-6・8	個人	共同住宅新築	宅地	H26.1.16	GL-1.35 m まで掘削、GL-0.7 m で遺構面（地山上面）確認
155	H25.1128	史跡大安寺旧境内 附石橋瓦窯	東九条町 1325-12、1317	関西電力㈱　所長 佐々木　裕	不要電柱・支線の撤去とそれに伴う支線の新設	荒蕪地	H26.1.21・22	GL-0.85 m まで掘削、茶褐色土内
156	H25.3265	左京二条四坊十二坪	芝辻町三丁目 112-1 ～ 8、234-2	個人	宅地造成	駐車場	H26.1.22	GL-0.8 m まで掘削、GL-0.5 m 以下は旧耕作土
157	H25.3432	左京三条三坊十二坪 東三坊大路	大宮町四丁目 267 番 1、268 番 1 の一部、268 番 4	㈱セブン-イレブン・ジャパン 代表取締役　井坂隆一	店舗新築	駐車場	H26.1.23	GL-1.3 m まで掘削、灰色シルト質粘土内
158	H25.3248	左京二条六坊三坪 奈良町遺跡	北市町地内	奈良市水道事業管理者	既設配水管改良工事	道路	H26.1.23	GL-0.55 m まで掘削、GL-0.32 m で地山確認
159	H25.3367	左京八条東二坊大路	杏町 1-1	㈲オクムラ	共同住宅新築	宅地	H26.1.23	GL-0.8 m まで掘削、暗灰色シルト質粘土（近世遺物包含層）内
160	H25.3344	右京四条一坊九坪	四条大路四丁目 1-48	大阪ガス㈱ 導管事業部北東部導管部長　大塚　達	ガス管埋設	道路	H26.1.24	GL-1.45 m まで掘削、GL-0.85 m で遺構面（地山上面）確認
161	H25.3425	右京五条四坊十一坪	平松四丁目 586-1、585 の一部	㈱建設㈱ 代表取締役　堀口忠美	分譲住宅新築	宅地	H26.2.4	GL-0.8 m まで掘削、盛土内
162	H25.3434	右京二条二坊五坪	尼辻北町 2270 番地	近畿電気エンジニアリング㈱　代表取締役社長　仁熊泰人	事務所新築	宅地	H26.2.4	GL-1.6 m まで掘削、盛土内
163	H25.3209	左京九条三坊十一坪	東九条町 6-4 の一部	実業印刷㈱　代表取締役社長　沢井啓祐	事務所新築	宅地	H26.2.7	GL-1.8 m まで掘削、GL-1.5 m で地山確認
164	H25.3439	左京四条六坊七坪 奈良町遺跡	寺町 10	大阪ガス㈱ 導管事業部北東部導管部長　大塚　達	ガス管敷設	道路	H26.2.20	GL-0.8 m まで掘削、暗灰色土内
165	H25.1144	史跡大安寺旧境内 附石橋瓦窯跡	大安寺二丁目 1322-1	大安寺 賀主　河野良文	ヤマモミジ・ドウダンツツジの植樹	境内地	H26.2.21	GL-0.5 m まで掘削、盛土内
166	H25.3484	古市遺跡	古市町 1521 番 6	㈱アーネストワン 代表取締役　松林重行	分譲住宅新築	宅地	H26.2.21	GL-0.5 m まで掘削、盛土内
167	H25.3436	右京四条一坊十五坪	四条大路五丁目 2-55	奈良市長	市立都跡幼稚園園庭づくり	幼稚園園庭	H26.2.21	GL-1.4 m まで掘削、GL-1.0 m で旧耕作土確認、黄土灰色砂混シルト質粘土内
168	H25.3466	左京八条三坊七坪 東市跡	杏町 571 番 1・2 の各一部、572 番 1 の一部、572 番 4	個人	賃貸住宅新築	水田	H26.2.25	GL-1.0 m まで掘削、GL-0.7 m で褐灰色粘質土（奈良時代遺物包含層：遺構埋土の可能性あり）確認、GL-0.8 m で地山確認
169	H25.3372	右京三条二坊十二坪	尼辻北町 292-1、298-2	㈱グローバル開発 代表取締役　松本長敏	宅地造成	宅地	H26.2.27	GL-1.9 m まで掘削、GL-1.7 m で地山確認
170	H25.3502	柳生陣屋跡	柳生町 337、340-1	柳生観光協会 会長　三浦孝造	植樹、石碑設置	公園	H26.2.28	GL-0.5 m まで掘削、盛土内
171	H25.3450	西大寺跡	西大寺新田町 501-5	個人	個人住宅新築	宅地	H26.2.28	GL-0.35 m まで掘削、掘削底が耕作土が下面
172	H25.3444	西大寺跡	若葉台三丁目 1864-1 他	ファースト住建㈱ 東大阪支店 代表取締役　中島雄司	分譲住宅新築	宅地	H26.3.3	GL-0.3 m まで掘削、GL-0.15 m で地山確認
173	H25.3465	南市推定地	紀寺町 802 番 5・8	個人	個人住宅新築	宅地	H26.3.6	GL-0.25 m まで掘削、盛土内
174	H25.3498	左京二条五坊北郊	法蓮町 877 番 5	個人	個人住宅新築	宅地	H26.3.6	GL-0.3 m まで掘削、盛土内
175	H25.3424	右京三条三坊八坪	菅原町 103 番 3 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H26.3.7	GL-0.4 m まで掘削、盛土内
176	H25.3409	右京五条四坊一坪	平松三丁目 949、449-29、462-22	ファースト住建㈱ 東大阪支店 代表取締役　中島雄司	分譲住宅新築	宅地	H26.3.7	GL-0.25 m まで掘削、盛土内
177	H25.1114	史跡東大寺旧境内 名勝奈良公園	今小路町	奈良市水道事業管理者	水道管入替	道路	H26.3.10 ～ 11	GL-1.3 m まで掘削、盛土内
			芝辻町				H26.3.11	GL-1.15 m まで掘削、茶灰色粘砂土内
			今小路町				H26.3.1 ～ 12	GL-0.9 m まで掘削、盛土内
			今小路町				H26.3.13	GL-0.75 m まで掘削、黄土色礫土（近世以降造成土）内
			芝辻町				H26.3.17	GL-1.2 m まで掘削、盛土内

番号	届出受理番号	遺跡	届出地	届出者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
178	H25.1148	史跡大安寺旧境内附石橋瓦窯跡	大安寺二丁目1301−1	宗教法人　大安寺 代表役員　河野良文	庫裡の改修	境内地	H26.3.10	GL−0.5 m まで掘削、盛土内
179	H25.3499	右京四条一坊十坪四条条間路	四条大路五丁目1051 番 1	個人	個人住宅新築	荒蕪地	H26.3.12	GL−0.4 m まで掘削、盛土内
180	H25.3512	左京二条七坊三坪奈良町遺跡	北魚屋西町	大阪ガス㈱ 導管事業部北東部導管部長　大塚　達	ガス管引込・撤去	道路	H26.3.17	GL−1.8 m まで掘削、GL−0.7 m で地山確認
181	H25.3359	新薬師寺	高畑町 387−1 の一部	個人	共同住宅新築	宅地	H26.3.19	GL−0.15 m まで掘削、盛土内
182	H25.3480	左京五条二坊十三坪	大安寺西一丁目341 番 10	㈱福岡屋建設工業 代表取締役　入澤邦廣	分譲住宅新築	宅地	H26.3.20	GL−1.4 m まで掘削、GL−1.2 m で地山確認
183	H25.3519	新薬師寺	高畑町	国立大学法人 奈良教育大学 学長　長友恒人	遊具（あずまや）の設置	幼稚園園庭	H26.3.24	GL−0.3 m まで掘削、盛土内
184	H25.3506	平城京跡、元興寺跡、新薬師寺、大乗院跡、奈良町遺跡	北風呂町、椿井町、北室町、元興寺町、高畑町（片原町）、高畑町（本薬師寺町）、南城戸町、川之上町	奈良市長	観光案内看板の設置	道路	H26.3.24・28	GL−0.5 m まで掘削、盛土内
185	H25.3209	左京二条四坊四坪	芝辻町三丁目1 番 9・14	合資会社グッドライフ 代表社員　吉村春雄	共同住宅新築	駐車場	H26.3.27	GL−2.0 m まで掘削、GL−1.1 m で旧河川堆積土確認
186	H25.1159	史跡東大寺旧境内	雑司町 142−2	奈良市長	ガス供給管引込	学校用地	H26.3.27	北部：GL−0.8 m まで掘削、GL−0.15 m以下は灰褐色粘砂（遺物包含層） 中～南部：GL−0.45 m まで掘削、盛土内
187	H25.1155	史跡東大寺旧境内	雑司町 112 番地 6、142 番地 3	大阪ガス㈱ 導管事業部北東部導管部長　大塚　達	ガス供給管引込	道路	H26.3.28	GL−0.7 m まで掘削、盛土内

平成 25（2013）年度 埋蔵文化財保存活用・学習推進事業報告

1. 展示

A　常設展示

対　　象：一般

会　　期：平成 25 年 4 月 1 日（月）～ 6 月 28 日（金）
平成 25 年 9 月 2 日（月）～ 10 月 25 日（金）
平成 26 年 1 月 6 日（月）～ 2 月 21 日（金）
（132 日間）

場　　所：埋蔵文化財調査センター展示室

趣　　旨：奈良市の歴史を埋蔵文化財の展示を通じて知ってもらう。

内　　容：旧石器時代～江戸時代の各時代の埋蔵文化財を遺跡ごとに展示。

観覧者数：1,185 名

B　秋季特別展「平城京を掘る－奈良市埋蔵文化財調査センター３０周年記念－」の開催

対　　象：一般

会　　期：平成 25 年 11 月 5 日（月）～ 12 月 27 日（金）
（40 日間）

場　　所：埋蔵文化財調査センター展示室

趣　　旨：奈良市埋蔵文化財調査センターが今年で設立３０周年を迎えるのを記念し、継続的に行ってきた平城京跡の発掘調査成果を、主要な出土品を通してテーマごとに展示。

観覧者数：696 名

そ の 他：・案内を「しみんだより」11 月号・奈良市役所のホームページに掲載。
・宣伝用のポスター・チラシの作成・配布。
・展示解説用パンフレットの作成。
・事前に報道機関に資料を配布。

C　発掘調査速報展示（2回）の開催

対　　象：一般

趣　　旨：発掘調査などの最新の成果を夏と春の２回に分けて、展示・紹介する。

①夏季速報展示「神功開寶鋳銭遺物と古代銭貨」

会　　期：平成 25 年 7 月 1 日（月）～ 8 月 30 日（金）
（45 日間）

場　　所：埋蔵文化財調査センター展示室前ロビー

内　　容：平城京左京六条一坊十六坪出土神功開宝鋳銭遺物が、平成 25 年 3 月に奈良市指定文化財に指定されたことを記念して、この遺物を展示・公開。古代の貨幣鋳造史を考える上で重要な資料であり、皇朝十二銭や和同開珎の鋳放し銭、縮銭、さまざまな神功開宝、日本古代銭貨のモデル・開元通宝を合わせて展示し、紹介した。

観覧者数：689 名

そ の 他：・案内を「しみんだより」7 月号・奈良市役所のホームページに掲載。
・宣伝用ポスター・チラシの作成・配布。
・展示リーフレットの作成。
・事前に報道機関に資料を配布。

②春季速報展示「東大寺旧境内食堂院地区の調査・奈良町遺跡（今小路町）の調査」

会　　期：平成 25 年 3 月 3 日（月）～ 3 月 28 日（金）
（21 日間）

秋季特別展『平城京を掘る』

夏季速報展示『神功開寶鋳銭遺物と古代銭貨』

表1　月別観覧者数

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
225	265	183	337	352	166	171	407	289	124	90	304

内　　容：平成24年度に調査を行った東大寺旧境内第14次調査（食堂院地区）の成果を今年度実施の遺物整理で見つかった刻印瓦や出土土器とともに紹介。また、今年度実施した奈良町遺跡（今小路町）の調査成果について、平安時代～江戸時代の出土遺物と、写真・文字パネルで紹介した。

観覧者数：299名

そ の 他：・案内を「しみんだより」3月号・奈良市役所のホームページに掲載。
・宣伝用ポスター・チラシの作成・配布。
・展示リーフレットの作成。
・事前に報道機関に資料を配布。

D　常設展示の充実

場　　所：埋蔵文化財調査センター展示室

内　　容：春季速報展示に合わせて展示替えを行い、保存処理や整理作業が終了した最新の資料を盛り込んで充実を図った。また、観覧の補助資料として四つ折A5版のリーフレットを作成した。

E　年間観覧者数　2,913名(239日間)。月平均242名。月別観覧者数は表1のとおり。

2．施設見学の受け入れ

埋蔵文化財調査センター施設見学

(1)

対　　象：大安寺西小学校　6年生95名

期　　日：平成25年5月10日(金)

(2)

対　　象：NPO法人　大阪府高齢者大学校　考古学研究科23名

期　　日：平成25年7月4日(木)

(3)

対　　象：大阪府立今宮工科高等学校グラフィックデザイン系　2年生44名

期　　日：平成25年12月5日(木)

3．講演会・教室の開催

A　埋蔵文化財講演会

対　　象：一般

期　　日：平成25年11月30日（土）

会　　場：埋蔵文化財調査センター講座室

内　　容：・田辺征夫「発掘でしかわからない平城京の実像－奈良市埋蔵文化財調査センター設立30周年に寄せて－」
・センター職員「平城京を掘る」

趣　　旨：秋季特別展の会期中に、展示内容を深く理解するために、平城京の発掘調査成果の紹介と、平城京の実像について専門的な講演を行う。

参加者数：83名

そ の 他：・募集案内を「しみんだより」11月号・奈良市役所のホームページ・秋季特別展ポスター・チラシに掲載。
・事前に報道機関に資料を配布。

埋蔵文化財講演会

埋蔵文化財発掘調査報告会

B　埋蔵文化財発掘調査報告会

対　　象：一般

期　　日：平成 26 年 3 月 15 日 (土)

内　　容：平成 25 年度に実施した発掘調査の成果報告をセンター職員が行った。

・「東大寺旧境内食堂院地区の発掘調査」

・「奈良町遺跡（今小路町）の発掘調査」

会　　場：埋蔵文化財調査センター講座室

趣　　旨：平成 25 年度実施の埋蔵文化財調査の成果について、職員が図や写真などを使用して報告する。

参加者数：51 名

そ の 他：・募集案内を「しみんだより」3 月号・奈良市役所のホームページ・春季速報展ポスター・チラシに掲載。

・事前に報道機関に資料を配布。

C　夏休み親子考古学体験

対　　象：小学 4 年生以上の児童とその保護者

期　　日：平成 23 年 8 月 17 日（土）

内　　容：土器・埴輪・石器・和同開珍などの実物資料を見ながらクイズに答え、粘土への模様のつけ方や瓦の拓本を体験する。

会　　場：埋蔵文化財調査センター講座室

趣　　旨：本物の遺物に触れながら、昔の技術を通して考古学に親しんでもらう。

参加者数：25 名（10 組）

そ の 他：募集案内を「しみんだより」8 月号・奈良市役所のホームページ・ツイッターに掲載。案内チラシの配布・掲示

夏休み親子考古学体験

4．市民考古学講座

対　　象：一般

期　　日：平成 25 年 7 月 10 日（水）～平成 26 年 3 月 5 日（水）、毎月 1 ～ 2 回、全 13 回（表 2）

内　　容：埋蔵文化財調査センター職員、市民考古学サポーターが講師を勤める講座。生涯学習の一環として体系的に考古学を学び、文化財ボランティア活動を実践する際に必要な基本的知識と技能を身につけ、地域における歴史文化遺産の保護活用のリーダーとして活躍できる人材の育成が目的。

受講者数：25 名

そ の 他：・案内を「しみんだより」6 月号と奈良市役所のホームページに掲載。

表 2　市民考古学講座日程一覧表

	日　時	講　座　名
第　1　回	7 月 10 日	開講式・オリエンテーション・考古学とは何か
第　2　回	7 月 24 日	石器のはなし・縄文人の基礎知識
第　3　回	8 月 7 日	弥生・古墳時代の基礎知識
第　4　回	9 月 18 日	佐紀古墳群を訪ねる (実習)
第　5　回	9 月 25 日	奈良の都平城京
第　6　回	10 月 9 日	古代の土器・古代の瓦
第　7　回	10 月 16 日	平城宮跡をみる (実習)
第　8　回	11 月 6 日	発掘現場をみる (見学)
第　9　回	11 月 27 日	発掘作業の流れ
第 10 回	12 月 11 日	舞台裏 (整理作業) をみる
第 11 回	1 月 15 日	拓本のとり方 (実習)
第 12 回	2 月 19 日	奈良町と中近世の土器・陶磁
第 13 回	3 月 5 日	土器類の分類整理 (実習)・閉講式

5．市民考古サポーターの活動支援

市民考古学講座終了後、希望者を「市民考古サポーター」として登録し、奈良市の埋蔵文化財保護を支援していただくとともに、楽しみながら学ぶ場を提供する。

対　　象：平成 24 年度の受講修了者

登録人員：14 名（登録総人数 73 名）

活動開始：平成 25 年 6 月～

活動内容：土器洗浄などの遺物整理、展示作業の補助、講座の準備、受付、体験学習の補助や施設見学の案内、発掘調査実習の補助などに参画。

月平均活動延べ人数：124 名

6．体験学習・実習の受け入れ

A　市立高校体験学習

（1）
対　　象：一条高校人文科学科２年生　39 名
期　　日：平成 25 年７月 22・23・24 日
場　　所：平城京跡発掘調査現場（大森西町）
内　　容：発掘調査の体験実習

（2）
対　　象：一条高校人文科学科１年生　40 名
期　　日：平成 25 年 10 月１日（火）
場　　所：埋蔵文化財調査センター
内　　容：出土遺物の整理実習（洗浄・注記・拓本）

B　中学校職場体験学習

（1）
対　　象：伏見中学校２年生　男子３名
期　　日：平成 25 年７月 29 日（月）～ 31 日（水）
場　　所：埋蔵文化財調査センター
内　　容：遺物洗浄・注記・拓本

（2）
対　　象：田原中学校２年生　女子１名
期　　日：平成 25 年９月４日（水）～６日（金）
場　　所：埋蔵文化財調査センター
内　　容：遺物洗浄・注記・拓本

（3）
対　　象：春日中学校２年生　男子３名
期　　日：平成 25 年９月 10 日（火）～ 12 日（木）
場　　所：埋蔵文化財調査センター
内　　容：遺物洗浄・注記・拓本

（4）
対　　象：平城西中学校２年生　男子３名
期　　日：平成 25 年 10 月 21 日（月）～ 23 日（水）
場　　所：埋蔵文化財調査センター
内　　容：広報発送・遺物洗浄・注記・拓本

（5）
対　　象：登美ヶ丘中学校２年生　男子２名・女子１名
期　　日：平成 25 年 11 月 12 日（火）・13 日（水）
場　　所：埋蔵文化財調査センター
内　　容：遺物洗浄・注記

（6）
対　　象：都跡中学校２年生　男子３名
期　　日：平成 25 年 11 月 20 日（水）～ 22 日（金）
場　　所：埋蔵文化財調査センター
内　　容：遺物洗浄・注記・拓本

（7）
対　　象：京西中学校２年生　女子３名
期　　日：平成 26 年１月 22 日（水）～ 24 日（金）
場　　所：埋蔵文化財調査センター
内　　容：遺物洗浄・注記・拓本

C　奈良県立大学インターンシップ

対　　象：奈良県立大学２回生　女子１名
期　　日：平成 25 年８月 20 日（火）・21 日（水）
場　　所：埋蔵文化財調査センター
内　　容：出土遺物・資料の整理実習、発掘体験

発掘調査の体験学習（一条高校）

職場体験学習（平城西中学校）

7．文化財学習用キットの貸出し

対　　象：奈良市内の小中学校
趣　　旨：市内の発掘調査で出土した石器・土器・瓦などの実物資料を教員用の解説書を付けて小中学校などへ貸し出し、社会科学習、郷土を知る学習の補助教材として利用してもらう。また、埋蔵文化財調査センターを見学する小中学生・自主活動グループにも「触れることのできる文化財」として使用する。

資料の内容：

①縄文土器と弥生土器

②縄文時代の石鏃と弥生時代の石鏃・石包丁

③古墳時代の埴輪と須恵器

④－１土器Ａ・④－２土器Ｂ　奈良時代の土器

⑤奈良時代の瓦　軒丸瓦・軒平瓦

⑥奈良時代の硯と墨書土器・和同開珎

（1）

場　所：飛鳥中学校

期　日：平成 25 年 10 月 1 日 (火)～ 10 月 8 日 (火)
　　平成 25 年 11 月 1 日 (金)～ 11 月 8 日 (金)

資　料：①・④・⑤・⑥

8．職員の派遣（講師など）

A　一条高校人文科学科「総合文化研究」授業

期　日：①平成 25 年 7 月 11 日 (木)
　　②平成 25 年 9 月 17 日 (火)

場　所：一条高校 (奈良市法華寺町)

派遣人数：①②各 1 名

内　容：①発掘調査について　②考古学とは何か

B　奈良の文化財をもっと知る講座２０１３

期　日：平成 25 年 7 月 20 日 (土)

場　所：赤膚山元窯

派遣人数：1 名

内　容：赤膚焼絵付け体験・土器の歴史

C　奈良県立橿原考古学研究所付属博物館秋季特別展「美酒発掘」研究講座

期　日：平成 25 年 10 月 6 日 (日)

場　所：奈良県立橿原考古学研究所

派遣人数：1 名

内　容：奈良町遺跡と酒造り

D　平成 25 年度奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会「発掘調査報告会」

期　日：平成 26 年 3 月 1 日（土）

場　所：平群町中央公民館

派遣人数：1 名

内　容：火鑽（ひきり）と燧（ひうち）

9．出土遺物保存処理

埋蔵文化財調査センターで保管･管理している金属製･木製の遺物について、化学的保存処理を計画的に行い恒久的な保存を図った。

(保存処理資料)

・赤田横穴墓群出土の鉄鏃 11 点・鉄鎌 1 点・鉄釘 21 点

・平城京跡出土の鑰 2 点・鉄鏃 1 点・鉄斧 1 点・掛矢 1 点

10．保管資料・写真の貸出し・閲覧等

埋蔵文化財調査センターで保存・管理している遺物・写真などの貸出・提供・掲載許可を行った。また、学術研究等に関わって、資料の閲覧を受け入れた。

A　遺物などの貸出　9 件 (表 3)

B　写真などの貸出・提供・掲載許可　14 件 (表 4)

C　学術研究等に関わる資料閲覧　10 件 (表 5)

表 3　遺物などの貸出

	貸出機関	使用目的	貸出期間	貸出内容
1	東京国立博物館	平成館考古展示室に常設展示	H 25.4.1 ～ H 26.3.31	平城京跡出土木簡 (模造品)10 点 (礫進上木簡 1 点、月借銭進上木簡 1 点、豹皮分銭付札 1 点、淡皮御田坊奴商指木簡 1 点、北宮対嶽木簡 1 点、衛府進塩付札 1 点、禄布付札 1 点、槐花池上木簡 1 点、造酒司符 1 点、瓦進上木簡 1 点)、分銅 (模造品) 1 点 (平城京跡第 167 次調査出土)
2	飛鳥資料館	春季特別展「飛鳥寺展 2013」に展示	H 25.4.18 ～ H 25.6.5	平城京 291 次調査出土瓦 6 点
3	元興寺文化財研究所	春季企画展「元興寺創建」に展示	H 25.4.22 ～ H 25.6.7	元興寺旧境内 7・39・51 次調査出土遺物 9 点
4	橿原考古学研究所付属博物館	春季特別展「5 世紀のヤマト ～まほろばの世界～」に展示	H 25.4.12 ～ H 25.6.27	ベンショウ塚古墳出土遺物 45 点　西大寺東遺跡出土柱根 2 点
5	橿原考古学研究所付属博物館	連報展「大和を掘る 31」に展示	H 25.7.3 ～ H 25.9.5	西尻広 1・2 号墳出土遺物 19 点　奈良町遺跡出土遺物 18 点
6	橿原考古学研究所付属博物館	秋季特別展「美酒発掘」に展示	H 25.9.17 ～ H 25.12.6	平城京跡・元興寺旧境内・東大寺旧境内・大安寺旧境内・正暦寺旧境内・東紀寺遺跡出土遺物 64 点

	貸出機関	使用目的	貸出期間	貸出内容
7	(公財) 横浜市ふるさと歴史財団横浜ユーラシア文化館	特別展「遣唐使は見た！－憧れの国際都市長安－」出陳	H 25.10.22～H 26.1.16	イスラム陶器・「皇甫東朝」墨書土器・人面付鼎脚・ココヤシ容器・奈良三彩小壺・那須白磁瓶
8	奈良大学文学部文化財学科	講座「奈良市の遺跡」の教材として使用	H 25.11.13～H 26.3.31	平城京 672 次調査 SE02 出土遺物
9	奈良市史料保存館	企画展「奈良町の動物～馬・猫・"慰鳥」～」に展示	H 26.1.7～H 26.3.27	馬形埴輪・土馬・杏葉鐙・土人形・墨書土器・犬形土製品・陶磁器・墨書曲物底板・双鳥文六綾鏡

表4　写真などの貸出・提供・掲載許可

	申請日	申請機関（申請者）	目的	内容	その他
1	H 25.5.7	株式会社捷山園	森郁夫・敏中五百樹『鎬めとまじない の考古学（下）』に掲載	平城京 579・608 次調査写真・道橋変遷図	貸出・掲載許可
2	H 25.5.20	製作プロダクション たまゆらスタジオ	びあ MOOK『歴史めぐり　古事記編』に掲載	巫仁天皇陵航空写真	貸出・掲載許可
3	H 25.7.3	大手前大学　史学研究所	『兵庫県関係古代木簡集成』に掲載	平城京 73 次調査出土「播磨国」木簡写真（『木簡研究』7 号から直接転載）	使用許可
4	H 25.7.5	NHK 文化・福祉番組部部長　田波宏視	NHK 番組『先人たちの知恵袋』で放映	奈良町遺跡（平城京 593 次調査）出土菊紋刻印平瓦	撮影許可
5	H 25.8.5	津山市教育委員会 教育長	津山郷土博物館展示図録「土の棺に眠る～美作の陶棺～」に掲載	赤田横穴墓群 1・5 号墓出土陶棺写真	貸出・掲載許可
6	H 25.8.16	新之介文庫 代表　太田新之介	太田新之介『伊勢神宮（仮題）』に掲載	杉山古墳出土家形埴輪写真	貸出・掲載許可
7	H 25.10.22	公益財団法人竹中大工道具館　植村昌子	シンポジウム「平城宮の様子はここまで分かった！平城宮跡をどうやって楽しむ？」の会場掲示ポスターに使用	平城京 520 次調査出土の屋根板材写真（櫃考博撮影写真）	掲載許可
8	H 25.11.1	木簡学会会長　笹野和己	木簡学会編『木簡研究』第 35 巻に掲載	西大寺旧境内 25 次調査出土木簡写真 4 枚（奈文研撮影写真）	掲載許可
9	H 25.11.20	株式会社　しなのき書房	しなのき書房『信濃歴史の焦点』（仮題）に掲載	西大寺旧境内 25 次調査出土「東海道・東洞道」木簡写真	貸出・掲載許可
10	H 25.12.10	広島大学大学院生	広島大学考古学研究室紀要第 6 号に掲載	弧塚横穴 3 号横穴陶棺写真（申請者撮影写真）	掲載許可
11	H 25.12.19	（株）新泉社	シリーズ「遺跡を学ぶ」094 今尾文昭『古紀古墳群』に掲載	コナベ古墳外堤埴輪列写真・法華寺旧内古墳前方部及び出土埴輪写真 4 枚	貸出・掲載許可
12	H 26.1.24	（株）オフィス三統士	宝島社『古墳で見る古代史』に掲載	佐紀古墳群航空写真・ウワナベ古墳航空写真・佐紀陵山古墳航空写真 3 枚	貸出・掲載許可
13	H 26.2.3	河内長野市教育委員会	シリーズ河内長野の遺跡 8『三日市遺跡・宮山遺跡・三日市北遺跡～河内長野の縄文時代～』に掲載	平城京 283 次調査出土の飾り弓　弓腹写真 1 枚・側面写真 1 枚	貸出・掲載許可
14	H 26.2.4	橿原考古学研究所附属博物館	春季特別展図録『弥生時代の墓－死者の世界－』に掲載	平城京 338 次調査（植木遺跡）写真 5 枚・ゼニヤクボ遺跡写真 4 枚・ゼニヤクボ遺跡出土弥生土器写真 4 枚	貸出・掲載許可

表5　学術研究等に関わる資料閲覧

	閲覧日	申請者	目的	閲覧資料名
1	H 25.4.23	奈良文化財研究所職員	個人研究	平城京 266 次調査出土唐花六花鏡
2	H 25.6.6・7	京都大学大学院学生	個人研究	市内遺跡出土瓦質土器
3	H 25.6.10	広島大学大学院学生	個人研究	赤田横穴墓群出土陶棺
4	H 25.9.10、10.17	奈良文化財研究所職員	個人研究	菅原東遺跡埴輪窯跡群出土蕨形埴輪
5	H 25.8.19 ～ 9.30	帝塚山大学大学院学生	個人研究	平城京跡出土製塩土器
6	H 25.10.29	木津川市教育委員会職員	比較検討	平城宮式 6225 F 型式軒丸瓦（第 169 次調査出土資料）
7	H 25.11.15	奈良文化財研究所職員	類例調査	古市城跡・平城京 251 次調査出土の土管
8	H 25.12.4	東海大学教員	個人研究	市内遺跡出土の車輪石・石釧・合子
9	H 25.12.5	四條畷市教育委員会職員	類例調査	奈良市所蔵の素鋺鏡・小型海獣葡萄鏡
10	H 26.2.12	兵庫埋蔵銭調査会会員	私蹄銭調査	奈良市所蔵の和同開珎・神功開宝・富壽神宝

印刷・製本仕様データ

表　　紙 ： アートポストカード220kg/㎡・マットpp加工
見 返 し ： 白色上質紙110kg/㎡
巻頭図版 ： 特アート紙135kg/㎡
本　　文 ： 白色マットコート紙104.7kg/㎡
本文フォント ： ヒラギノ明朝体
製　　本 ： 縦開き・糸かがり綴じ

ⓒ2016 by the Nara Municipal Board of Education
No part of this publication may be copied or reproduced in any form without written permission from the copyright owner. Printed in Japan.

奈良市埋蔵文化財調査年報

平成25(2013)年度

ISSN 1882-9775

印　刷　平成 28 (2016)年3月18日

発　行　平成 28 (2016)年3月28日

編　集　奈良市埋蔵文化財調査センター
630-8135　奈良市大安寺西二丁目281番地
TEL　0742－33－1821
FAX　0742－33－1822
URL http://www.city.nara.nara.jp/
E-mail　maizoubunka@city.nara.lg.jp

発　行　奈良市教育委員会
630-8580　奈良市二条大路南一丁目1－1
TEL　0742－34－1111(代)

印　刷　株式会社　近畿印刷センター
630-8325　奈良市　西木辻町121-2-404

ISSN 1882-9775

ANNUAL RESEARCH REPORT OF ARCHAEOLOGY IN NARA CITY AREA 2013

CONTENTS

Ⅰ PRELIMINARY REPORTS OF ARCHAEOLOGICAL EXCAVATION IN NARA CITY AREA IN 2013

Ⅱ REPORTS OF CONSERVATION AND MANAGEMENT FOR ARCHAEOLOGICAL SITE AND MATERIALS IN 2013

NARA MUNICIPAL BOARD OF EDUCATION
2016

ANNUAL RESEARCH REPORT

OF

ARCHAEOLOGY IN NARA CITY AREA

2013

NARA MUNICIPAL BOARD OF EDUCATION, 2016